

明治三十六年三月

金口講話抄

正教會編輯局

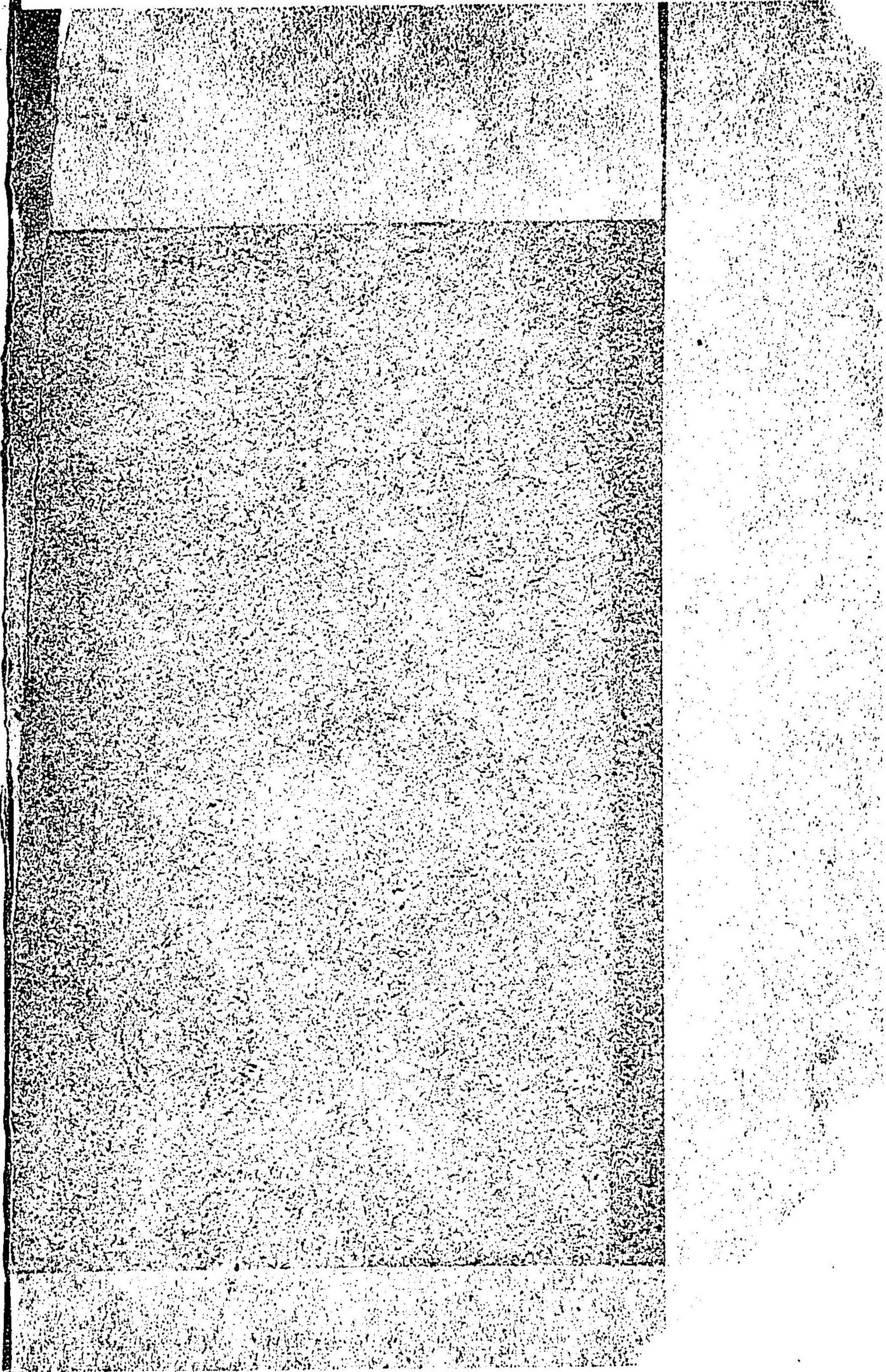
25
52

金口

講話抄

正教會編輯局

明治三十六年三月



金口聖イオアンの遺著の我正教の教理上に於る價值は大なり殊に其所説は平易にして人の肺腑に入り易く而も深く神靈の妙域に造詣して人の靈性を涵養する力亦甚だ大なり然れば我日本の教會に於て其遺著又は抄録の譯出せらるゝ者年々與に多きは洵に適當の事なり然れども概れ皆大冊にして購讀に便ならず是れ余が拙譯哥林多前書講話中より十數編を抄録して全信諸兄弟と與に千有五百載の下此偉大高德の聖神父に私淑する所あらんを欲する所以なり

さばれ此書に載する所多くは現世の幸不幸の事に關し殊に貧富の事に關せり現世の幸福を輕じては來世の幸福の重す可きを説き貧を揚げては富を貶せり一見厭世を説き貧窮を勸むるが如し然れども是れ皮相のみイオアンは奢侈を非難し不徳を攻撃するのみ現世の不幸と貧を恐れず幸福と富とを善用し一意神旨を奉じて至大の幸福を嗣ぐとを促すのみ神の爲人の爲將又至大の幸福の爲に現世の幸福を抛擲するは最嘉賞す可き事なれどもイオアンは之を強ひざるなり況や空しく厭世を説き貧窮を勸むるをやハリストスが童貞の事に關して之を納るゝとを能する者は納るべし(四十二)と云へるは結婚不結婚のものとみならず貧富のとも幸不幸のとも亦味ふ可き言なり要は只何事に付けても人各其召に應じて能くせん限りを爲す可しと言ふのみ

(一) 元來金錢其他財産は處世上必要の物なり貯蓄獎勵の今日に在りては殊に之を説明するの要なし然れども我等人類の爲に最切要なるは金銀財寶に非ずして須臾も離る可からざる

(二) 道德なり國家に於るも然り勤儉貯蓄美風なりと雖此一事のみにて能く人の尊きを爲し得べきか安心立命を得べきか富國強兵重んず可しと雖徒らに富を積み兵を練るのみにて國家窮竟の目的を達し得べきか其は兎に角我等は物質的満足を以て精神的要求を満し得べきに非ず餅を要する者豈石を得て満足せんや故に徳難行の大功を建つるに足らず平凡の道を修する者も勤儉貯蓄すると共に其他の美德をも研くを要す元來人は信を以て神に近づく可き者なり信すると共に又善行を以て神に近づく可き者なり神に近づくには能くせん限り大なる徳を建つるを貴ぶと雖優りに之を強ふるは道に非ず故にイオアンは之を強ひず只人の各其召に應じ貧富幸不幸を一貫して徳を建つべきを説けり且曰く諸徳の中最大なる者は愛なり愛は諸善の泉なりと彼はハリストス將バワルと共に第一に愛を促せり此れ實に最服膺す可き言なり殊に其の貧者富者の間に愛の連結を置く可きを説けるは大に味ふ可き言なり今其理由の一端を言はんも貧者富者の間若し愛を存せば現に社會の一大問題たる資本家と労働者と地主と小作との不和なく職工虐待なく同盟罷工なかるべし固より人は完全ならざるが故に機に臨みて他の方法を以て其缺陷を補ふを要すと雖之のみを以て足れりとするは人生の善美に進むを否認するなり人生に完全に趣く必要なしとするなり若し必要ありせば諸徳殊に愛を大に養ふを要するなり然るに又今日多少新知識を有する者は助すれば云ふ宗教は今日に於ては既に其必要を見ず昔日に於ては教法家は大に社會を益したりしも今日に於ては慈善事業の如き公益事業の如き俗人之

れを爲して教法家は唯稀に金錢を醜集するのみと是れ宗教の本旨をすら曲解せる言のみ人事の道德的價値を其形式に存して内面に存せずと爲す言のみ事業の外觀殊に金錢の多少のみを以て人事を評價せんとするのみ往年新知識を有すと稱せし輩は我邦古風の道德家を一概に虚禮を重んずる者形式に拘泥する者として揶揄嘲笑當ならざりしが今や又一の極端より他の極端に走りて宗教をも道德をも有らゆる善事を擧げて終に全く形式上の事と爲し了らんと欲するに似たり然れども世は常に慈善事業將公益事業を以て我利慾又は虚榮心の爲にする者尠からざるを證するに非ずや殊に況や嘗て黄金萬能主義に醉はんとせし我日本も貯蓄獎勵の今日に於てすら其主義の非を叫ぶ者漸く多きを加ふるに非ずや是に於てか我等はハリストス將バワルの言を玩味せざる能はざるなりハリストス嘗て「ニレプタ」を獻養函に投ぜし稜を稱揚して曰へらく「此貧しき稜は凡そ獻養函に投ずる者より多く投じたり」ニレバワルは曰く「我悉く我が所有を施し又我が軀を焚くに委ぬとも若し愛なくば我一も益なし」と誠實を以て神を熱愛し人を切愛し且自ら欺かずば貧富幸不幸を通じて我は常に神に近づくを得イオアンは實に之を説き勸むるなり

但しイオアンは極めて其職に忠なりき身は配流せられんとも刑戮せられんとも群羊の迷妄惡風を矯正して牧會の任を全うせんを期したりき故に其語は時に激越なると無きに非ず例せば曰く黄金は人を人たらしめずして野獸及冤鬼たらしむと此れ本書に收むる所なり此くの如き語は今一々之を枚擧するに勝へず總て是れ事物の醜惡不快の點を擧げて其

(三)

(二)

道德なり國家に於るも然り勤儉貯蓄美風なりと雖此一事のみにて能く人の尊きを爲し得べきか安心立命を得べきか富國強兵重んず可しと雖徒らに富を積み兵を練るのみにて國家窮竟の目的を達し得べきか其は兎に角我等は物質的満足をして精神的要求を満し得べきに非ず餅を要する者豈石を得て満足せんや故に徳離行の大功を建つるに足らず平凡の道を修する者も勤儉貯蓄するに共に其他の美德をも研くを要す元來人は信を以て神に近づく可き者なり信するに共に又善行を以て神に近づく可き者なり神に近づくには能くせん限り大なる徳を建つるを貴ぶと雖優りに之を強ふるは道に非ず故にイオアンは之を強ひず只人の各其召に應じ貧富幸不幸を一貫して徳を建つべきを説けり且曰く諸徳の中最大なる者は愛なり愛は諸善の泉なりと彼はハリストス將バウルと共に第一に愛を促せり此れ實に最服膺す可き言なり殊に其の貧者富者の間に愛の連結を置く可きを説けるは大に味ふ可き言なり今其理由の一端を言はんも貧者富者の間若し愛を存せば現に社會の一大問題たる資本家と労働者と地主と小作との不和なく職工虐待なく同盟罷工なかるべし固より人は完全ならざるが故に機に臨みて他の方法を以て其缺陷を補ふを要すと雖之のみを以て足れりとするは人生の善美に進むを否認するなり人生に完全に趣く必要なしとするなり若し必要ありせば諸徳殊に愛を大に養ふを要するなり然るに又今日多少新知識を有する者は助すれば云ふ宗教は今日に於ては既に其必要を見ず昔日に於ては教法家は大に社會を益したりしも今日に於ては慈善事業の如き公益事業の如き俗人之

れを爲して教法家は唯稀に金錢を醜集するのみと是れ宗教の本旨をすら曲解せる言のみ人事の道德的價值を其形式に存して内面に存せずと爲す言のみ事業の外観殊に金錢の多少のみを以て人事を評價せんとするのみ往年新知識を有すと稱せし輩は我邦古風の道德家を一概に虚禮を重んずる者形式に拘泥する者として擯斥嘲笑音ならざりしが今や又一の極端より他の極端に走りて宗教をも道德をも有らゆる善事を擧げて終に全く形式上の事を爲し了らんと欲するに似たり然れども世は常に慈善事業將公益事業を以て我利慾又は虚榮心の爲にする者尠からざるを證するに非ずや嘗て黄金萬能主義に醉はんとさせし我日本も貯蓄獎勵の今日に於てすら其主義の非を叫ぶ者漸く多きを加ふるに非ずや是に於てか我等はハリストス將バウルの言を玩味せざる能はざるなりハリストス嘗て「レプタ」を獻養函に投ぜし聲を稱揚して曰へらく「此貧しき聲は凡そ獻養函に投ずる者より多く投じたり」とバウルは曰く「我悉く我が所有を施し又我が軀を焚くに委ぬとも若し愛なくば我一も益なし」と誠實を以て神を熱愛し人を切愛し且自ら欺かずば貧富幸不幸を通じて我は常に神に近づくを得イオアンは實に之を説き勸むるなり

(三)

但しイオアンは極めて其職に忠なりき身は配流せられんとも刑戮せられんとも群羊の迷妄惡風を矯正して教會の任を全うせんを期したりき故に其語は時に激越なるも無きに非ず例せば曰く黄金は人を人たらしめずして野獸及冤鬼たらしむと此れ本書に收むる所なり此くの如き語は今一々之を枚擧するに勝へず總て是れ事物の醜惡不快の點を擧げて其

(四) 善美愉快の點に心酔せる者を警戒するのみ決して黄金富貴其他地上の幸福を人皆悉く擷斥せよと言ふに非ず宛も猶食は腹の爲ぞと言ひたらんがごときなり固より黄金も富貴も其他地上の幸福一切之を神靈上の幸福將來世の幸福に比すれば些々たる物のみ殊に人は神使に則る可き者神に則る可き者なり故にイオアンは愛深き者其牧群の可能丈完全ならんことを欲する者として若し能くせば可能丈完全なる徳を建てよと勸むると勿論なり是れハリストスも亦爲せる所なりハリストス富める少者に謂へらく爾完全ならんことを欲せば往きて爾の所有を售りて貧者に施せ且來りて我に従へよイオアンも只之を強ひざるのみハルが凡の人の爲に凡の者と爲れる眞意も之を全じと知るべきなり然ればイオアンの所説を以て平凡の徳を衆人に一概に勸むる爲すも亦大なる僻事なり

此書に載する所の中最人の誤解を招き易きは貧富幸不幸に關する事なり故に今唯之を辨するのみ要するにイオアンは高尚なる理想を懐きて之を己に實現し他人にも各其召に應じて可能丈之を實現せしめんことを志し、敬虔博愛高德の偉人なり故に其著を讀む者誰か崇高の感に撃たれざらんや而して本書は僅々二百頁未滿の小冊子なるが故に此偉人の訓戒の萬一を傳ふるに過ぎずと雖木眼より入る日光も太陽の温熱と光明とを傳ふるが如く此書を熟讀玩味する者も亦此に由りて偉人の熱愛に照應し其高德を欽慕し脊々服膺するに隨ひて歩一步神に近づき不完全なる此社會も漸次其不完全を脱却して眞正に完全なる理想境に進むとを得べし若夫譯文の拙劣編輯上の缺點は一に余が罪のみ 編者識

金口講話抄目次

前編

無益の穿鑿を休めて徳を積むべし.....	一
眞の幸福を求めよ.....	一一
富者よ醒めよ.....	二七
恒に主の事に富め.....	三四
不幸を忍耐すべし.....	三九
徒らに死者の涙を泣かさざれ.....	五三
夫婦各其徳を守れ.....	六三
公祈禱の時宜しく謹慎すべし.....	七八
爾等各自ら矜恤金を蓄ふべし.....	八九

後編

隣を妒む勿れ卑む勿れ貧窮を恐るゝ勿れ……………九六

愛を追ひ求めよ……………一〇九

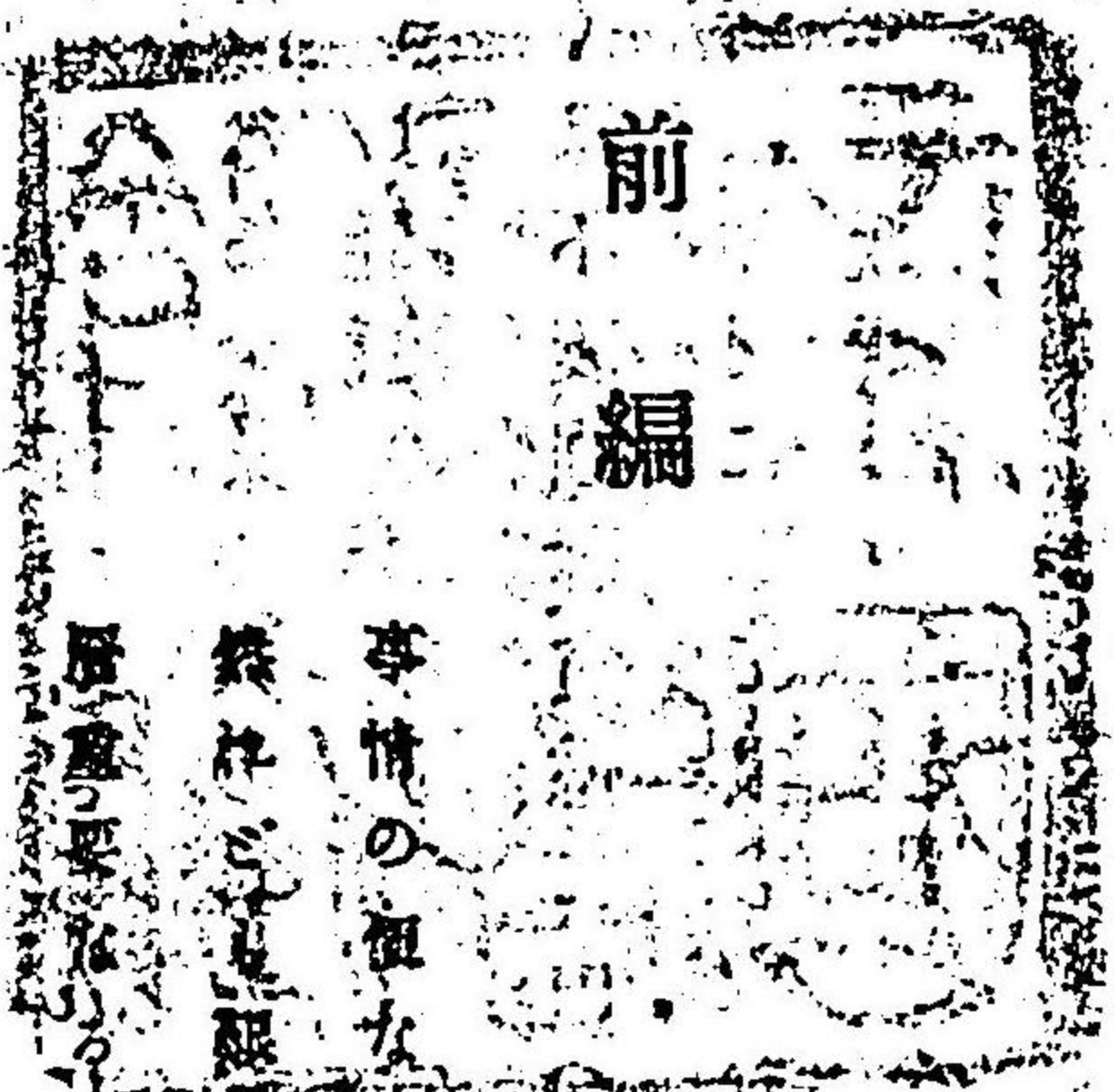
大なるかな愛の徳……………一三三

愛は永く墮ちず……………一四八

我等は愛を以て互に相教誨せん……………一六三

金口講話抄

吉田葩韋勒編



前編

事情の便なる時善を行ふは大なる事なり
 然れども此種難の時善行を離れざるは尙一
 層重き事なり本なり 金口聖イオアン

無益の穿鑿を休めて徳を積むべし

〔聖使徒パウロ〕コリント人を諭して曰へらく、神は己の欲する所に隨ひ
 己の權に由りて各人に〔屬神の賜を頒ち與ふ〕〔前書十二〕と、言ふことゝる
 無益の穿鑿を休めて徳を積むべし

は我等は悲み歎いて曰はざらん何故余は此賜を受けて彼賜を受けざりしかと我等は當に己の受たる所に満足して喜ぶべし己の受ざる所の爲に心を傷めずして却つて己の力に超ゆる賜を受けざりしとを感謝すべしとなり夫れ是くの如く屬神の幸福に關してすら餘りに好事の者と爲る可からざらんには有形の幸福に關して某の人の富めるは何故なるか某の人の貧窮なるは何故なるかを究めず心を安らかにす可きは猶更の事なり元來富は皆神に由つて來るものに非ず反つて其多くは不義強奪貪慾に由つて來る者なり蓋し財を積まざるを命せし者は如何にして其の求むるを命せざる物を與へん然れども余は尙一層反駁者の口を閉さんが爲に夫の神より富を賜はりたりし古昔の事を言はん夫れ余に答へよ何故アウラアムは富んでイアコフは食物すら乏しかりしかイアコフもアウラアムと同じく義人たりしに非

ずや我はアウラアムイサアキアコフの神なり(出埃及記)と言うて三人のとを主は同様に言ひしに非ずや然るを何故一人は富めるに一人は工夫の如く勞苦せしか何故不敬虔にして且兄弟を憎みたりしイサアコフすら富んでイアコフは彼の如く長き間奴僕たりしか何故イサアコフ常に安全にしてイアコフは勞苦艱難し我日は少なくして且惡し(創世記九)と言ひしか何故預言者たり王たるダワドは常に勞苦せしに其子ソロモンは四十年の間何入よりも安全に生活して大なる平安と名譽を有らゆる快樂とに慰樂することを得しか何故預言者中或る者は大なる不幸に遇ひ或る者は小なる不幸に遇ひしか曰く此れ各預言者に其の遇ひし所の事の有益なりしが故なり故に其各預言者に(主よ)爾の判は大なる濶なり(聖録三十)と言ふとを得るなり神既に是くの如く古の偉大なる人非凡なる人を教導するに一樣の方法を以

無益の勞働を休めて徳を積むべし

てせず乃ち或る人は貧窮を以てし或る人は富を以てし或る人は安
を以てし或る人は不幸を以てして教導したらんには今日に於ても亦
同様の方法を以て教導す可きは猶更の事なり加之我等は又當に多
くの事の神の意思に由つて來らずして我等の害心に由つて來るとを
思はざる可からず言ふと勿れ何故或る人は惡しき人なるに富んで或
る人は義人なるに貧しきかと蓋し我等は此間に對して大に明らか
答へて言ふを得ればなり曰く義人は其の貧しきが爲に何の害をも
受くるとなく反つて益榮譽あるを得れども惡しき人は若し其行を
改めずんば富の爲に反つて苦罰を受くるに至るべく且其の罰を受
るに先なつて富は其人の爲に許多の惡の原因を爲し無數の淵に陥ら
じむると屢なり而して神が之を放任する所以は一には人の意志の自
由を表せんが爲一には餘人をして金錢の爲に狂氣せず金錢に執着せ

ざらしめんが爲なりと爾は言はんか惡しき人若し富んで何の害をも
受けざらんには如何善き人の富むは當然なれども惡しき人の富むは
如何と曰く斯くの如き場合に於ても猶其人は憐む可きなり富は其人
の行ふ惡事と結合して惡を大にするなり善き人は貧しくも寸毫も自
己に害を爲さざれども惡しき人の貧しきは當然の事なり否反つて其
人に利益すら有るなり爾は言はんか某の人は先祖より傳はれる財産
を相續し淫婦及徒食者の爲に之を消費せしも何の害を受けずと曰く
爾は何を言ふか彼は淫を行ふに非ずや然るに爾は猶彼は何の害をも
受けずと言ふか彼は酒を暴飲するに非ずや然るに爾は猶彼は慰樂す
と思ふか彼は放蕩の爲に浪費するに非ずや然るに爾は猶彼を則る可
き者と爲すか己の靈を滅す者よりも不幸なる者は有りや爾若し身
の損傷し不具と爲れる者を見れば其人を視て限りなく憐む可き者と爲

無益の穿鑿を休めて徳を積むべし

六
す可し然るに夫の靈の全く損傷せる者を見ては爾は之を幸福なりと
すら爲すか爾は言はんか彼は己の憐む可きを感じせずと然れども彼は
之を感じざるが故に狂人と同じく愈憐む可きなり己の病めるを知る
者は必ずや醫士を求めて療治を受く可きも己の病めるを知らざる者
は其病を免るゝとをも得ざるなり然るに爾は猶斯くの如き人をも福
なりと爲すか但し其も毫も奇とするに足らざるなり人多くは明德に
無經驗なればなり我等は定罪を受け懲を受け痛苦を免るゝとを得ず
又常に痛心し不愉快に不安心なるも是れ我等が神の我等に示せる安
心なる生活即ち善き行の生活を捨て、自ら他の道を取り即ち無數の
惡を満てたる富み且貪る道を取るに因るなり我等の行ふ所が恰も猶
肉體の美を解せずして、一に只衣裳の美のみを美とし生れながらに美
なる容貌の女子を願みずして、只美なる衣服を着けたる醜しき不具の

女子を選んで己の妻と爲す者の如くなるに因るなり現に多くの人は
善徳及罪惡に關して斯くの如く行ひ天性醜しき罪惡には其外見の美
なるが爲に執着し眞に美なる善徳には其の眞に美なるが爲に之を嫌
忌し反りて其の眞に美なるが爲に愈善徳を愛す可きことを思はざるな
り余は愧ぢ恐なる異教人の中には明德を明らかにする者あり假令實
行の上は於てせずとも少くも思念の上に於て明德を明らかにする
者あり現世の過ぎ去り易きを知る者あるに我等ハリスティアンの中
には反つて其をも知らず悖理の思考をすら有する者あり聖書には常
に下の如く反覆せるに拘らず此の如き者あることを余は愧づるな
り聖書に曰く「惡者を輕んじ主を畏るゝ者を讃め揚ぐ」(聖録十四)「主を畏
るゝ畏は凡の物に勝る」(五ノラフ二十四)「神を畏れ其誠命を守れ是れ凡の人
の本分なり」(傳道書十)「惡者を妬む勿れ」(聖録三十)「人富を致し其家倍

無益の穿鑿を休めて徳を積むべし

榮ゆる時爾懼る、母れ(聖林四十七)人は皆草なり其榮華は凡て野の花
の如し(以養五四)と我等は日毎に之を開き之に類する事を聞きつゝ
も猶地に執着するなり恰も猶未だ十分に文字を學習せざる兒童は順
序を逐はずして或る文字の名を問はるれば他の文字の名を答へて大
笑を招くが如く爾等も亦順序を逐うて諸福を枚舉せらるゝときは鬼
に角其後を逐うて之を枚舉するを得れども若し之を別離して第一
の場所に何を置き第二の場所に何を置き其次々に何を置く可きかを
問はるゝときは何を答ふ可きかを知らずして笑を招く可し實に目未
だ見ず耳未だ聞かず人の心に未だ入らざる(哥林多前 二ノ九)幸福と不死と
を望み待つ人にして現世の幸福を追ひ之を以て執着するに足ると爲
すは笑ふ可き事に非ずや爾若し富の空しき物たり現世の事の影將夢
たり其の飛び散ると烟に似たるを尙も教示せらるゝとを要せんか然

らば當に聖所の外に立ち玄關に止まれ蓋し爾は未だ天の王宮に入る
に堪へざればなり爾若し現世の事の其實質に於て變り易き者過ぎ去
り易き者たるを尙も判断するを得ざらんか然らば如何にして現
世の事を輕んずるとを得べきか若又判断するを得べしと言はゞ某
の人の富めるは何故にして某の人の貧しきは何故なるかを窮め問ふ
とを休めよ之を問ふは猶道路を行いて左の事を問ふが如きなり曰く
某の人は何故色白きか某の人は何故色黒きか某の人の鼻は何故曲つ
て某の人の鼻は何故扁(たひらか)平なるかと斯くの如き事は如何様なりとも
我等の爲に何の必要も無きが如く某の人が富めるも貧しきも我等の
爲には何の必要も無かるべきなり否后の場合に於ては前の場合に於
けるよりも尙一層然る可きなり萬事は只之を使用する方法の如何に
由るのみ假令爾は貧しからんとも若し明德をだに明らかにせば剛勇

無益の穿鑿を休めて徳を積むべし

に生活するを得べく假令富みたらんども若し善行をだに缺かば何人よりも不幸なる者と爲るべし我等に有益なるは善行是なり之を缺けば自餘の諸事は毫も有益ならざるなり元來右の如き問の屢起るは多くの人が己の爲に無益なる事を有益と爲して有益なる事を毫も慮らざるに由るなり我等の爲に有益なるは善行及明德なり然るに爾等は之を去ると甚だ遠し故に爾等の思念に擾亂を生じ許多の波濤及風雨を生ずるなり蓋し天の光榮と天を愛する愛とに遠ざかる者は現世の幸福に趨り就きて其奴僕と爲り捕虜と爲ればなり爾は言はんか我等は何に由つて現世の幸福に趨り就くかと曰く餘りに天の幸福に向つて進まざるに由るなり其は又何に由るか曰く怠慢に由るなり怠慢は何に由るか不注意に由るなり不注意は何に由るか無智に由るなり現世の幸福に戀着して事物の實質を窮むるを欲せざるに由るなり

其は又何に由るか曰く聖書を読まず聖なる人々と談話せずして行惡しき人々の社會を求むるに由るなり然れば我等は此くの如き事なからんやう波濤が一波又一波我等を擡つて惡の海に陥れず溺れて死なしめざらんやう時ある間に起き堅く巖の上に立ち即ち聖なる定理と神の言との上に立つて現世の生活の風雨に注意せん蓋し我等は斯くの如くにして以て自身も危難を免れ難船に遭へる他の人々をも救ひ我等の主イエスス、ハリストスの恩寵仁愛に依つて來世の福樂を受くるを得ればなり彼と父と聖神とに光榮權能尊貴は歸す今も何時も世々に阿民

眞の幸福を求めよ

聖使徒パウロ曰く、バプティストス必ず悉くの敵を其足下に置くに至るま

眞の幸福を求めよ

で玉たるべし(五ノ林多前書十)と。然れば我等は神の諸敵の安樂なるを見
るも之が爲に憂へざらん。蓋し主の敵は烟の消ゆるが如く消えん(聖訓
二十)。縦令爾は神の敵の富み、護衛兵に圍まれ、許多の諂諛者に圍まる、
を見んとも心氣を沮喪すること勿れ。却つて嘆息し、涕泣し、且神が其敵
を歸正せしめて吾友の數中に入れ給はんことを祈るべし。神の敵の所
業の成功するに随つて、愈其敵の爲に泣くべし。罪人の爲には、當に常に
泣くべし。然れども罪人が富有と大なる安樂を以て慰樂するときは、
殊に之が爲に泣くべし。恰も猶病人の爲には、其の暴飲暴食する時殊に
泣く可きが如し。然るに今此語を聞く者の中にすらも、其心情の憐む可
きの甚しき嗚呼我は惘然なる者なり。何一物をも有せずとて、甚しく己
の身上を泣く者あり。此輩が何一物をも有せずと言ふは、實に正當なり。
然れども其は他人の有する物を、其輩の有せざるに因るに非ずして、其

輩の幸福とする所此くの如きに止まるに因るなり。故を以て、此輩は極
めて惘然なるなり。己壯健にして、柔なる臥床に寝ぬる病者を幸福なり
と言ふ者は、病者よりも一層不幸薄命なる者なり。蓋し毫も己の幸福を
感せざれば、なほ今云ふ所の人も亦之に同じ。故に我等の全生涯は、紛亂
混雜を以て満てるなり。前記の如き語は、嘗て無數の人を滅し、之を惡魔
に付し、之を飢ゑ疲れたる者よりも尙不幸なる者と爲せり。實に最多き
を望む者は、赤貧なる者よりも尙貧窮なる者なり。蓋し至つて大なる甚
しき心の憂愁を以て苦めばなり。下に述ぶる所よりして見るを得るが
如し。夫れ我等の住める此市は、嘗て早魃に遇へり。時に諸人は己の生
命を喪はんことを懼れ、神に此處より救はんことを祈り、モイセの
所謂銅の如き天(申命記二十三)と如何にして死するよりも尙恐る可き死
様を見るを得たり。而して其死を諸人は日々俟ちたりしが、後仁

眞の幸福を求めよ

慈なる神の恩恵に依つて、望外にも極めて豊かに雨ふりしかば、諸人は喜び祝うて、死の門を出でたるが如く思ひき。然るに此くの如き恩恵を神より受けたる最中にも、一般に諸人の喜べる最中にも、或る一人の最富める者は憂へ悲みて、宛ら憂愁の爲に死せるものゝ如く、許多の之人に問うて、一般に諸人の喜べる時、何とて爾のみ憂ふるかと曰へば、彼は己の苦しき愁を匿すことすら能くせず、其病の力に驅られて、明々地に其理由を言へり曰く、我は多量の麥を有するも、今之を如何に賣り放つべきを知らずと。余に告げよ、我等は此くの如き語を聞いて、後にも猶此人を稱讚す可きか。然らず、此くの如き語を聞いては、我等は當に此人を認めて如何なる野獸よりも殘忍なる者と爲し、公共の敵と爲して、石撃すべきならん。實に人よ、爾は何を言ふか。爾は黄金を掻き集めんが爲に、凡ての人の死せざりしことを悲むか。爾豈ソロモン^{ソロモン}の云へる所を聞か

ざるか。曰く、穀物を藏めて糶らざる者は、民に誑はる。〔箴言二十六〕と。然るに爾は猶、全地の幸福の公敵、諸人の主の仁愛の反對者、財寶の友否、尙適切に言へば、財寶の奴僕たらんとするか。爾は寧ろ此くの如き舌を切り去るべきに非ずや。此くの如き言を發せる心を抜き取る可きにあらずや。

見しか、黄金は如何に人を人たらしめずして、野獸及魔鬼たらしむるか。黄金を有せんが爲に、日々飢ゑんをも望む富者より、尙卑む可き者はありや。慾は富者に、全然顛倒の所業あらしむるものなり。富者は己の獲たる結果の豊盛なるを喜ばずして、反つて其の獲る所の餘りに大なるが爲に悲むなり。彼は其の有する所の夥多なるが爲に喜ぶ可きに非ずや。然るに彼は反つて其の爲に悲むなり。視よ、余の既に云へるが如く、富者は其の既に得たる幸福に由つて愉快を感ずるよりも、寧ろ其の

未だ得ざる幸福に由つて悲むなり。限なく多量の麥を有せし者は、反つて飢ゑたる者よりも大に悲み傷み、僅に日用の糧を有せし者は喜び樂んで神に感謝せしに、大なる富を有せし者は反つて悲んで己を亡べる者と思ひたり。然れば愉快を致すは、所有物の豊富なるに非ずして、明德なり。明德なき者は、縦令一切の物を掻き集むとも、其心は今云へるが如き状態に在つて一切を失へる者と同じく悲むべし。蓋し我等が今云へる所の人を、雖若し其麥を己の欲する所の價を以て糶りたらば、更に其よりも高價を以て糶らざりしとを悲む可く、其よりも高價を以て糶るを得たらば、尙一層の高價を望む可く、縦令一斗毎に一金貨を得たらんとも、猶五升毎に一金貨を得ざりしとを悲む可し。富者が最初より此の如き價を定めざりきとて、之を異ひと勿れ、爛醉者も最初より直ちに暴飲するに非ずして、其の既に酒に浸るに至つて、己の内に烈しき炎

を燃すなり。富者も亦これ同じ己の有する所多きに隨つて、其の缺乏を感ずると愈甚しく、其の得る所大なるに隨つて、貧窮に陥ること愈甚しきなり。是れ余が獨り此富者に對つてのみ言ふに非ずして、亦凡そ此くの如き病に罹り、貨物の價を貴くして隣を赤貧ならしむる者に對つて言ふなり。彼等は何時とて仁愛を目ざすと無し。貨物を賣捌く時多くの人を導く者は、常に貪欲なり。縦令或る者は麥をも酒をも速に賣放つに、他の或る者は遅く賣放つとも孰れも共に公共の幸福の爲にするに非ず。乃ち一人は能くす可きたけ多くの價を得んが爲、又一人は其の有する貨物の既に損傷せるも、猶些少の價にて賣らざらんが爲なり。神は多くの人の神の誠命に注意せず、凡ての物を己の許に留め置くことを知り、故に又他の方法を以て之に仁愛を促さんぞ欲し、乃ち縦令己むを得ずしてなりとも何か善い事を爲さしめんと欲し、之に大なる損耗の

眞の幸福を求めよ

恐る可きと思はしめ、且地の産する物に永く存するを許さず、以て人々をして、縦令貨物の損傷より生ずる損失を恐れ、已むを得ずしてなりとも、其の嘗て害心を以て地に埋め家に藏めたる貨物を、窮乏者に供せしめんとせり。然れども或る人々の飽き足らざるの甚しき、斯くても猶其心を醒さざるなり。數多の人々は、幾樽の酒を地に流すも、其一盃をも乞食に與へず、一貨幣をも窮乏者に與へざりき。酒酸くなり、樽破損すれば、悉くの酒を地に流しき。又他の或る人々は、麵包の一片をも飢ゑたる者に與へずして、幾倉の麥をも河に投じき。彼等は、窮乏者に施せてふ神の命令を守らざりき。故に腐敗は彼等をして、其意に反いて、凡そ其の藏むる所の者を投棄せしめ、全く腐敗するに任さしめたり。夫れ是くの如くにして、彼等は、大なる嘲笑を招き、損失と共に多くの詛をも己の頭上に招きたり。然れども此は、是れ現世に於ける事なり。來世に於て如何

なる事あらんとするかは、當に如何なる語を以て之を表白すべきか。恰も猶富者が、現世に於て其腐れたる不用の麥を河中に投ずるが如く、此くの如き事を爲して、不用の者と爲れる彼等富者をも、神は將に之を火の川に投せんとするなり。恰も猶麥を蟲及腐敗の食ひ盡すが如く、残酷と無情とは、彼等の靈魂を食ひ盡さんとするなり。而して之が原因を爲す者は、現世の幸福に執着し、現世の生活にのみ戀着する事、是なり。是故に此人々は、限なく煩悶して苦むなり。蓋し爾が愉快とする如何なる事も、死の恐は、盡く之を滅すればなり。此くの如き人は、生前よりして業已に死せるなり。不信者ならば、此くの如き境遇に陥らんとも、毫も異むに足らざれども、既に彼の如く尊き諸機密を領け、彼の如く未來の福樂の事を思ふ者にして、猶現世の福樂に戀着せば、如何にして容赦はるべきを得べきか。然るに又、此現世の福樂に戀着するは何に由るかと言ふに

眞の幸福を求め

奢侈に耽り、肉體を肥し、靈魂に耐え難き重荷甚しき暗黒粗野なる被覆を被らしめて、之を以て其徳を敗らしむるに因るなり。奢侈は由のて、靈魂の尊き部分は奴僕と爲つて卑しき部分は主人と爲り、尊き部分は全く昏み損傷し、誘はれて卑しき部分は何所にも之を誘ひ之を支配す。然れども本来卑しき部分こそ、反つて尊き部分の指揮に従ふべきものなれ。蓋し靈魂と肉體との間には密接の連結ありて、而して造物主が此連結を置きしは、人をして其肉體を惡み、宛ら何か他人の物を視るが如く爲さざらしめんが爲なればなり。

神は嘗て仇敵をも愛するを命じたりき。然るに惡魔は大に勢力を得て、或る人々をして己の肉體をも惡むことを納得せしめたり。蓋し肉體を惡魔より得たりと言ふ者は、實に此くの如き信認を表白するものなればなり。然れども是れ、極めて無智なる言なり。肉體にして果して惡魔

より得たるものならば、肉體の靈魂と現に相一致するは、何に由るか。即ち肉體が凡ての事に於て靈魂の思考する所の善き事を成すに堪ふるは、何に由るか。爾は曰はんか、肉體が果して靈魂の思考する所の善き事を成すに堪ふるものならば、肉體は如何にして靈魂を昏ますかと。曰く、然らざるなり。人よ、靈魂を昏ますは、肉體に非ずして、奢侈なり。然らば我等は何に由つて奢侈に耽るか。曰く、其は我等が肉體を有するに由るに非ずして、惡しき意志に由るなり。肉體の要求するは、食物なり。奢侈に非ず。肉體は己を養ふことを要するのみにして、己に重荷を負はしめ己を肥滿せしむるを要せず。奢侈は、常に靈魂の爲に危険なるのみならず、肥滿せしめらるゝ肉體の爲にも危険なるなり。蓋し肉體は奢侈に由るて強壯なる物より、羸弱なる物と爲り、健全なる物より、不健全なる物と爲り、健康なる物より、病める物と爲り、輕き物より、重き物と爲り、剛健な

る物より柔弱なる物と爲り美しき物より醜しき物と爲り香よき物より臭惡しき物と爲り潔き物より不潔なる物と爲り整齊せる物より整齊せざる物と爲り有益なる物より無益なる物と爲り若き物より年老いたる物と爲り力ある物より力なき物と爲り敏捷なる物より緩慢怠惰なる物と爲り完全なる物より不具なる物と爲ればなり肉體にして果して惡魔より得たるものならば惡魔に屬する物たる惡癖に由つて肉體の損傷すると無きならん否肉體も食物も惡魔に因るに非ずして惟奢侈のみ惡魔に因るなり奢侈に依つて惡鬼は能く多くの惡を行ふなり惡鬼は嘗て此の如くにして至イズライ民を滅したりき聖書に曰く汝は肥え太りて大きくなり己を造りし神を棄(申命記三十三)つと之が爲に雷はソドムの住民を懲したりきイエゼキイリ其事を記して曰へりソドムの罪は是なり彼は傲り食物に飽き酒を縦にしたりき

(以西結九十六)と是故にババカも曰へらく樂を縦にする者は生くとも死せるなり(提摩太前)と何に由つて然るか曰く其人は多くの惡の重荷を負ふ己の肉體を棺として有すればなり肉體既に損傷せんには靈魂は將に如何ならんとするか靈魂は其れ如何なる混雜如何なる波瀾如何なる風雨を以て滿されんとするか靈魂は實に何事にも不能なる者と爲り一も當然なる事を容易には言ふこと能はず聴くと能はず欲すること能はず行ふと能はざる者と爲るなり恰も猶風雨の力が船長の力に勝つときは船長は船及其船にて航する人々と共に溺るゝが如く靈魂も亦肉體と共に恐る可き無感覺の淵に沈むなり神は我等に腹を賜ひたり腹は猶磨車の如し神は之に相當の力を附し其の日々磨り碎く可き一定の量を定めたり故に若し人之に過度の物を入るゝときは其磨り碎かれざる物は反つて至身に害を爲すなり是に於てか疾病虛弱

醜貌は生ずる實に奢侈は昔に及ば衰弱せむひるのななはす美しき女子
 とも醜しき女子と爲すな蓋し美しき女子と雖若し断えず厭ふ可き
 噎を爲し腐れたる酒の臭氣を發し餘りに赤くなるときは女子に相當
 の宜しきを破つて其貌の美しきを全く失ふはなり(美しき女子と雖若
 し其身體衰へ睫毛の逸血走つて眼れ上り全身餘りに肥え太らば其貌
 如何に醜じきか宜しく之を想ふべし余は嘗て醫師より聞けり奢侈は
 多くの人に身の丈の相當に延ぶるをも妨ぐと蓋し生氣が多量の食
 物の爲に惱み其食物の消化を妨むるときは身の丈を延ぶ可き材料は
 餘計の食物を消化するが爲に消費すればなり加之全身に蔓延する僕
 麻質斯痛風其他極めて厭ふ可き諸病も此に由つて生ずるなり其は兎
 に角餘りに肥え太りたる女子の如く醜しきは有らざるなり是故に貧
 乏者の中には反つて美貌の者を見ることを得るなり蓋し貧しき者は

は何も餘計の物なく何も餘計の物が宛ら其人は屬せざる泥土の如き
 物として必要な無益に其體の組織中に入るとなく日々の課業工作
 勞働將適宜の食物適度の食物の節制は強壯なる健康を得せしめ斯く
 して以て其容貌を最美しからしむればなり道ふと勿れ奢侈の愉快な
 ることを其愉快は喉頭を満足せしむるに過ぎざるなり蓋し食物は舌の
 上を過ぐるや否や忽ちに失せて其後に夥多の不快なる事を遺せばな
 り奢侈なる人の横臥せる時のみを觀ずして其の起きたる時を觀其跡
 に隨へ然らば其の人よりも寧ろ家畜に似無言の動物に似たるを知ら
 ん其の眩暈に苦み衰弱し懶惰に寢臺寢道具を要し深窓を求め怒濤の
 時の如く伏し轉び他人の救助を求め其の未だ飽食せざりし以前の狀
 態に復せんことを願ふを知らん彼等奢侈なる人の歩むや宛も妊婦の如
 く重き腹を抱へ漸くにして歩を移し漸くにして視漸くにして言ひ諸

事皆漸くにして行ふ若夫此輩が少時睡むと有らんか彼等は虚妄なる夢を見無智なる妄想を爲すなり更に奢侈なる人の他の狂暴のと言はんか即ち淫慾のと言はんか蓋し淫慾も亦同一の源泉よりして發出すればなり彼等奢侈なる人は宛も荒れ狂へる馬の如く酔に驅られて凡ての人に躍り掛り否此無言の動物たる馬よりも尙一層の無智と狂氣とを以て突進し且口に言ふすら非禮なる他の破廉恥なる事を行ふ蓋し彼等は既に己の如何なる事に遇ふを知らず如何なる事を行ふを知らざればなり然るに奢侈ならざる人は此くの如くならず即ち他人の難船に遇ふを見つゝも己は安穩なる港に在り自由なる人相當の生を送つて深き不斷の快樂を以て慰樂す然れば我等は此事を知つて奢侈の不潔なる快樂を避け飲食に程を守り以て靈魂に於ても肉體に於ても壯健なる者と爲り諸の徳を守り我等の主イ、ス、ハリス、ト、ス

富者よ醒めよ

の恩寵仁愛に依つて來世の福樂をも受くることを得るやう爲さん願はくは彼と父と聖神とに光榮權能尊貴は歸す今も何時も世々に阿民(人若し)現世の乏しき財寶を得て之に戀着することを廢せざらんには宜しく(夫の)「マンナ」の追想して其罰の鑑に畏れ戒むべし蓋し「マンナ」に付いて行はれし所の事は今も貪慾者の上に行はるればなり夫れ「マンナ」をイウテヤ人の得し彼時には如何なる事ありしか曰く餘分の「マンナ」は變じて蟲と爲りたり今も貪慾者の上には此くの如き事行はるゝなり夫れ諸人が身を養ふ爲の量は一なり蓋し我等の満すは唯一の腹なればなり然るに爾奢侈に耽る者は甯ろ腐敗せしむるが多きなり恰も猶在昔法定の量に超えて夥多の「マンナ」を己の家に集めし者は「

富者よ醒めよ

ンカを集めずして、許多の蟲と腐敗を集めしが如し、暴飲暴食する者
 亦奢侈と暴食とに由つて快樂を集めずして甯ろ腐敗を集むるなり
 否、今日の人は彼時の人よりも尙劣れるなり、蓋し彼時の人は一たび彼
 の如き悪を試みて後悔りし、今日の人は彼時の人よりも尙一層危険なる
 蟲を日々己の家に運び入れつゝ之を感せず飽足らざればなり、彼時の
 人の爲し、所と今日の人の爲す所と其の空しさは一なり、然れども其
 の受くる所の罰は後者は前者よりも尙一層甚しきなり、下に述ぶる所
 よりして見るとを得るが如し、抑富者の貧者と異なるは如何なる點に
 在るか、富者として、貧者として、一様の肉體を着るに非ずや、一様の腹を養ふに
 非ずや、然らば富者は何を以て貧者に勝るなるか、曰く、其心勞と出費と、
 神命に反るや、肉體の損傷、精靈の敗徳を以て勝るなり、富者が貧者
 に勝るの點は實に此に在るなり、富者若し數多の人の腹を満しとなら

ば、彼は何事か言ふとを得しならん例せば、我には殊に大なる必要あり、
 我が要する費用は殊に大なりと言ふとを得しならん、爾は曰はんか、今
 日と雖富者は數多の人即ち數多の僕婢を飽足らしむと言ふとを得と、
 然れども富者の此くの如くするは必要に由るに非ず、仁愛に由るに非
 ず、乃ち唯驕傲に由るなり、故に其は富者の爲に辯護の用を爲さざるな
 り、
 (實に)何の爲に數多の召使は有す可きなるか、我等は衣服飲食のどに付
 いて必要の事のみを慮るべきか、如く召使のどに付いて亦當に必要
 の事のみを慮るべきなり、數多の召使は如何なる必要あるか、如何なる
 必要も無きなり、一人の主人は一人の召使を有するのみにて、當然なら
 ん、否尙適切に言はば、二人又は三人の主人に一人の召使が當然ならん、
 若し余の此言が爾の意に適はざらんには、宜しく夫の一人の召使をも

有せずして、而も尙一層善良に服事せらるる者の之を思ふべし抑神の
人を造るや、人が自ら己の爲に盡し、且隣の爲にも盡すに十分堪ふる者
と爲したり、爾若し之を信せざらんには、乞ふパウルの言ふ所を聴け、彼
は曰へり、此の我が手は我乃我と信に在りし者の需に供せり、(使徒行三
四)と天にも昇る可き全世界の教師(パウル)が無数の人に服事するを愧
ぢざりしとは、此くの如し、然るに爾は反つて夥多の奴僕を己に侍せし
めざれば、恥辱とし、其の此くの如くするの、爾の爲に殊に恥辱なるを解
せず、神は我等に召使を要せざらしめんが爲に、手と足とを賜ひたり、奴
僕(僕)の階級の此世に出来しも、必要の爲に非ず、若し必要の爲ならば、ア
ムと共に、奴僕も造られたりしならん、乃ち奴僕(僕)の此世に出来しは、罪の
結果と、神の命に背きたる罰となり、然るにパウロは降臨して、其を
も廢止したり、蓋しパウロは、パウロは於て奴隷も自主もなければ

なり(加拉太三)然れば、奴僕を有するは、其必要あるに非ず、假令必要あり
とするも、其は一人又は多くて二人にて足れり、何の爲にか、許多の召使
を要せん、然るに富者は宛ら羊を賣るが如く、奴僕を賣買するが如く、浴
場又は市場を往來するなり、さばれば、余は決して論争せんとするに非ず、
爾は他にも召使を有せんと欲せば、有せよ、但多く之を集むるは、仁愛に
由るに非ずして、奢侈に由るなり、蓋し爾若し其召使等の幸福を慮らば、
其一人をも己に服事せしめず、反つて彼等を買ひ入れて、後之に職業を
學ばしめ、之に自活の道を得せしめ、且之を放つて自由の者と爲す可
ければなり、然るを若し彼等を鞭うち、彼等を束縛せんには、其は既に仁愛
の所爲に非ざるなり、余は知り、余の今言ふ所は、聽者の意に適はざる
とを、然れども如何にせん、余は之を言ふが爲に立てられたり、縱令如何
様かの利益あらんとも、無からんとも、余は之を言ふとを廢せざるべし、

富者と隠りよ

嗚呼爾は如何なれば彼の如く傲然として市場を緩歩するか爾豈野獸
の間を行くか如何なれば遇ふ所の人々を逐ひ散すか恐るゝと勿れ通
り行く者も近づく者も一人として咬み着かざるなり爾豈諸人と偕に
行くを以て耻辱と爲すか嗚呼如何に無智なるとかな如何に奇怪なる
とかな爾の傍を馬行くも爾は之を耻辱と爲さず而も人を遠く若干の
距離に逐ひ拂はざれば耻辱と爲すとは加之爾は何の爲に杖を捧ぐる
者を己の周圍に侍せしめて自主なる人々を待すること奴隷の如くし
或は尙適切に言はば如何なる奴隷よりも尙愧づ可き生活を自ら送る
か實に此くの如く驕傲に身を處する者は如何なる奴隷よりも尙卑し
き者なり斯くまで危険なる悪慾に身を隷屬せしむる者は眞の自由を
見ざる者なり爾若し己の行く路を清め前方へ進まんと欲せば通り行
く者を逐はすして驕傲を逐ふべし僕の手を藉らずして親ら之を逐ひ

彼の如き鞭を用ひずして神靈の鞭を用ふべし今や爾の僕は通る行く
者を逐ひ拂はざるも彼が驕傲を逐ふより尙木なる侮辱を以て驕傲は上
より爾を窘むるなり爾若し馬より下りて謙遜を以て驕傲を逐はば爾
は此に由つて反つて尊き地位を得己を愈々榮ならしめて之が爲に
も奴僕の手を藉ることを要せざるべし蓋し爾若し謙遜にして地を行
かば爾は謙遜の車に乗るにて謙遜の車は羽翼ある馬を駕し爾をして
天にも昇らしむればなり然るに若し其車を下つて驕傲の車に乗ると
きは爾は地を這ふ匍匐動物に比して毫も勝る所なかるべし否匍匐動
物よりも尙劣り尙不幸なるべし蓋し彼動物をして地を這はしむる者
は其肉體の不完全なれども爾をして彼の如くせしむる者は驕傲の病
なればなり聖書に曰く凡そ自ら高くする者は卑くせられん(路加十八
と然れば我等は卑くせられずして高くせられんが爲に眞の高處に登

富者と醒めよ

らん蓋し我等は此くの如くして以て神の約束の如く靈魂の安んを得
（馬太十一）至高なる眞の尊榮に達するを得ればなり願はくは我等は
昔我等の主イエスキリストの恩寵仁愛に依つて此くの如くなる
を得んことを彼と父と聖神とに光榮權能尊貴は歸す今も何時も世々
に阿民

恒に主の事に富め

「聖使徒パウロ曰く恒に主の事に富め（哥林多前書十）と言ふこゝろは豊
盛に善を行へとなり是れ我等が來世の福樂を受けんが爲に課せられ
たる勞なり然れば愛す可き者よ我等は夢に耽らざらん不注意なる者
も奢侈不節制なる者も共に天國に入るを得ざるなり至く入ること
を得ざるなり却つて己の肉體を弱らせ無数の勞を忍ぶべきは我等は

天の福樂を受くることを得るなり爾等豈知らざるか天と地との間に
如何なる距離あり我等の前途に如何なる戦闘あり人は如何に惡に傾
き罪は如何に我等を圍み如何なる網を敷多張るかを嗚呼我等は何の
爲に當然の心勞の上に尙斯くまで心勞を爲し斯くまで多くの不安心
を招き斯くまで大なる重荷を負ふか我等は豈腹衣服居室の心を心勞
するのみにて足らざるか必要の物のことを慮るのみにて足らざるかハ
リストスは豈此等の心勞をも我等より遠ざけしに非ずや彼は曰へり
「爾等の生命の爲に何を食ひ何を飲み爾等の身體の爲に何を衣んと慮
る勿れ（馬太六）と必要の食物及衣服のとすら既に慮る可からず到來
す可き明日の爲めにすら既に慮る可からずんば斯くまで大なる重荷
を負うて其下に己を葬る者は如何にして何時既起するを得べきか
爾等豈聞かざるかパウルの云へる所を曰く凡そ軍士たる者は度世の

務を以て己を累はさす(提摩太後四)と然るに我等は奢侈暴食驕飲に耽り
 餘事には甚だ勞しつ人も天に屬する事柄には懦弱なり爾等豈知らざ
 るか我等の約束せられたる事は人事より勝れるとを地を行く者は天
 の高さに登ると能はず然るに我等は人の如く生活することをも務め
 すして無言の動物よりも尙劣れる者と爲れり爾等は知らざるか我等
 は將に如何なる審判を受けんとするかを我等は言語及思念の上にも
 責を任ぶ可きに非ずや然るに我等は行爲のとなすをすら慮らざるなり主
 は曰へり凡そ慾を懷きて婦を見る者は心の中已に之と淫せしなり(馬
 太五ノ三)と宜しき合はずして婦を見たる毎に責を任ぶ可き者は其罪
 の爲に朽つ可きと疑ふ可からざるなり(主は又曰へり其兄弟に……狂
 妄はと曰ふ者は火の地獄に羊らん(同上五))と然るに我等は己の兄弟
 を無教の侮辱及種々の穢褻を以て辱むるなり己を愛する者を受すれ

ばとて毫も異教人に勝る所なきに(馬太五ノ)我等は己を愛する者をも
 猶之を惡むさては我等は本來古の人の命せられたる限界を超ゆべき
 なるに猶之に劣れる生活を爲して如何にして其罪を赦さるべきを得
 べきか我等は己を辯護せんが爲に當に何れを言ふべきか我等が罰を受
 けん時何人が當に我等の爲に中保し我等に助力すべきか何人も有ら
 ざるなり我等は唯哭き號び切齒し痛心して終に必ず濃密なる幽暗の
 裡に投せられ無期の痛苦耐ふ可からざる刑罰の所に投せられんのみ
 然れば余は爾等に勸め乞ひ爾等の膝に觸れて懇求す短き一生の期限
 の満たざる間に痛悔して余の言を納れ反省し矯正し以て死後彼世に
 於て富者の如く無益に泣き絶望し悲しむ無きやう爲さんことを假
 令爾の父又は子又は朋友又は他の或者は神の前に毅然たなんとも彼
 時に於ては既に何人も爾が己の行の爲に受くる痛苦より爾を救はざ

るべし。彼時の審判は、實に斯くの如きなり。乃ち一に只行に由つて審判して行に依るに非ざれば、人は救はるゝと能はざるなり。余が今此を言ふは、爾等をして憂へしめんが爲に非ず。或は又失望せしめんが爲に非ず。乃ち唯我等が空しく冷淡なる望を有し、種々なる事を望んで、爲に己の徳を忽諸にすること無からんが爲なり。蓋し若し我等が等閑なるときは、義人も預言者も使徒も、何者も我等を辯護せざる可く、若又熱心にして己の行に依つて十分の辯護を受け得るときは、神を愛する者の爲に備へられたる福樂を敢て受ぐるとを得べければなり。願はくは我等は皆我等の主イエス、ハリストスの恩寵仁愛に依つて、此福樂を受くるを得んことを、彼と父と聖神とに、光榮權能尊貴は歸す。今も何時も世に阿民

不幸を忍耐すべし

「聖使徒パウロ曰く、我等審せられて主より懲を受く、即ち此世の罰を受く。世と與に定罪せられざらん爲なり。」(哥林多前書十)と。然れば我等は大に貧しき者の爲に配慮し、己の腹を制し、暴飲を避け、勉めて當然に聖機密を領け、假令我等將他人の上、如何なる不幸の來ると有りとも、例へば天死し、又は長病に罹ると有りとも、悲歎せざらん。凡そ斯くの如き不幸は、我等を心て罰を免れしむる者、我等を匡正する者、我等の爲に最好の教訓を爲す者なり。誰が爾云ふ曰く、ハリストスが其口を籍る所の人此を言ふなり。然るに猶多くの婦女は無分別なるの甚しき、未信者よりも甚しき餘りに、死者の姿を歎くなり、即ち或る婦女は情慾に眩んで、此の如く行ひ、或る婦女は他人に誇り、忝せんが爲、又は他人の非難を免

不幸を忍耐すべし

れんが爲に斯くの如く行ふ其中にて余は後の婦女を殊に宥慈す可からずと爲すなり彼等は云ふ神は余を定罪するも可なり只願はくは某の人に定罪せられざらんことを萬民の王の律法を犯すも可なり只願はくは無言の動物よりも尙無分別なる人々の譴責に遇はざらんことを嗚呼斯くの如き言を吐く彼等は如何にして雷に撃たれざるか若し人響應に招かれなば縦令其時は悲哀の事の後なりとも何人も之に應ずるとを辞せざる可し何となれば世に行はるる風習は之を促せばなり然るに神が悲嘆せざることを命ずれば凡ての婦女は其命に反くなり婦女よ爾はイオフの事を知らざるかイオフの子の上に行はれし不幸の後イオフの言ひし言を記憶せざるか即ちイオフの聖なる頭を無數の榮冠を以て飾るよりも麗しく飾り數多の喇叭を以て稱揚するよりも高らかにイオフを稱揚せしイオフの言を記憶せざるか彼の遺ひし

不幸即ち此新なる難處此奇異なる非常なる悲む可き事件の重大なるとを了解せざるか爾は或は一人又は二人又は三人の子を失ひしならん然れどもイオフは突然數多の子女を失つて子多き者より子なき者と爲りたり漸時に心を傷めしめられしして突然悉く其子を失ひ天性の普通の法に由つて奪はれずして即ち年老ゆるに至らずして天死し非業の死を遂げ而も皆イオフの居る所にて死せずイオフの顔前にて死せざりきイオフの諸子若しイオフの居る所にて死せしならばイオフは少くも其子の臨終の言を聞くを得其子の斯くまで悲しき末期に於ても幾分の慰藉を受くるを得しならん然るに意外にも彼の全く知らざる間に一時に皆葬られて家は諸子の爲に墓と爲りたり諸子の天死がイオフを不幸ならしめたるのみならず尙他の多くの事がイオフの不幸を失ならしめたり即ち其諸子が皆血氣壯なる年齢不

不幸を忍耐すべし

ありし事善良にして熱愛す可き者たりし事皆同一時に死して一人も残
 らず男子も女子も残らざりし事其の死するや天然の普通の法に因ら
 ざりし事而もイオフが自ら省み其子女を親で何も此くの如き事に遇
 ふ可き悪じき事あるを認めざりし事是なり夫れ此等の不幸は何れの
 一あるも心を擾れむ可きものなり然るに其の擧つて一時に來りた
 るからは宜しく思ふべし其波濤如何に高く其風雨如何に甚しかりし
 かを然れども尙一層重大に且最悲む可きはイオフが何故斯くの如き
 事に遇ふかを知らざりし事是なり故にイオフは己の不幸の原因を何
 に歸す可きを知らずして神の旨に依頼して曰へらく主は與へ主は取
 る主の欲する所の事は成れり主の名は世々に讃めらる可し三十一
 とイオフは諸人に勝れて善良なる己の極めて不幸なるを親悪人及欺
 騙者の多幸に不自由なく有らゆる快樂を盡して生活するを見つゝ

猶此本の如く言へりイオフは通常弱き人々の言ふが如き事を何も言
 はざりし即ち我が彼の如く心を用ひて子女を愛撫し養育せしは何の
 爲か旅行者の爲に己の家を開きしは何の爲か豊食しき者の爲裸裡な
 る者の爲孤兒の爲に多くの配慮を爲して後自ら斯くの如き報酬を受
 けんが爲かなと言ふことをせざりき否反つて如何なる献祭にも勝れ
 る言を述べたり曰く我は裸にて母の胎を出でたり又裸にて彼處に歸
 る三十一之を縦令彼は己の衣服を擧ぎ髪を剪りたりとて之を異む
 是勿れ彼は父なり慈愛深き父なり其靈の明哲なると共に其天性の情
 義亦外に發現す可かりしなり彼若し斯くの如く爲さざりしならば人
 或は反つて斯くの如き明哲を以て無感覺の故に歸したりしならん故
 にイオフは己の心情と高尚なる敬虔とを發現し悲哀を感じて爲に其
 志を變ずると無式反つて其功德を繼續し新なる榮冠を以て己を榮し

不幸を忍耐すべし

己の妻に對つて左の如く答へたり曰く我等は主の手より福をを受けたり災禍をも受けざるを得んや(同上)之を重んずるが有らざる物を失ひ子をも財産をも身體をも失つて後残りしは只一人の妻なるに其妻を彼を誘ひ彼を誑かせんが爲に残りたればなり惡魔がイオアの妻を其子女と共に滅ぼす神に其死を願はざるは己が聖火(イオア)を攻撃するに大に助力せしめんが爲なり惡魔が彼女を殺し己の最も有力なる武器として之を強しとなり惡魔曰く入り我既に婦に由つて其夫を地堂より逐ひ出せしめんが爲は塵芥溜の中に在るイオアに勝つは猶更なる可き事なり(加)之觀よ惡魔の奸計如何を彼は僅に牛驢馬路駝(死)死し時此武器をイオアの許に至らしめず家既に破壊し子女既に死し後猶イオアの強兵軍士たるを認めて此武器をして勝負始め此め末働かしめざり或る事ありイオアの既に夥しく事を生じ其

腐爛せる皮は剝け落ち創傷は蔽はれたる身體は臭き膿を流し時惡魔の手が油煎銅鑪其他如何なる火炎よりも甚しくイオアを苦め如何なる猛獸よりも猛惡に諸方よりイオアの體を噛裂き噛食ひし時斯くの如き苦難の中に既に多くの時を過し後惡魔は始めてイオアの婦を其疲れたる弱れる夫の許に連れ至れり婦若しイオアの不幸の當初に來りしならばイオアを左まで疲れたる者とは視ずイオアの不幸を左まで重く大なる不幸とは思はざりしならん然れども今や彼は來つて其夫の長き間に疲れたるを見其の不幸の輕減せんとを切望し其の不幸を免れんとを望むを見て斷然其許に近づきたりイオアは極めて疲勞を覺え苦痛の爲に喘ぎ死を希望して曰く若し我自殺するを得ん或は又之が爲に他人を煩すことを得べんば然したるならん是故に視よ彼女の奸計如何を夫れイオアの婦はイオアに對つて

何事はより言ひ始めたるか曰く彼はイオフの不幸の時の長さことより言ひ始めたり曰く爾は何時迄忍ばんとするかと元來人は實際に何事なくも言のみを聞いて其心を傷むるとは屢なり然らば宜しく思ふべし婦の此言と實際とに心を傷めしイオフの感せし所如何なるかを況んやイオフに對つて此くの如く言ひし者は心氣沮喪し衰弱し隨つてイオフをも失望せしめんと勉めたる彼女なりしなり我等は今此堅固なる壁即ちイオフに向けられし攻撃の力を尙も明らかになんが爲に彼女の言ひし所を聞かん未れ彼女は何を言ひしか曰く彼は云へり爾は何時迄忍ばんとするか嗚呼我は我救贖の望を懐いて今暫く待たん(同上)と言ふことゝるは爾の言ふ所は時既に之を辯取せり時の過ぎたるは既に久し然れども未だ毫も不幸の輕くなりたるを見ずとイオフの婦の斯くの如く言ひしは實にイオフをして失望せしめんとせる

のみなほすイオフを譴責し嘲笑せるなほ蓋しイオフは其婦を慰め其怨言を斥けて常に左の如く言ひたればなり曰く今暫く待て然らば違からずして此不幸去らんと故に婦は彼を譴責して曰へらば爾は今又同一の事を言はんとするか夫れ時は既に多く過ぎたり然れども不幸の終は未だ見えずと加之注意せよ婦の奸計如何に彼は牛のをも羊の事をも駱駝のをも言はざりき蓋し此等の事は皆左迄イオフの心を傷ましめざることを知ればなり故に直ちに至要の事に移つて子女の事を言へり蓋し子女の事を悲んでイオフが衣服を擧ぎ髪を剪りたることを知ればなり而も彼女は此所に爾の子女は死せりと言はずして尙一層強クイオフを感動せしむるや爾の記念は地より失せたり即ち子女を愛す可き者と爲す所の者は地より失せたりと言へり復活の明白なる今日に於ても子女は死せる親の記念を存するが故に愛す可き

不幸を忍耐すべし

者方らば、イオアの時に於ては猶更のとなり故にイオアの友の誼も亦
 力ある者を爲るなり蓋しイオアの友も亦誼うて彼の子女は死せん
 言すして彼の記念、即彼の子女、は地なる失ん(同上十八)と言た
 ればなり失れイオアの婦は爾の記念と言うて今又故らにイオアに其
 男の子及女の子の事を思はしめたり而も猶附て言へらく爾若子女の
 爲に心を勞せずんば我境遇の上になりとも注意せよと故に云く我が
 徒らに勞苦せし所の勞苦と我腹の痛苦とは地より失せたりと其意
 は下の如し曰く曾て多くの忍耐を爲し我は今爾の爲に苦難に遇ひ
 たり勞苦には遇うて結果は失ひたりと彼は直接に財産を失ひたるを
 を言はざれ終も而も又其事をも厭せずして可能丈感動し易き様之を
 暗示せ汝曰く我も今は定まり居る所なく他人に服事し一處より一處
 に移り家はり家に移りて云く以て財産を失ひたるを暗示し己の

苦難の大なるを表明せり此かる表言は實に十分に不幸を大ならし
 むる者なり言ふころは我は今他人の家に行いて曾に其憐を乞ふの
 みならず定まり居る所もなく他人に服事し我が未だ曾て知らざりし
 新なる勞苦を爲し諸所に流遇して自ら不幸の表徴を戴き諸人に己の
 不幸を表示せり然れども殊に悲しきは家より家に常に移る事なりと
 斯く言うてイオアの婦は己の怨言を結ばずして更に附けて言へらく
 「日の入る時を待てり我を今苦むる所の我勞苦と苦惱とより安らかに
 ならんが爲なり」と言ふころは他の人々の爲には日の光を見るは喜
 ばしきも我が爲には憂し我が爲には夜と暗とは極めて望まし蓋し獨
 り暗のみ我に勞苦より安らかならしめ我に不幸の中に慰藉を得せし
 むればなりとイオアの婦は尙曰へらく爾は事何事が主に請ひて死
 するに如かず(同上三)と視よ此語に於てもイオアの婦の狡猾なるを

不幸を忍耐すべし

彼は己の怨言の中に初より直ちに危険なる勸告を述べ先づ哀れに不幸なる事を陳べ不幸の數々を擧げてさて後簡短に勸告を述べ而も明々地に述べずして暗に之を述べイオフの極めて望める變動の事を言ひイオフの殊に望める死を約して暗に之を述べたり視よ又も悪魔の狡猾なることを悪魔はイオフの神を愛すると如何なるを知れり故にイオフをして忽ちに其婦を己の敵として排斥せざらしめんが爲にイオフの婦に神に對して怨言を發するを教へざりき乃ちイオフの婦は何處にも神の事を言はずして只有りし事共を言へり加之我等は尙此所に附けて言ふ可き事あり即ちイオフに彼危険なる勸告を爲しは不注意なる者を惑はすに有力なる其婦なりし事是なり夫れ多くの人は不幸に遭はずも其妻の勸告に由つて墮落したり然るを此堅き石よりも堅き福なる人イオフは如何にせしか彼は嚴格に其婦を見只見

たるのみにて言ふよりも先に既に其婦の奸計を破りたり婦はイオフをして涙の川を流さしめんと期したり然るにイオフは獅子よりも尙強き者として顯れたり彼は怒と不満とに満ちしも其は己の遭ひし不幸の爲に非ずして悪魔に屬する其婦の勸告の爲なり彼は目貌に怒を顯して適度に其婦を叱責せり蓋し不幸の中に在つてもイオフは謹慎したればなり彼は何と言ひしか曰く爾の言ふ所は愚なる女の言ふ所に似たり(同上)と言ふこゝろは我が爾に教へし所は斯くの如くならず我は爾を斯くの如くに養はず我は爾に我婦たる所あるを見ず蓋し爾の言ふ所は愚なる女の言ふ可き所にして爾の勸告は狂氣せる者に相當の事なればなりと視よイオフの答の如何に適度にして其攻撃の婦の病を癒すに如何に十分なるかをイオフは斯く叱責して後更に其婦を慰むるに十分なる深き慮を満てたる勸告を爲したり曰く我等は

主の手より福社を受くるなれば災禍をも受けざるを得んやと言ふも
 ろは爾は宜しく曩日の安樂の事を記憶し其原因者の事を思ひて勇
 ましく今の不幸を忍耐すべしと視よ、イオフの謙遜を彼は己の忍耐を
 己の勇氣に歸せずして、全く之を事物の自然に歸したり。彼は曰へらく、
 神は何の爲に我等に曩日の幸福を賜ひ、何の爲に曩日の幸福を以て我
 等を賞せしか、何の爲にも非ず、一に只神の仁慈に因るなり。曩日の幸福
 は恩賜なり、褒賞に非ず、恩寵なり、報酬に非ず、故に我等は勇ましく今の
 不幸を忍耐せんと然れば我等は夫たる者も婦たる者も皆己の爲に、此
 イオフの言將其前に陳べられたるイオフの言を認め、己の心に印し、宛
 も繪に畫くが如く、イオフの苦難の事蹟を我心に畫き、即ちイオフの財
 産を失ひたると、其子女の死にしと、身體の腐爛せしと、其の受けし侮辱
 嘲笑、婦の奸計、悪魔の狡猾、其他一般に此義人の受けし苦難を精細に我

心に畫き、以て己の爲に最有望なる港を設けん、我等が萬事を勇ましく
 且感謝して忍耐し、此世の生活に於ても己より一切の悲哀を逐ひ、未來
 の生活に於ても此勇氣の爲に我等の主イイスス、ハリストスの恩寵仁
 愛に依つて褒賞を受くることを得んが爲なり。彼と父と聖神とに、光榮權
 能尊貴は歸す、今も何時も世々に、阿民

徒らに死者のてを泣かさざれ

「聖使徒パウロ我等の復活の事を謂て曰へらく、死者は朽つる者として
 播かれ朽ちざる者として起く尊からざる者として播かれ榮ゆる者として
 起く弱き者として播かれ強き者として起く靈に屬する體として
 播かれ神に屬する體として起く」(哥林多前書十五)と然れば我等は務
 めて己を義人の列に立つる様にし、死する者の爲に泣かずして、一生を

徒らに死者のてを泣かさざれ

悪の中に終ふる者の爲に泣かん農夫は麥の破るゝを見るも泣かず反
つて麥の地中に落ちて依然として堅きを見れば恐れ慄き其の破るゝ
を見れば喜ぶ蓋し破壊は將來の種子の始なればなり是くの如く我等
も亦朽ちたる家の破潰する時人の播かゝる時喜ばん異ひと勿れ使徒
が埋葬を呼んで播種と爲すを埋葬は是れ最善き播種なり他の播種の
後には死勞苦危険心勞之に續いで來るも此埋葬の播種の後には正し
くだに生活すれば榮冠及褒賞は來るなり他の播種の後には朽つると
及死は來るも此播種の後には朽ちざると死せざると及無數の福樂は
來るなり他の播種の際には體合情慾及夢は有れども此播種の際には
唯天より聲の下るのみにして俄にして萬事は行はれ且復活者は多難
の生命に入るに非ずして疾病も悲哀も歎息もなき所に入るなり然れ
ば爾人の妻たる者若し保護を受くるとを要し且其故に死せる夫のと

を哀まば諸人一般の爲の保護者たり救主たり恩者たる神に趨り就く
べし此勝たれざる保護備はれる祐助確實なる庇保何處にも存し且四
方より我等を圍む此確實なる庇保に趨り就くべし爾は曰はんか既に
慣れにし夫との交際は好ましく且意に適ふと余も亦之を知れり然れ
ども爾若し理性を以て己の情を制し己の夫の生命を奪ひし者の誰た
るかと思ひ己の心を大にして之を忍んで己の意志を神に祭として献
ぐることを思はば其煩悶を免るゝを得て時の行ふ所の事も爾の明
徳を全うすべし然るを若し餘りに悲まば假令時が爾の悲哀を斷たん
ども爾は何の褒賞をも受けざるべし夫れ此くの如き思考を以て爾は
現世の生命に於ける將神書に於ける例の事を思へ夫のアウラアムが
己の子を屠らんとして泣かず一言も悲歎の語を發せざりしを思へ
爾は曰はんかアウラアムは果して此くの如くなりしかと曰く爾は尙

徒らに死者のとな泣ひされ

爾は言はんか彼は罪人にして死せしが故に余は之を愛ふと然れども其は唯通辭のみ口實のみ爾若し是故に死者の事を泣かば寧ろ彼を其生前に矯正し完全ならしむ可かりしならん爾は彼の事を慮るに非ずして唯自己の事を慮るのみ假令彼は罪人にして死せりとするも爾は猶彼の死するに由つて其罪の斷絶し彼が其惡に更に惡を加へざるを得しを喜び涙を以てせずして祈禱祈願矜恤献祭を以て能くす可きたけ彼に助力すべきなり蓋し凡そ此等の事は徒らに設けられたるに非ざればなり我等は神設の機密(執行)の時己の眼前に在る世の罪を任ひし羔に祈願して徒らに死者の記憶の祈禱を爲すに非ず徒らに死者の爲に中保するに非ず乃ち死者をして此に由つて以て慰藉を受くる所あらしめんとするなり祭壇の前に立つ者が恐る可き機密執行の時大聲にてハリストスに於ける凡下の死者の爲に祈禱し其人々の記

一層大なる功徳を爲すに召されたるなりオスは悲みながら然れども其の悲みしは懇切に死者の爲に慮る慈愛深き父に固有なる程に悲みたり然るに我等が今爲す所は敵に固有なる事なり蓋し爾若し人の王宮に迎へられて冠を戴かしめらるゝを哀泣慟哭せば余は爾を呼んで其人の友と爲さずして顯著なる仇敵と爲すべし爾若し言はんか我は其人の事を泣くに非ず自己の事を泣くなりと然れども其人の當に冠を戴かしめらるべく安全なるべき時に當つて猶も爾の爲に歎かしめ爾の將來を憂慮せしめ即ち其人の既に港に在るを得べき時に當つて猶も波濤に漂はしめんとを望むは此亦人を愛する者に適應せざる事なり爾は曰はんか余は死者の何處へ逝りしかを知らずと然れども如何にして其を知らざるか乞ふ之を余に告げよ彼は正義にして生活せしか或は又然らざりしか之を思へば彼が何處へ逝りしかは著明な

徒らに死者の事を泣かざれ

五五

憶を祈願するも徒らに然するに非ず。若し(實に)死者の爲に記憶の祈禱
 を爲さざるならば、此等の祈禱の詞は唱へられざるならん。我等は演劇
 を爲すに非ず。決して演劇を爲すに非ず。我等は唯(聖)神の定むる所に依
 つて行ふのみ。然れば我等は死者に助力し、死者の爲に記憶の祈禱を爲
 さん。蓋し若しイオフの献げし祭が其子を清めしならば、何故爾は我等
 が死者の爲に祭を献げて、而して死者が此に由つて慰藉を受くることを
 疑ふか。神は屢其恩寵を或る者に賜うて、他の或る者の爲にす。是れ、バ
 ルが下の如く言うて説き明す所なり。曰く「多くの人の轉達に依りて我
 等が受けし賜の故を以て多くの人が我等の爲に感謝せん爲なり。」(哥林
 後一)と。然れば我等は死者に助力し、死者の爲に祈禱を献ぐることを怠
 らざらん。蓋し全地は皆潔まることを要すればなり。我等は勇んで全地の
 爲に祈禱し、致命者、表信者、司祭等の名を唱ふる。と共に、彼等(死者)の名を

も唱へん。蓋し或る肢は他の或る肢に勝るも、我等は皆一の體を爲せば
 なり。夫れ是くの如く、彼等(死者)は諸方よりして罪の赦を受くることを得
 祈禱に由つても、己の爲に献げらるゝ祭物に由つても、己の名と共に其
 名を呼ばるゝ者に由つても、罪の赦を受くることを得るなり。斯くまで死
 者は罪の赦を受くることを得るに、爾は何故悲み、何故泣くか。豈爾一人後
 に残つて保護者を喪へるに由るか。否、其を言ふと勿れ、爾は未だ神を喪
 はざるなり。神を有する間は、神親ら爾の爲に、夫よりも父よりも子より
 も女婿よりも、尙一層大なる保護者たる可きなり。蓋し夫、父子、女婿の存
 生中、雖神が爾の爲に萬事を爲したればなり。宜しくダワドの如く考
 へ、且言ふべし。曰く「主や我が光と我が救なり。我誰をか恐れんや。」(聖詠二
 一)と。又曰く「孤子の父、寡婦の審判者なる神。」(同上六六)と。神に其寵祐を垂
 れんことを求めよ。彼は爾の困難の甚しきに随つて、前日よりも尙一層

徒らに死者のとな泣かざれ

憶を祈願するも徒らに然するに非ず若し實に死者の爲に記憶の祈禱
 を爲さざるならば此等の祈禱の詞は唱へられざるならん我等は演劇
 を爲すに非ず決して演劇を爲すに非ず我等は唯(聖)神の定むる所に依
 つて行ふのみ然れば我等は死者に助力し死者の爲に記憶の祈禱を爲
 さん蓋し若しイオフの献げし祭が其子を清めしならば何故爾は我等
 が死者の爲に祭を献げて而して死者が此に由つて慰藉を受くることを
 疑ふか神は屢其恩寵を或る者に賜うて他の或る者の爲にす是れバ
 爾が下の如く言うて説き明す所なり曰く多くの人の轉達に依りて我
 等を受けし賜の故を以て多くの人が我等の爲に感謝せん爲なり(多)林
 (一)と然れば我等は死者に助力し死者の爲に祈禱を献ぐることを怠
 らざらん蓋し全地は皆潔まるを要すればなり我等は勇んで全地の
 爲に祈禱し致命者表信者司祭等の名を唱ふると共に彼等(死者)の名を

も唱へん蓋し或る肢は他の或る肢に勝るも我等は皆一の體を爲せば
 なり夫れ是くの如く彼等(死者)は諸方よりして罪の赦を受くることを得
 祈禱に由つても己の爲に献げらるゝ祭物に由つても己の名と共に其
 名を呼ばるゝ者に由つても罪の赦を受くることを得るなり斯くまで死
 者は罪の赦を受くることを得るに爾は何故悲み何故泣くか豈爾一人後
 に残つて保護者を喪へるに由るか否其を言ふと勿れ爾は未だ神を喪
 はざるなり神を有する間は神親ら爾の爲に夫よりも父よりも子より
 も女婿よりも尙一層大なる保護者たる可きなり蓋し夫父子女婿の存
 生中と雖神が爾の爲に萬事を爲したればなり宜しくダワドの如く考
 へ且言ふべし曰く主や我が光と我が救なり我誰をか恐れんや(聖)詠二
 (一)と又曰く孤子の父寡婦の審判者なる神(同上六六)と神に其寵祐を垂
 れんことを求めよ彼は爾の困難の甚しきに随つて前日より尙一層

徒らに死者の涙を泣がされ

爾の爲に照管せん或は又爾は子を喪へるか否喪ひたるに非ず喪ひたりと言ふと勿れ其は夢のみ死せしに非ず移住せしのみ喪ひたるに非ず劣悪より優勝に移りたるのみ神を怒らしむるを勿れ彼を宥めよ爾若し心を大にして忍耐せんには死者も爾も共に此に由つて或る慰藉を受くるを得べし若し忍耐せざらんには爾は此に由つて一層神を怒らしむべし恰も猶主人が其僕を罰する時爾若し之を怒らば主人をして爾に對して尙一層激しく怒らしむべきが如し然れば爾は宜しく此くの如く爲さずして反つて神に感謝すべし爾の悲哀の雲を散さんが爲なり宜しく福イオフの如く言ふべし曰く主は與へ主は取る(記約一十三)と爾より尙一層神に悦ばれながらも猶全く子なく父と呼ばるゝとさへ得ざる人々の如何に許多なるかを思ふべし爾は言はんか我も子を有するを欲せざるなり始に愉快にして後之を失はんより始

より愉快ならざるに如かずと然らず余は爾に勸む其の如く言ふと勿れ主を怒らしむると勿れ反つて子を得たるが爲にも神に感謝し終まで之を有せざりしが爲にも神を讚美すべしイオフは恩を知らざる爾の言ふが如く審ろ子を有せざるに如かずとは言はざりき乃ち子を得たるが爲にも(神に)感謝して主は與へと言ひ子を喪ひしが爲にも(神を)讚揚して主は取る主の名は世々に讚む可きかなと言へり加之彼は又其妻の口を塞ぎ之を諭して左の如き驚く可き言を述べたり曰く我等主の手より福祉を受くるなれば災禍をも受けざるを得んや(同上三)と次いで更に尙重き試誘に遇ひて後も猶其心を動かさず彼の如く心を大に忍耐して神を讚揚したりき爾も亦當に此くの如く行ふべし心に爾の子を奪ひし者の人に非ずして神たり爾の子を造りし神たり爾より尙一層爾の子の爲に慮り爾の子に何事の有益なるかを知ら神たる

徒らに死者の涙を泣かされ

ことを思ふべし。如何様かの敵將害心ある者に非ざるとを思ふべし。加之
 又生き存へて兩親に愛き生活を送らしむる子女の如何に多きかを思
 ふべし。爾は言はんか。さても世に善き行の子女あるとを知らざるか。と
 曰く。余も亦之を知れり。然れども其子女の境遇よりも爾の子の境遇は
 尙安全なるなり。彼等は今實に稱讚するに堪ふるも其終は將に如何な
 らんとするか。知る可からざるなり。然るに爾は既に其子の如何様かの
 事に遇ふと無きやう。如何様かの異變の其身に生ずると無きやう。恐れ
 慄くことを要せざるなり。勤儉なる良妻の身に付いても亦當に此くの如
 く思考し、萬事に神に感謝すべし。爾若し妻を喪ひたらんには、神に感謝
 すべし。意ふに、神は爾をして節制せしめんと欲し、爾を招いで尙一層大
 なる徳を建てしめ、爾を救うて束縛を免れしめんと欲せるなり。我等は
 是くの如く明德を明らかにし、以て此世に於ても靈魂の安靜を得、來世

に於ても榮冠を受くるとを得ん。願はくは我等は皆我等の主、イ、ス、
 ャリストスの恩寵仁愛に依つて、來世の榮冠を受くるを得んことを彼
 と父と聖神とに、光榮權能尊貴は歸す。今も何時も世々に阿民

夫婦各其徳を守れ

「聖使徒パウロコリンフ人に達する書に曰へらく、女若し蒙らずば髪を
 翦るべし。」(前番十)と首を覆ふは、從順と從屬との表號なり。然れば女若し
 首を露出す可からず、何處に於ても從屬の表徴を戴かざる可からざら
 んには、其の行爲上に此くの如く爲す可きは、猶更の事なり。故に昔時の
 女は夫を呼んで主となし、之に特權を歸したりき。然るに爾は言はんか、
 此れ夫も其婦を愛せしに由ると曰く、余は之を知れり。余は之を忘れざ
 るなり。然れども我等が爾の義務のと言ふ時、爾は他人の義務を指示

夫婦各其徳を守れ

すと勿れ我等若し小兒に對つて其の親に順從す可きとを諭し聖書の
 言を引いて爾の父母を敬へ(出埃及記)と言は彼等は尙次の事をも言
 へと云はん曰く父よ爾等も己の子を怒らしむる勿れ(以弗所)と又若し
 奴隸に對ひ聖書の言を引いて爾等主に順へ……唯目の前に勤むるな
 かれ(以弗所六)と言は彼等も亦左の聖言を引いて主人をも諭すとを
 促さん曰くパウロは主人にも嚴しきを和げよ(同上九)と命じたればな
 りと然れども我等は此くの如く爲す可からざるなり我等は己の罪を
 規責せらるゝ時他人の義務を指示す可からざるなり蓋し爾と共に他
 人も規責せらるればとて爾は之が爲に己の罪せらるゝことを免れざ
 ればなり然れば爾は只爾の罪より自由とならんとに注意す可きのみ
 アダムは罪を其妻に歸し妻は罪を蛇に歸したり然れども毫も彼等の
 爲に益なかりき然れば爾は斯くの如き事を言はず只唯謹んで夫に對

して己の守る可き義務を守る可きのみ爾の夫に對つて爾を愛し及敬
 へと命せん時にも余は爾妻たる者の與へられたる誠命を指示すとを
 許さず一に只夫たる者の命せられにる所を行へと促さん是故に爾も
 亦務めて己の義務を行ひ己の夫に對して從順を表す可きなり爾若し
 神の爲に夫に順從せんと欲せば我が前に夫の義務のとを陳せずして
 只當に勉めて己の立法者に命せられたる所を行ふ可きなり爾が快か
 らざる事を身に受けつゝ猶自ら律法を犯さるこそ殊に神に順從す
 るの行なれ己を愛する者を愛すればとて何の重き事か有らん然れど
 も若し己を憎む者を愛せば其は殊に榮冠を受くるに堪ふるなり爾も
 亦宜しく左の如く思ふべきなり即ち若し殘忍なる夫を戴いて忍耐せ
 んには光明なる榮冠を受くるとを得べきも溫和なる夫を戴いて忍耐
 せんには何に由つて神に賞せらるゝとを得べきと但し余は斯くの如

く言ふも夫を殘忍ならしめんとするに非ず乃ち凡そ人の妻たる者に、
 殘忍なる夫を戴くも猶忍耐す可きとを諭さんとするなり蓋し人各己
 の義務を行はんと務むるときは、鄰も亦同様に己の義務を行ふとを躊
 躇せざればなり婦若し怒り易き夫に忍耐せば、夫も亦怒り易き婦を怒
 らしめず故に其人々の間には、萬事に波濤たゞざる港の如き平安ある
 ことを得へし古の人の間に在つても斯くの如くなりき彼等は各己の
 行ふ可き所を行つて、鄰の義務を指示さゞりき視よアウラアムは甥を
 伴ひたれども妻は之が爲にアウラアムを譴責せざりきアウラアムは
 其妻に遠く旅行するを命じたり然れども妻は之を拒まずして順從
 せり斯くて數多の艱難に遇ひ努力し勞苦して諸物を領有する者と爲
 るやアウラアムはロトに先づ其の欲する所を選ばしめたり然れども
 サルラは管に之が爲に其心を傷めざりしのみならず口をも開かず今

日の多くの妻女の言ふが如き事を何も言はざりき夫れ今日の多くの
 妻女は斯くの如き場合に己の夫が他の人よりも寡く分配を受け殊に
 己より賤しき者よりも少く分配を受くるを見れば、夫を罵つて魯鈍な
 る者無智なる者怯懦なる者不注意なる者緩慢なる者と云ふなり然る
 にサルラは何も斯くの如き事を言はず思はず却つて萬事己の夫の爲
 す所に満足したりき加之ロトが自ら地を選び劣悪の地方を叔父に歸
 したる後大なる危難に遇ふやアウラアムは之を援けんとて己の家人
 を悉皆武装し僅に此等の人を以てベルシヤの軍に敵せんとせし時も
 サルラは之ヲ止めず又言ひもせざりき例へは爾は自身を淵に投じ斯
 くの如き危険を冒し以て夫の爾を凌辱し爾の財産を奪ひし者の爲に
 血を流さんとして何處へ行くか爾若し自己の事を思はずんば宜しく
 我を憐め夫れ我は家故郷朋友親族を離れ爾に随つて斯くの如き旅路

夫婦各其徳を守れ

に來りしに非ずや、我をして妾婦たらしむるを勿れ、妾婦の遇ふ可き困苦に遇はしむる勿れと言ひもせざりき。サルラは何も此くの如き事を言はず、思はず、萬事只黙して之を忍びき。又サルラは子を産まざりしも、他の子を産まざる婦女の如く、悲み嘆くことを爲さず、泣くことを爲ざりき。却つてアウラアムは涙を流し、而も其の涙を流すや、婦(サルラ)の前に於てせずして、神の前に於てしたり。加之注意せよ、此二人は如何に己の守る可き所を守りしかを。アウラアムはサルラの子を産まざるが故に、サルラを輕蔑せず、サルラを叱責せず、サルラも亦自ら進んで、アウラアムに、其婢に由つて子なきを慰むるを得せしめんと勉めき。此事なる、今日は之を禁ずれども、當時は之を禁せざりき。今日に於ては、縱令彼時より百千倍も子なきを認むとも、婦にも斯くの如くにして、夫を悦ばしむることを許さず。夫にも亦婦の承諾不承諾に拘らず、斯くの如き關係を結ぶことを許さず。蓋し若し斯くの如くするときは、彼等の蟲死せず、火滅せず、(西四九)と云はる可ければなり。今日は斯くの如き事を許さざりれども、當時は之を禁せざりしなり。故にサルラが此事を勧めし時、アウラアムは之に従ひたり。然れどもアウラアムの此くの如く爲しなば、サルラを悦ばしめんが爲に非ざりしなり。爾は言はんか、アウラアムは後に、サルラの要求に應じて、其婢を逐出し、に非ずや。然れども余は反つて此事を以て、アウラアムが萬事に如何に其婦の言を容れサルラも亦如何に其夫の言を容れしかを證せん。と欲するなり。加之斯くの如く言はん人は、宜しく其前の事情に注意し、婢が反つてサルラを凌辱し、己の女主(サルラ)に對して傲慢し、始めたる事に注意す可きなり。自主たる貴き婦女の爲に、此にも増して悲むべき事やは有る。是故に婦たる者よ、爾は夫の篤實なるを俟つて、己も篤實を表さんと欲ふ勿れ。斯

夫婦各其徳を守れ

七〇
くは何の重きをも爲さるなり夫よ爾も其婦の善良なるを俟つて
己も明德を守らんと欲ふ勿れ斯くては爾の爲に功德と爲らざるなり
乃ち余の既に述べたるが如く各人先づ自ら己の義務を守る可きなり
蓋し我頬を打ちたる他人にすら他の頬を向く可からんには夫の残忍
を忍耐す可きは猶更の事なればなり但し余が此事を言ふは夫をして
婦を打たしめんが爲に非ず若し打たば打たる者の爲に甚しき屈辱
たらずして反つて打つ者の爲に甚しき屈辱たるなり婦たる者よ爾若
し如何様の事情に由つて斯くの如き夫と結婚したらんには悲み嘆
くと勿れ之が爲に爾を俟つ可き褒賞と此世に於る善き譽を思へ夫
よ余は爾等にも謂ふ如何なる事ありとも爾等は己の婦を打つ可から
ず然らず余は單に婦を打つ可からずとのみ言ふに非ず貴き人は下婢
をも打つ可からざるなり下婢をも虐待す可からざるなり下婢を打つ

すら極めて耻辱たらば自主の者たる己の婦を虐待するは猶更の耻辱
なり此事たる外部(即ち異教)の立法者も亦説示す所なり彼等は婦を打
つ夫と共に住むことを其婦に強ひず此くの如き夫を婦と共に住むに堪
へずと爲すなり實に己と生活を共にし永く己と困苦を分つ者を辱め
て下婢の如くするは極めて不法の事なり假使此くの如き夫も猶獸と
呼ばれず夫と呼ぶることを得とも意ふに此れ父を殺す者將母を殺
す者と同じきなり蓋し我等は婦の爲に父母を離るゝことを命せられ
たるも其は父母を凌辱せんが爲に非ずして神の律法を守らんが爲な
り且此事たる兩親も極めて望む所にして彼等自身は其子に離るゝも
喜び大に熱心して其子に結婚せしむるなり夫れ神は婦の爲に兩親を
離るゝとを命ぜしに爾は婦を凌辱せんとは無智の極に非ずや否單に
無智なるのみならず耻辱に非ずや余に告げよ人誰か之を忍ぶとを得

夫婦各其徳を守れ

るかを叫ぶ聲悲氣なる聲が街衢に響き渡らん時宛ら何かの獸が家内の諸物を破壊するが如く狂暴なる事を行ふ者の家に隣家の人將通行人の馳せ集らん時我等は如何なる語を以て此くの如き者を描き寫すを得るかを斯くの如き愚なる者は其後復び市場に顯れんよりも事地が之を呑み了らんこそ勝らめ爾は言はんか婦の舉動が狂妄なりと然れども記憶せよ彼は婦なり弱き器にして爾は夫なり爾が彼の上に首長として立てられしは爾に従屬する彼の弱きを忍ばんが爲なり宜しく務めて己の統御を榮光ある者と爲すべし爾の統御の榮光ある者と爲るは爾が己に従屬する彼を辱めざらん時なり恰も王が己に屬する長官の榮を大にすることは自身も愈尊敬す可き者と爲れども長官の職を卑下し辱むるときは自身の光榮をも滅殺すること尠からざるが如し爾も亦若し己に屬する女長官たる婦を辱むるときは己の權

の尊きをも卑くすること尠からざるなり然れば爾は凡そ此等の事を思うて謹慎し併せて彼夜の事を記憶す可し即ち爾の婦の父が爾を呼んで宛ら何か抵當物を保存せしむるが如く爾に己の女を與へ女を一切の者より離れしめ母よりも己よりも家よりも離れしめ女に付いて一切の配慮を爾の右手に委託せし夜の事を記憶す可し又爾が子を得て父と爲りたるも第一には神の力にして次には婦の力に由れるが故に其をも思うて婦に對して溫和なるべし看すや農夫は種子播ける土地を有ゆる手段を用ひて培ひ其土地には數多の缺點あるを問はず其地質豊饒ならず惡草を生じ地勢惡しきが爲に水の出づるをも顧みざることを爾も亦當に此くの如く爲すべし然らば爾は第一に其結果と安心を得て慰樂す可し夫れ婦は港なり靈魂の疾病を癒す最重要の醫藥なり爾若し此港をして風波なからしめば市場より家に歸つて大

夫婦各其徳を守れ

なる安心を彼より受くることを得べきも、若し波立たしめば自ら己の爲に最危険なる難船を準備することゝ爲るべし。然れば爾は斯くの如くするとなき、反つて其反對に前の如くす可し。若し爾の家に婦の過に由つて何か不幸なる事を生せんには、爾は彼を慰めて、其不幸を大にせざるやう爲すべし。假令爾は財産を全く失はんとも、其不幸は未だ共に住む者と不和なるが如く大ならざるなり。爾は如何なる罪の事を言はんとも、如何なる罪も未だ婦と争ふより、忍び難きは有らざるなり。是故に婦を愛する愛は、爾の爲には、何物よりも貴重ならざる可からず。若し爾等夫婦は相互に困若を忍ばざる可からざらんには、爾(夫)が婦の欠点を忍ぶ可きは猶更のことなり。假使婦が貧窮なりとも、爾は之を卑むこと勿れ。無智なりとも、之を議せず、寧ろ勉めて之を教導す可し。蓋し彼は爾の肢にして、爾等は則ち一體なればなり。爾は言はんか、彼は饒舌なり、

暴飲の癖あり、怒り易しと。然らば爾は怒らずして却つて之を悲み、神に祈禱し、訓戒し、教訓し、萬事を爲し、以て其慾を絶たしむるやう爲す可し。然るを爾若し彼を打ち、彼を苦めんには、其病を癒すと能はざる可し。無作法は温和にしてこそ匡正せらるれ、相互に無作法にしては匡正せられざるなり。加之、爾は又神より受くる褒賞のをも忘る可からず。蓋し爾若し婦を離縁するを得るに、猶神を畏れて之を爲さず、反つて婦を離縁するを禁せる律法を重んじ、婦の欠点を忍ばず、縦令婦の病は如何に重しとも、爾は得も言はれざる褒賞を受くることを得べく、且其褒賞を受くるに先ち、大なる利益をも受くることを得べし。蓋し婦を曩日に比して、幾何か多分に従順なる者と爲すことを得、自身も婦に對して、愈温和を表すことを習ひ得ればなり。傳へ云ふ、異教の哲學者の一人(ソクラト)は、饒舌にして暴飲の癖ある悪しき女を妻とせしが、人之に問うて、

夫婦各其徳を守れ

尙の爲に斯くの如き妻を忍耐するが云ふは彼は之は答へて彼女が我が爲に家庭の學校なり我に明德の修養を爲さしむと曰ひ尙語を次いで蓋し我は日々彼女に對して我徳を修養し爲に他人に對しても幾何か多分に溫和の者と爲るを得と曰ひたりと爾等は驚歎するか然れども我等は神使に效ふことを命せられ否尙適切に言へば神の仁愛に效ふことを命せられたるに異教人が反つて我等よりも明德を明かにするを余は悲むなり夫れ今擧げたる哲學者(ソクラト)は上述の理由に由つて己の悪しき妻を出さざりや否或る人の言ふ所は據れば彼は此理由に由つて彼女を娶たり然れども人多くは左まで思慮深きは非ず故に余は其の預め百方盡力して左の如くせんことを勸むるなり即ち諸善徳を滿てたる善良なる妻女を選び求めんことを勸むるなり若し過つて良からざる妻を迎へ惡しき妻を迎へんか此哲學者に效

つて有らゆる手段を以て其妻を匡正し其妻を匡正するを以て最肝要の事と爲さんとを勸むるなり商賈は己の全業者と其相互の安全を保す可き契約を結ばざる間は船を海に出さず貿易に着手せざるが如く我等も亦有らゆる手段を以て己の船の中に己を生活を共にする妻を平和を維持するやう爲さん斯くの如くする時は我等は他の諸事に於ても安全なるを得此世の生活の海を安穩に航することを得べし我等は家奴僕金錢田畑の事よりも國事よりも寧ろ此事を慮らざる可からず我等の爲には己と共に生活する者と相敬視せず争はざるこそ最重の事なれ蓋し若し我等が心を一にして此世の生活の重荷を耐へ忍ぶときは他の諸事に於ても好成績を得神靈上の事に於ても好成績を得て終には我等の爲に備へられたる福樂を受くるを得ればなり願はくは我等は皆我等の主イエス・クリストスの恩寵仁愛に依つて此

夫婦各其徳を守れ

福樂を受くるを得んことを光榮權能尊貴は彼と父と聖神とに歸す今も何時も世々に阿民

公祈禱の時宜しく謹慎すべし

今日の教會は宛ら己の曾て有せし富を失ひ多くの所に只其曩日の安樂の表號を存し徒らに黄金の財寶の貯藏所倉庫を示し而して財寶は有せざる婦女に似たり今日の教會は實に此くの如き婦女に似たり使徒の時に於ては、養婦の群、童貞女の群は諸教會の爲に大なる裝飾を爲せり然るに今や廢絶して僅に只其表號を存するのみ今日と雖養婦なきに非ず童貞女なきに非ず然れども彼等は斯くの如き苦行に身を聖にしたる者相當の裝飾を爲さざるなり童貞女の(他の者に異なる)特徴は、一に只神事の^を慮ると斷えず熱心に祈るとなり養婦の表號は、

其の再婚せざる事よりも寧ろ他に在るなり即ち旅人を懇に待ひ貧しき者を恤み祈禱を務め其他パワルが甚だ適切に其のテモスイに達する書(提摩太前)に命せし所の萬事を守るに在るなり我等の間には、妻として甚だ謹慎なる者なきに非ず然れども我等の要求せらるゝは、一に只此事のみに非ずして懇に又窮乏者の爲に役せん事なり此れ昔時の婦女が今日の多くの婦女の如くならずして殊に善く務めし所の事なり昔時に於ては、婦女は己を飾るに黄金の代に矜恤の美を以てしたり然るに今日に於ては、婦女は此矜恤の美を捨て、多くの罪惡を以て編み成せる黄金の鎖にて諸方より己を纏へり余は尙も他に我等の始祖の時の裝飾を失へる倉庫のと言はんか昔時に於ては、人皆集つて共に謳歌したりき此れ今日に於ても我等の行ふ所なり然れども彼時に於ては、衆皆心を一にし靈を一に(使徒行實四)せしに今日に於ては、一

公祈禱の時宜しく謹慎すべし

の靈の中にすらも此くの如き和合あるを見ず何處に於ても大なる紛争あり今日に於ても教會の尊者は教會に於て衆人が其父の家に來りたるが如く平安ならんとを望むも平安てふ名稱の屢反覆さるゝに拘らず何處にも其實行なきなり昔時に於ては家々も教會なりき然るに今や教會も猶居室と爲り如何なる居室よりも尙惡しき者と爲り始めたり居室に於ては秩序の大に整然たるを見るを得主婦は端然として其の坐す可き所に坐し婢は沈黙して紡ぎ家中の人皆各其の任されたる所の事を爲せども此處即ち教會には反つて大なる喧噪あり甚しき混雜あり我等の集會は毫も旅舎と異なると無く此處に於ける喧噪と笑とは衆人の叫び喧く市場に於るが如く浴場に於るが如し但し此は是れ我等の今居る此教會に於る事のみ他所の諸教會に於ては己の傍に立てる者とすら語を交ふるを許さず縦令其人久しく遇はざ

りし朋友にても之を許さず教會の外に於てせしむ是れ極めて正當の事なり教會は剃鬚所に非ず香水店に非ず市場に在るが如き工場に非ず神使の居所神使長の居所神の國なり天なり今若し天を開いて爾を彼處に昇す者あらば縦令爾は彼處にて父に遇ひ兄弟に遇ふとも敢て之と雜談せざるべし我等の今居る此教會に於ても亦正に之と全じく神靈上の事の外は何事をも言ふ可からざるなり蓋し此教會も亦天なればなり爾若し猶之を信せずんば乞ふ此寶座を觀よ誰の爲何の爲に此寶座の建てられたるかを思へ誰が此所へ臨み給ふかを思へ而して其の未だ臨み給はざる前にも畏れよ若し人地上の王の玉座を見れば心に警醒して王の懸て臨御せらるゝを待つべし之と全じく爾も亦當に恐る可き時の到るに先つて畏れ且警醒す可し幕の開かれ神使の群の先驅するを見ざる前に天に昇れ然れども聖位に敍せられざる者は之

公祈禱の時宜しく謹慎すべし

を知らず故に斯かる人の爲には尙他の或る事を言はざる可からず我等は斯かる人を奮起せしむ可く高尚ならしむ可き事柄をも言ひ難しと爲さざるなり縦令前記の如き事を知らざる者にてても若し預言者が主此く言ひ給ふと言ふを聞かば當に地を離れ天に昇り且誰が預言者に由つて其事を言ふかを思ふべきなり然るに今や滑稽者が笑ふ可き事を言ひ淫婦が非禮の事を言ふときは見物の群衆は極めて静謐に坐して其言を聴き誰も緘黙せしめざるに猶談話を爲す者なく叫ぶ者なく些少の喧噪を爲す者なく而して神が天より恐る可き奥義を告ぐれば我等は犬よりも尙無恥の者と爲つて淫婦に對して表すが如き注意を神に對しては表さざるなり爾等は此事を聞いて恐るゝか寧ろ此くの如く行ふとを恐る可きなりパルルは彼貧窮者を蔑視して己のみ食物を用ひし者に對つて曰へらく爾等豈食飲する爲に家なきか抑爾等

神の教會を慢り又乏しき者を辱むるか(母林多前書)を乞ふ余にも此所にて(即ち教會にて)喧噪し談話する者に對つて言ふとを許せ爾等は豈空しき談話を爲すが爲に家を有せざるか或は神の教會を慢り貞潔と安心とを守らんと欲する者を誘はんとするか爾等は曰はんか我等は知人と談話するが楽しく快しと余は之を禁せざるなり但之を居室に於てし市場に於てし浴場に於てすべきのみ教會は談話の場所に非ず教訓の場所なり然るに今や教會は市場と毫も異なる所なきなり何か物を買ひ又は賣らんと欲するときは教會は之が爲に市場よりも便利なりとせらるゝなり蓋し商店よりも寧ろ教會に其事の話多ければなり他人を悪口し又は悪口を聞かんと欲する者は外に市場に於てよりも寧ろ教會に於て其目的を達するなり爾は或は國事或は家事或は戦争の事を聴かんと欲するか裁判所に行くこと勿れ病院に坐すると勿れ

公所禱の時宜しく謹慎すべし

此處即ち此教會にも極めて詳細に凡そ此等の事を告ぐる者あるなり。此所即ち此教會は、教會たるよりも寧ろ他の諸事の場所たるなり。嗚呼、余の言は、餘りに厲しく爾等に觸れたるには非ざるか否、余は然思はざるなり。蓋し爾等若し依然として全一の事を爲すを廢せずんば、余は如何にして、余の言か爾等に觸れたりと思ふことを得べきか。然れば余は復も全一の事を言ふを要するなり。嗚呼、我等は能く耐ふることを得るか。忍ぶとを得るか。我等は日々爾等が此所より何か有益なる事を學び得て歸り去らんとを勉め、盡力し居れり。然れども爾等の中、一人も能く如何様かの利益を得て歸り去る者なく、却つて皆害を受けて去れり。爾等は實に自身をも定罪せんが爲に集り、己の罪惡を毫も辯解するに能はず。而して比較的に敬虔なる人をも己の空しき談話を以て諸方より惱し、窘逐するなり。然るに猶多くの人は何を言ふか。彼等は云ふなり。余

には(教會に於て)誦まるゝ所の事聞えず、教會に於て何事の言はるゝか。余之を解せずと。然れども其は爾の談話するに因るなり。爾の躁ぐに因るなり。敬虔を満てたる心を以て來らざるに因るなり。爾は曰ふか(教會に於て)誦まるゝ所の事を解せずと。解せざるが故に爾は注意深き者と爲るを要するなり。明白ならざる事すら爾の心を醒さざらんには、若し誦まるゝ事が明白ならば、爾の注意せざる可きは猶更の事なり。(誦まるゝ事が)全然明白なるに非ざるは、爾をして不注意ならざらしめんが爲、又全然明白ならざるにも非ざるは、爾をして失望せざらしめんが爲なり。夫の(聖書に謂ふ)寺人は、化外人なりしにも拘らず、毫も爾の言ふが如き事を言はず、却つて多忙の中にも、途上に於ても、手に聖書を持ちて讀みたり。然るに爾は、許多の教師の中に在るに拘らず、他人が爾の爲に讀み、呉るゝに拘らず、我に對つて辯解を爲し、遁辭を爲す。爾は(教會に於て)告

げらるゝ所の事を解せざるか宜しく之を解せんが爲に(神に)祈るべし。尚適切に言へば爾が(教會に)於て聴く所の事を全然了解せざらんは能くす可き事に非ず蓋し多くの事は自ら分明にして解し易き事なればなり更に尚適切に言へば假令爾は全然何事をも了解し得ずとするも猶謹聴する者を惱まいらんやう神が爾の無言なると敬虔なることを見て爾の爲に明白ならざる事をも明白なる事と爲さんやう爾の緘黙す可きは當然の事なり爾は緘黙するに能はざるか然らば他人に害を爲さいらんやう外に出づべし教會に於ては常に只一の聲を聞く可し教會は一體なればなり是故に誦經者も一人にて讀み主教も坐して無言にて待ち唱歌者も一人にて謳ひ縦令衆人にて全時に聲を揚ぐるも有るも其聲は宛ら一の口より發するが如くし講話する者も一人にて講話す然るを許多の人が猥に種々雑多の事を談話せんには我等は何の

爲に無益に爾等を煩さん蓋し若し爾等が我等を以て無益に爾等を煩す者と爲さずば我等が重要なる事を述ぶる時爾等は全然不都合なる事を談話せざるならん然れば我等は己の生活に於てのみならず事物の見解上に於ても亦甚しき混雜に陥れるなり爾等は無用の事を慮り眞實を捨て影と夢とを追ふなり實に現世の事物は悉く是れ影と夢とに非ざるか影よりも尚劣れる者に非ざるか現世の事物は其の顯るゝや忽ちにして飛び去り飛び去るに先つて既に大なる不安心を生じ(其の生ずる)快樂よりも尙大なる不安心を生ず假令人此世に於て無数の財寶を獲之を地中に藏ひとも此世の生活の夜一たび過ぎ去れば極めて自然に裸體にて此世を逝る夢に富者と爲りたる者は既に起くれれば其の夢に有すと想ひたる物を何も有せざるが如く貪婪なる者も亦之に似たり否之よりも尙劣れり夢に富者と爲りたる者は其の有す

と想ひたる金銭を有せざるのみにして、其の有すと想ひたるが爲に何の悪しき結果をも受けずして起くれども、貪婪なる者は財寶を失ふが上にも、尙其財寶に由つて生じたる罪を己に滿て、此世を逝り財寶を有せしは只空想なるに、財寶に由つて生ずる害は空想にて之を嘗めずして實際に之を嘗め、快樂は夢の如くなりしに、快樂の罰は夢に之を受けずして實際に之を受け、尙適切に言へば、未來の罰を受くるに先つて、既に此世に於て最大なる罰を受け、財寶を集むるに方つて許多の不幸心勞、痛嘆、障碍、不愉快、不安心を以て己を疲らすなり。然れば我等は此夢を見ざらんや、夢に嘗むるに非ずして實際に嘗むる害を免れんや、貪欲の代に矜恤を愛し、強奪の代に仁愛を愛せん。蓋し我等は我等の主イエス、ハリストスの恩寵、仁愛に依り、是くの如くにして以て現世及來世の福樂を受くることを得ればなり。彼と父と聖神とに、光榮、權能、尊貴は歸す、今も何時も世々に、阿民

爾等各自ら矜恤金を蓄ふべし

「聖使徒パウロ曰く、聖徒に施濟するに至りては……七日の首の日毎に即ち日曜日毎に爾等各自其得る所に循ひ之を積みて自ら蓄ふべし」(多前書十)と、我等の生命の根及泉は此日に其始を得たり。然れば此日に於て爾等各自特に甲若くは乙の人のみならず、假令貧者又は富者なりとも、妻又は夫なりとも、奴隸又は自主の人なりとも、各……積みて自ら蓄ふべし」なり。而して余が今此を言ふは、窮乏者の爲に乞ふなり。尙適切に言は、窮乏者の爲に非ずして爾等施濟者の爲なり。假令爾等は或る人が施濟を爲し、其他多くの善を行つて、惡魔の力に勝ちつ、試誘に遇ひ、艱難に遇ふを見るも、之を憂ふること勿れ、惡魔に強く打ち勝つが故

爾等各自ら矜恤金を蓄ふべし

に彼は試勝に遇ふなり爾は曰はんか神は何の爲に之を許すかと曰や
 其人をして尙一層大なる榮冠を受くるに堪へ悪魔をして尙一層強
 打ち勝たれしめんが爲なり蓋し其人が善を行つて不幸に遇ひつゝ萬
 事に神に感謝すれば悪魔は打ち勝たるればなり事情の便なる時慈悲
 ある者と爲り善行者と爲るは大なる事なり然れども艱難の時善行を
 離れざるは尙一層重要なる事なり此場合に於て人は實に神の爲にす
 るなり然れば愛す可き者よ我等若し危難の中に在り又は何か不幸な
 る事に遇はば一層奮つて善行の功績を建つるやう爲さん蓋し今は報
 酬の時に非ざればなり我等は榮冠を此世に求むることを爲さん
 榮冠を頌ら與へらるゝ時至つて己の褒賞を減少せざらんが爲なり恰
 も猶自費を以て勞する技藝家は多額の報酬を受くるも傭主より費用
 を受けて生活する技藝家は遙に少額の報酬を受くるが如し之と同一

く聖なる者の中にも多くの善を行ひ且多くの不幸を忍ぶ者は十分
 なる褒賞を受け己の爲したる善事のみならず己の忍べる不幸の爲に
 も殊に大なる報酬を受くるも此世に慰樂して愉快に奢侈に生活する
 者は彼世に於て左まで光明なる榮冠を受けざるなり然れば我等は此
 世に報酬を求めず善を行つて不幸に遇ふ時殊に喜ばん蓋し神は我等
 の善行の爲將我等の受くる試誘の爲に褒賞を彼世に備へんとすれば
 なり
 以上に述べたる所を尙一層明瞭ならしめんが爲に我等は今爰に二人
 の富者ありと假定せん此二人たる共に慈悲ある者にして共に貧者に
 施濟を爲すも一人は依然として己の富有を維持し全く安樂に慰樂す
 るに一人は貧窮に陥り病に罹り艱難に遇つて猶神に感謝すと爲さん
 然らば此二人が聽て此世を逝りたらん時孰れが殊に大なる褒賞を得

爾等各自ら貯蓄金を蓄ふべし

べきか豈顯著ならずや其の疾病と艱難とに遇へる人なることは蓋し
 彼は安樂に於ても不幸に於ても人の弱點に陥らざればなり疑もなく
 其人なり此くの如き人は實に堅固なる城なり忠實なる僕なり然れば
 若し凡ての善行を爲すに天の國を目ざす凡ての國に勝る神の意旨
 を目ざすを要せんには善行の報酬を此世に於て受けざるが爲に善
 行を忽諸にする者の如きは將に何を受くるに堪へんとするか是故に
 我等は夫の寡婦を養ひ貧者を屢擧應せし者が火災に遇うて其家を失
 ひ又は之に類する他の不幸を嘗むるを見んども我心を擾さらん彼
 は之が爲にも亦將に褒賞を受けんとするなり例せばイオフの歎賞せ
 らるゝは其施濟の爲よりも寧ろ其後に忍びし苦難の爲なりイオフの
 朋友の非難せられ何の價値なき者と爲らるゝは其の現世に報酬を求
 め随つて不正に義人(イオフ)を非難せしが爲なり然れば我等は貧窮赤

貧を忍び此世の生命に報酬を求めざらん我等の前には天と天以上の
 福樂と備へられたり然るを此世の福樂を強ひて求めんとは極めて愧
 づ可き事なり我等は此くの如く爲さず却つて如何なる不慮の事に遇
 ふも常に神に歸向し福パウルの遺せる教を守らん己の家の裡に貧者
 の爲に箱を設け其箱を爾が祈禱に立つ所の邊に置き祈禱の度毎爾は
 先づ施物を其中に入れ而して後に祈禱すべし爾は手を洗はずしては
 祈禱を始めざるが如く施物を入れずしても祈禱を始むると勿れ施物
 を入るゝは福音書を寢臺の邊に懸くるより勝れり蓋し爾若し福音書
 を懸くとも自ら何事をも行はずば左迄利益を受けざる可きも若し今
 言ふが如き箱を設けば(天)の(王)の食を其内に存して惡魔に對する武器
 を有し己の祈禱に羽翼を生じ己の家を聖にすることを得べし此箱若
 し爾の寢臺の傍に在らんか爾は夜に妄想なきとを得べし但其箱の中

爾等各自ら貯蓄金を蓄ふべし

には不正の財を入るゝと勿れ爾の爲す所は施濟なり施濟は不人情より生ずると能はざるなり爾等若し欲せんには此くの如き進物は何所より出すべきか余は爾等に其源泉を示さん此進物を容易と爲さんが爲なり職工例せば靴匠革工銅匠其他如何様かの技藝家は何か其製作品を賣りたる時先づ其代價の初實を神に献じ又其代價の幾分を彼箱に入るべし箱に入れたる其少許の部分を以て神に願つべし(即ち貧者に願つべし)余は其の多からんことを要求せず唯夫の無數の惡に満ちたるイウデヤの子等の献じたる許りを要求するなり我等天を望む者も亦彼子等の献じたる許りを(彼箱の中)に入れん但し余は之を以て規則と爲すに非ず尙多額を入るゝことを禁するに非ず乃ち唯其の(代價の十分の一より少からざらんことを乞ふのみ)獨り物を賣る時のみならず買ふ時にも亦當に此くの如く爲すべし田野を有する者も收獲の時

に此法を守るべし凡そ正義にして物を獲る者は皆當に此くの如く爲す可し夫の他人を苦め他人の不幸に由つて富む軍士將高利貸の如きは言はず此等の人々よりは神は何物をも受けざるなり乃ち唯正義の勞を以て財を集むる者のとを言ふのみ我等若し此くの如き習慣を堅く守らんには後には此法を守らざること有るや否や良心は忽ちに我等を譴むべし我等親ら此事の難からざるを経験し漸次に高尚の徳に進み富を輕んずること慣れ己の衷より惡の根を抜き去り安穩に現世の生活を送り來世の生活に達することを得べし願はくは我等は皆我等の主イ、ス、ハリストスの恩寵仁愛に依つて來世の生活に達するを得んことを彼と父と聖神とに光榮權能尊貴は歸す今も何時も世々に阿民

神は我等の手を藉らすとも貧者を養ふとも得れども其の之を命ぜし

は我等をして互に相熱切に愛慕せしめんが爲なり 金口聖イオアン

爾等各自ら貯蓄金を蓄ふべし

後編

愛は大なる教師なり石をも能く人をも爲す

なり 金口聖イオアン

善良なる競争は他人の善きに則ることなり

全上

隣を妒む勿れ卑む勿れ貧窮を恐るゝ勿れ

聖使徒パウロ曰く神は其欲せし如く肢を以て各體に置けり若し皆一の肢たれば體は安に在るか今肢は多しと雖體は一なり(哥林多前書二十)と然れば我等は全く嫉妒を棄てん己より大なる恩賜を有する者を妒まず己より小なる恩賜を有する者をも輕せざらん是れ神の悦ぶ所

の事なり我等は咳かざらん爾若し猶も訝らんには宜しく思ふべし他人が屢爾の爲す所の事を爲す能はざるを然れば假令爾は其人より劣れりとも此點に於ては反つて其人に優るなり假令其人は爾より大なりとも此點に於ては爾よりも小なるなり夫れ是くの如くにして爾等は皆互に同等なるなり體の内なる肢も假令外觀は重要ならざる者にても(其實)重要な事を爲すなり重要なる肢も之を離れては不幸に遇ふこと屢なり例せば體の中にて毛は最些細なる物なり然れども若し眉毛及睫毛毛なからしめば顔は全く其美を失ふ可く目も今の如く美には非ざる可し假令其の失ふ所は重大ならずも之が爲に凡ての美を失ひ、皆に美を失ふのみならず幾分か又目の功用をも失ふ可し元來我等の(肉體の)肢は皆己の私の功用と公の功用とを有するものなり其美も私の美と公の美と有るものなり外觀にては凡ての肢互に分離せるが如

隣を妒む勿れ卑む勿れ貧窮を恐るゝ勿れ

くなるも、實際は密接に結合して、一の肢の害はるゝときは、他の肢も之が爲に害はるゝなり。試に思へ、喜ばし氣なる目、笑を含める頬、蓋、微、色、せる口、直なる鼻、形よき眉毛を有する者も、若し其中の一を害ふときは、之が爲に公なる全體の美を害ひ、全體は醜しくなりて、前に麗しく見えし者も、今は厭はしく見ゆ可し。例せば、爾若し鼻の端を傷つけんには、其の傷つけしは僅に只一の肢なるも、全體は之が爲に大に醜しくなり、手も若し其一指の爪を削がば、之と同一の結果を生ず可し。爾若し諸の肢の功用に注意せんには、亦同一の事あるを見る可し。試に一指を去れ、然らば、他の指の功用も亦減じて、前の如くには、其の爲す可き所を爲さざるを見る可し。一肢の損傷既に公の醜しきを爲し、一肢の保存既に公の美を爲すからには、我等は鄰を妬むとを爲さず、又驕るとを爲さざらん。重要なる肢は些細なる肢に由つて美と爲り、目も眉毛にて飾らる。是故に

兄弟に敵する者は、是れ自ら己に敵するなり。蓋し其人は曾に兄弟に害を爲すのみならず、己にも害を爲すと少からざればなり。然れば我等は此事なからしめんやう。己の爲に慮ると共に、隣の爲にも慮らん。教會の事とも肉體の如く爲して、教會の凡ての肢の爲に慮ると、己の(肉體の)肢の爲に慮るが如く爲さん。教會にも種々雑多の肢あつて、其或る者は重く、或る者は輕し。例せば、童貞女の群あり、寡婦の群あり、婚配して善く貞操を守る者の群あり、其他善行の數多の階段あり、矜恤の事に於ても、或る者は己の所有を悉く與ふるに、或る者は己の爲に只必要の物を存するを以て足れりとして、其餘の物を己に留めず。又或る者は有り餘るより分ち與ふれども、皆互に相裝飾するなり。然るに若し大なる者が小なる者を卑めんには、己に多くの害を爲す可し。例せば、童貞女若し婚配せし女を罵らんには、己の報酬を失ふと少からざる可し。悉くの所有を願

隣を妬む勿れ、卑む勿れ、貧窮を恐るゝ勿れ

ち與へし人若し悉くの所有を頽ち與へざりし人を罵らんには己の功勞を失ふと大なる可し然れども余は又何ぞ童貞女のと寡婦のと無慾なる人のとを言はん施濟を乞ふ者は最卑しき人に非ずや然れども施濟を乞ふ者も亦常に聖堂の入口に在つて教會に大なる利益を致し教會を大に裝飾するなり施濟を乞ふ者なくしては教會の圓滿は完からざるならん使徒等も亦た之を知れり故に最初に他の諸事に關する規則を設けると共に寡婦に關する規則をも設け寡婦に役事す可き七人の輔祭を立てたり余は教會の肢を枚舉する時には主教司祭輔祭童貞女及節制者を擧ぐると共に寡婦をも擧ぐるなり蓋し寡婦も亦頗る入用の物なればなり爾は思ひ立てる時のみ聖堂に來るも寡婦は晝に夜に此所に聖堂に在つて聖歌を唱ふるなり彼等の此くの如く爲すは僅に只施濟を得んが爲のみに非ざるなり蓋し若只之を受けんと欲せば

市場に行き十字街に憐を乞ふ可かりしならん故に彼等は又頗る敬虔なるなり乞ふ觀よ彼等は如何なる貧窮の爐の中に在るかを然れども爾は彼等が多くの富者の如く怨言を發したるを聞かず又痛嘆したるをも聞かざる可し彼等の中或る者は屢飢ゑて寢ね又或る者は寒氣の爲に常に凍ゆ然れども彼等は神に感謝し神を讃揚しつゝ其生を送れり彼等に些少の金錢を與へんか彼等は己に之を與へし者に感謝し其人に幸福多かれと言ふ可し假令何一物をも與へずとも彼等は痛嘆するとなく日用の糧に満足して神を讃揚し且愛を守るなり爾は言はんか彼等は斯くの如きを欲せざれども已むを得ず忍耐するなりと然れども余に告げよ如何にして然るか爾は何の爲に此痛ましき語を發するか豈翁媪の爲に有益なる愧づ可き職業は無きか彼等若し正しき生活を爲すとを欲せざらんには愧づ可き職業に由つて甚だ富裕に

隣を妬む勿れ卑む勿れ貧窮を恐るゝ勿れ

生活するを得ざるか。豈斯くの如き年齢の人々の中にも、如何に多くの輩は人を誘つて放蕩の行を爲さしめ、放蕩の行を爲すに助力し、又は之に類する他の職業に由つて生活するを得、剩へ豪奢に生活するをも得るに非ずや。然るに(聖堂の入口に居る彼等寡婦は、斯くの如き事を爲して己の一生を汚し、救贖を失はんよりも、寧ろ餓死せんことを希ふなり。彼等は終日坐して救贖の方法を爾に供するなり。醫師は手を伸べ、鐵(の器械)を用ひて、腐爛せる傷を清むるも、其功力は、乞食が手を伸べ、施濟を得て、傷の痂を除くに及ばざるなり。殊に驚歎す可きは、乞食が人に痛苦を覺えしめずして、其卓越なる治療を施す事、是なり。彼等は聖堂の入口に坐し、無言と外貌とを以て爾等に教ふる。我等が群衆の前に坐して爾等に有益の事を教ふるに劣らざるなり。我等は日々爾等に教へて曰ふ、人よ、驕ると勿れ、人の天性は變り易き者なり、暫時の者なり、青

年は忽ちにして老年と爲り、美は醜、元氣は無氣力、名譽は不名譽、壯健は疾病稱讚は誹謗、富有は貧窮に忽ちにして變ず、我等の天性は全く急流の如し、急流は何處にも止る能はずして、急に下方へ流ると、貧しき者も亦己の外貌と例とを以て之を教ふるなり、否、尙一層之を教ふるなり。而も其の教ふると最明瞭なり。現に聖堂の外に坐する者の中に、嘗て青年の時己の容貌の美を以て誇り、將大なる事を成し、者は幾人なるか。彼等醜しき者の中に、嘗て己の體の壯健と顔の美とを以て許多の人に優れし者は幾人なるか。疑ふと勿れ、笑ふと勿れ、人生は數多の斯くの如き例證を以て満さるゝなり。若し貧しき者賤しき者が王と爲りし事すら多からば、大なる者尊榮なる者の中に、賤しくなりし者貧しくなりし者ありとて、何を怪むに足らん。前者は殊に驚異す可き事にして、後者は極めて普通の事なり。是故に(聖堂の入口に坐せる)乞食中の或る者が、

隣を妬む勿れ、卑む勿れ、貧窮を恐るゝ勿れ

嘗て藝術、兵事、將富有を以て秀でたりとて之を疑ふと勿れ反つて大なる同情を以て彼等の爲に之を惜み併せて自身の爲に警戒す可きなり。我等も亦何時か同一の事に遇はざらんが爲なり蓋し我等も亦人にして移ろひ易き事物の變化の法に服するものなればなり然れども意ふに、猥に人を嘲笑ふ愚なる者の中には或は之を解せずして我等を嘲笑ふ者あらん曰く爾は何時貧しき者及乞食のと言ふを休めんとするか我等に不幸を預報し、赤貧のと言を説き、我等を乞食と爲すとを務むるを休めんとするかと然らず、余は斯くの如く言うて以て爾等を乞食と爲さんと務むるに非ず、反つて爾等をして天の富を得せしめんと務むるなり、恰も猶壯健なる人に病人のと言ひ、病人の苦痛を敘述する者、の如し、病人のと言ひ、病人の苦痛を敘述するも、壯健なる人を病人と爲さんとするに非ずして、反つて其人の壯健を保ち、其人をして病人の

不幸を恐れて不注意なからしめんとするなり、爾等の爲には、貧窮は其名稱のみにても恐る可き者の如く思はる可し。然れども我等は、千金を有する時と雖若し貧窮を恐るゝときは貧窮なるなり。蓋し貧窮なるは、何一物をも有せざる者に非ずして、貧窮を恐るゝ者なればなり。恰も猶不幸者中にも能く大なる不幸を忍ぶ者の爲に我等は哀泣せず、之を憫然なる者と爲さずして、反つて大ならざる不幸をも忍ぶ能はざる者の爲に哀泣し、之を憫然なる者と爲すが如し。大なる不幸をも能く忍ぶ者は稱讚及榮冠をこそ受く可き者なれ。若し此事の實に然るを知らんと欲せば、乞ふ、余に告げよ、如何なる軍士を我等は稱讚するかを、數多の打撃を受けて猶神氣を沮喪せず、首を擧げて、踏み留る者か、或は又、少しく打撃を受けて直ちに逃ぐる者か、我等が剛勇なる者と爲して稱讚するは、豈前者に非ずや、笑つて怯懦なる者と爲すは、豈後者に非ずや、我等

隣を妬む勿れ卑む勿れ貧窮を恐るゝ勿れ

は世渡の上よわたりのうへに於おても亦また當まさに斯かくの如ごとく爲なすべし即すなはち容よう易いに一切いっさいを忍しのぶ者を稱讚しょうざんすると勇敢ゆうかんに一切いっさいを忍しのびし建徳者けんとくしゃイオフイオフを稱讚しょうざんするが如ごとくし而しかして夫かの不幸ふかうを恐おそれ慄おそき未いまだ打撃たげきを被かうらざるに恐おそれて死しする者もののとを哀あはれ泣なく可べし蓋けだし闘争とうそうに於おても未いまだ敵てきの打撃たげきを被かうらず僅わずかに其そのの手てを舉あぐるを見みて己おのれの手てを舉あげずして逃にぐる者ものは闘争とうそうに未熟みじやくなる者もの弱よわき者ものとして笑わらはるればなり貧窮ひんきやうを恐おそれて僅わずかに其そのの將まさに來きたらんとするをだに忍しのぶ能あたはざる者ものも亦また正まさに斯かくの如ごときなり是故このゆゑに我等われらが爾等なんぢらを不幸ふかうの者ものと爲なすに非あらずして爾等なんぢら自ら己おのれを不幸ふかうの者ものと爲なすなり爾若なんぢらし未いまだ敵てきの打撃たげきを被かうらざるに其その危険きけんを恐おそれ慄おそかんには惡魔あくまは之これを見みて如何いかにして爾等なんぢらを嘲あざけらざらん尙なほ適切てきちうに言いはゞ若もし爾等なんぢらの爲ために將しやう來らいを懼おそるゝ危懼おそれが左さまで恐おそる可べからんには惡魔あくまは爾等なんぢらを打撃たげきするをも必要ひつたうと爲なさず只爾等なんぢらをして財寶ざいほうを得えせしめて後のち之これを失うしなはんとを懼おそるゝ

危懼おそれを以もつて爾等なんぢらを蠟ろうよりも柔軟やわらかならしむるならん蓋けだし我等われらは言いはゞ天性せいに由よつて何なにか己おのれの恐おそるゝ事ことを實驗じつけんして後のちは既すでに復また之これを其その實驗じつけん前ぜんの如ごとく恐おそる可べき者ものと爲なさゞればなり是故このゆゑに惡魔あくまは爾等なんぢらをして斯かくの如ごとき徳とくを得えせしめざらんが爲ために爾等なんぢらの未いまだ實地じつちに貧窮ひんきやうを嘗なめざる間に既すでに貧窮ひんきやうを懼おそるゝ危懼おそれを以もつて爾等なんぢらの力ちからを失うしなはしめ恰あたかも火ひの上うへに於おける蠟ろうの如ごとく爾等なんぢらの力ちからを失うしなはしめて常つねに強つよく恐おそれしめんとするなり實じつに貪欲こんよくを以もつて得えたる物ものの爲ために恐おそれ己おのれの有いうせざる物ものの爲ために悲かなしみ自身じしんは種々しゆしゆなる耻はづ可べき欲望のぞみに屈くつ服ふくしつゝ宛さながらら恩おんを知らざる僕しもべを拘こふるが如ごとく財寶ざいほうを己おのれの許もとに閉こぢ込こめ己おのれの所有しゆり物ものの爲ために慄おそく者ものは如何いかなる蠟ろうよりも尙なほ柔軟やわかにカインカインよりも尙なほ不幸ふかうなる者ものなり耻はづ可べき欲望のぞみ種々しゆしゆなる恐おそれ痛つら苦くなる係慮おんはかり及および戰慄せんりつは諸方しよほうより彼かれを漂たふはせて恰あたかも諸方しよほうより逆風さやくふうに苦くるめられ屢しばしば暴風雨ぼうふううに遇あふ船ふねの如ごとし斯かくの如ごとき人ひとは斷たえず風雨ふううを忍しのばんより

隣を妒む勿れ卑む勿れ貧窮を恐るゝ勿れ

も寧ろ死するが遙に勝れるならん恰もカインの爲に断えず戦慄せん
 よりも寧ろ死するの勝りたらんが如し然れば我等も亦斯くの如き事
 に遇はざらんやう惡魔の奸計を防ぎ其網を破り其戈の鋒を鈍くし其
 の我等に近づく凡ての道を閉さん爾若し貪欲を輕蔑せば惡魔が爾を
 打撃す可き隙なく惡魔は爾に近づくに能はざらん蓋し爾は惡の根を
 掘り取ればなり根なくしては惡しき果も結ばるゝとなし我等は常に
 此事を言へり又此事を言ふを廢せざらん但し我等の此言が如何なる
 成功あるかは火に因つて顯る可き日之を明示す可し夫れ彼日は各人
 の行を暴露し誰の燈の輝いて誰の燈の輝かざるかを暴露するなり彼
 日に於て誰の油を有し誰の油を有せざるか明らかになるなり願はく
 は何人も彼日に於て此慰藉に與らざるとなく凡て皆愛を以て富み輝
 ける燈を携へて新郎と共に門内に入らん如何なる言と雖我爾等を識

らず(馬太二十)てふ新郎の言よりも恐る可く悲ひ可きは有らず然るに
 (隣に對して)吝まらず與ふるを爲さずして此世を逝ぎ去りし者は彼日
 に於て此言を聞くなり願はくは我等は斯くの如き言を聞くとなく反
 つて左の最喜ばしく最好ましき言を聞かん曰く我が父に祝福せられ
 し者よ來りて創世以來爾等の爲に備へられたる國を嗣げ(同上二十五)
 ど蓋し我等は斯くの如くにして以て幸福に生活するを得人知に勝
 れる諸福を受くるとを得ればなり願はくは我等は皆我等の主イエス
 ス、ハリストスの恩寵仁愛に依つて之を受くるを得んとを彼と父と聖
 神とに光榮權能尊貴は歸す今も何時も世々に阿民

愛を追ひ求めよ

夫れ愛は實に我等より飛び去り我等が愛に進むには障碍多き者なり

愛を追ひ求めよ

是故に我等は愛を追ひ求めんが爲に大に力を盡さざる可からず。パウ
 ルは此事を言ひ表さんが爲に「愛を求めよ」と言はずして「愛を追ひ求め
 よ」と言ひ以て我等に愛を追ひ求むるを促し之に熱心せしめんとせ
 り。加之神も亦愛を我等の衷に植ゑ付けんが爲に、元始よりして多くの
 方法を用ひたり。夫れ神は我等全人類に一の首を賜ひたり。アダム是な
 り。何の爲に我等は皆地より發生せざるか。何の爲にアダムの如く完全
 なる者として發生せざるか。曰く我等相互の出生養育及發生が我等を
 して相互に愛着せしめんが爲なり。是故に神は女を土より造らざりき。
 縦令天性は同一なりとも、元祖が唯一ならざれば一致和合を我等に促
 すに足らざるが故に、神は我等の元祖を唯一と爲したるなり。現に我等
 は、止地を異にしてすら互に相遠ざかるに非ずや。然るを若し我等人類
 の原始にして二ならば、尙更互に相遠ざかりしならん。是故に神は恰も

一の首を以て全身を合一するが如く、人類をも合一したり。視よ、最初に
 人は外觀上二人なりき。故に又神は結婚を以て之を一に合はせたり。神
 は曰へり「是の故に人は其父母を離れ其妻に着きて二の者一體と爲ら
 ん」(創世記二)と。神は此所に「妻は」と言はずして「人は」と言へり。蓋し夫は殊
 に愛看強ければなり。而して神が其愛着を殊に強からしめたる所以の
 者は、其愛着の力に依つて、以て尊き者をして弱き者に心を傾けしめ、愛
 着せしめんが爲なり。尙神は結婚の事をも制定す可かりしが故に、妻の
 由つて以て出でたる所の者を妻の夫と爲したり。神の爲には、愛より貴
 きもの無きなり。蓋し斯くの如くにしてすら、最初の人、は忽ちに彼の如
 き無智に陥り、惡魔は彼の如き怨恨と嫉妬とを播けるからは、若し人唯
 一の根源より出でざりしならば、如何なる事にか立ち至らざりしぞ。斯
 くて又神は、或る者の命令して他の者の順従するを定めたり。蓋し同

愛を追ひ求めよ

尊は屢怨恨を生ずればなり。然れども神は民政を制定せずして王政を定めたり。而して此關係は恰も軍隊に於けるが如く、毎戸に於ても之を見るときを得るなり。夫は王の地位を占め、妻は執政又は將軍の地位を占め、子は第三等の權を有し、奴僕は第四等の權を有す。蓋し奴僕も亦己より卑しき者の上に權を有し、且屢其中の一人——固より自身も亦奴僕なれども——主人の代りに凡ての奴僕の上に立てらるゝと有ればなり。加之奴僕の間にも猶其權に種々の階級ありて、或る權は妻に屬し、或る權は子女に屬し、子女の中にも其年齢と男女の性との應じて種々の權あり、蓋し子女の間にも女性は(男性と)一様の權を有せざればなり。斯くの如く神は何處にも種々なる權と其階級とを定めたり。凡ての者をして心を一にし、大に相和合せしめんが爲なり。是の故に我等人類の未だ繁殖せざりし以前、即ち最初の人の唯二人のみなりし時

神は其一人に首長と爲り、他の一人に服従者たらしむることを定めたり。然れども又其首長たる一人をして、他の一人を輕蔑するとなし、他の一人を卑しき者として排斥するとなし、無からしめんが爲に、視よ神は服従者たる女を造る以前に於て既に女を尊重し、且之を首長たる男と結合せしめたり。神は曰へり、助者を彼(即ち男)の爲に造らん(創世記三)と。以て男の利益の爲に女の造られたることを表示し、男の爲に造られたる女に男を結合せしめたり。蓋し我等は我等の爲に造られたる者に殊に親めばなり。次に又神は女をして、其の男の助者と定められたることを誇り、(男女の間の)連結を破るゝなからしめんが爲に、女を男の肋骨より造り、以て女の身體の一部たることを教へたり。然れども又男をして、此事の故に誇らざらしめんが爲に、神は既に復元始の如く、人の發生の事を一に、只男はのみ歸せずして、反つて其反對に子を生むことを定めたり。固より子

愛を追ひ求めよ

を生むに於ても男に重きを歸したれども而も萬事を皆男に歸する
 ことを爲さざりき。
 見しか神は幾許愛の連結を設けしかを凡そ此等の連結の中に我等の
 一致和合す可き自然の約束は含まるゝなり實に天性の同一なるとは、
 我等を導いて一致和合せしむるなり蓋し凡ての動物は己と同じき者
 を愛(三の十九)すればなり妻の夫より出でたると子女の両親より出で
 たるとは我等を導いて一致和合せしむるなり是に於てか愛に多くの
 種類を生ず即ち我等は一人を父として愛し一人を祖父一人を母一人
 を乳母一人を子孫曾孫又一人を娘孫女一人を兄弟一人を甥一人を姉
 妹一人を姪として愛す然れども我等は又何ぞ一々親屬を擧ぐるを
 要せん神は我等をして相愛せしむるが爲に尙他の原因を設けたり即
 ち親屬間の結婚を禁じて我等をして他人に向はしめ他人をして我等

に親はしめたり他人は我等と自然に親族たる關係を以て合せられ
 たる者は非故に神は他の方法即ち結婚を以て我等と合せしめ一
 人の嫁に由つて二家を合一せしめ數親族と數親族とを相近づかじめ
 たり神は曰ふ爾の姉妹……と淫する勿れ……爾の父の姉妹とも淫
 する勿れ其他爾と結婚す可からざる爾の親屬たる娘とも淫する勿れ
 と斯く言つて神は此のごとき種類の親族を一々枚擧したり(利未記)
 爾が斯くの如き親族に對する愛の爲には爾が彼等と同一の胎より生
 れ又は他の方法を以て彼等と結合せられたるにて足れり何の爲に又
 愛の廣きを狭くす可きか何の爲に己の殊に愛す可き者を此の如き
 親族の中に求む可きか爾は他人より妻を娶り妻と共に親戚を得即ち
 其父母兄弟と其父母兄弟の縁者を得て己が愛を表す可き他の原因
 をも有し得るに非ずや見しか神は多くの方法を以て我等を結び合せ

愛を迫ひ求めよ

たるを然れども猶神は之を以て足れりとせずして更に我等をして互に相要する所あらしめたり斯くして以て我等を合一せんが爲なり蓋し入用は殊に交際を生ずればなり神は又凡ての物を凡ての地には存せしめざりき或る人々をして他の或る人々と交通せしめんが爲なり神は我等をして互に相要する所あらしめて後又之に其入用を満すの便をも得せしめたり若し交通の便なからしめんか不愉快と困難とは復起りしならん例せば醫士木工其他職人を要するも若し之が爲に遠く旅行するを要せんには其入用は皆満されずして終るならん是故に神は城市を建て凡ての者を一所に集めたり加之我等をして遠き地に住める者を訪ふに便利ならしめんが爲に城市と城市との間に海を横げ迅風を遣つて交通を便にしたり抑神は最初に凡ての人を一所に置きたり其の之を散しは最初の人々が一致を悪用したる後の

事なり神が凡ての方法を以て我等を結合し即ち我等の天性親族の關係言語將土地を以て我等を結合したることは其れ斯くの如し神は我等の地堂を失ふを欲せざりき若し欲せしならば初人を地堂には置かざりしならん乃ち我等が地堂を失ひし咎は誠命を犯し者に在るなり神は又我等の言語の種々なるを欲せざりき若し之を欲せしならば最初より既に斯くの如く爲しならん然るに最初に於ては至地は一の言語一の音のみなり(創世記十)是故に又神は地に住む者を剿滅す可かりしにも拘らず我等を他の物より造らず義人を(天に移さず義人を洪水の中に存して宛ら至地の火花の如き者と爲し我等人類を復此火花より燃え起らしめ即ち福ノイより出でしめたり神は又最初に妻の上に夫を置いて唯一の權を定めたり然るに後我等人類の間に大なる不和を生せしかば此に君王將執政者の如き他の權をも設け

愛を追ひ求めよ

たふ。此亦愛の爲なり。害心は我等人類を敗徳者と爲らじめ、我等人類を殺じたり。故に神は恰も醫士を置くが如く、城市の中に裁判官を置き、此の爲に傳染病の如き者たる害心を絶つて、諸人を一に集めんが爲なり。然るに又神は唯に城市のみならず、毎戸にも大なる和合あらしめんが爲に、夫には權力及上位を歸して之を重んじ、妻には愛情の武器を得せしめ、二人の間に子を生む恩賜を定め、其外尙他の愛の結合をも用ひたり。蓋し神は萬事を夫に委ねず、又萬事を妻に委ねずして、二人の間に之を分ち、夫には市場を委ね、妻には家を委ね、夫には食を求むることを任せ、蓋し夫は地を耕せばなり、而して妻には衣服を造ることを任せ、蓋し紡ぎ、將織るは、妻の爲す可き業なればなり。神は妻に紡績の術を知らしめたり。然るを斯くの如き秩序を破る貪欲の如きは、絶す可きなり。柔弱は多くの夫をして紡がしめ、其手に紡績器を持たし、

たり。然れども此にも亦神の照管の經綸は輝くなり。蓋し妻は更に切要なる他の事にも極めて必要にして、貧しき者も亦我等の生命を保つが爲に入用なればなり。此所謂入用とは、即ち何人よりも富める者も、他の人々と交際せざる能はず、貧しき者を要せざる能はざると是なり。蓋し唯獨り貧しき者が富める者を要するに非ずして、富める者も亦貧しき者を要し、而も富める者の貧しき者を要するとは、貧しき者の富める者を要するよりも一層大なればなり。爾をして此事を尙も明瞭に知らしめんが爲に、爾だに若し欲せんには、爰に二の城市あり、一は富める者のみにて成り立ち、他は貧しき者のみにて成り立ち、富める者の城市には一人の貧しき者なく、貧しき者の城市には一人の富める者なしと假定し、丁寧に此二の城市を區別し、其中孰れの城市が最自ら満足し得るかを觀よ、而して若し貧しき者の城市が

愛を追ひ求めよ

殊に自ら満足し得るを認めんには富める者の方一層貧しき者を要
するとは明白なり夫れ富める者の城市に於ては一人も職人なく建築
師なく木工靴匠麵包師農夫製繩者なく其他之に類する者は一人も無
かる可し蓋し斯くの如き事を業とする者すら富んでは其勞働の難き
を忍耐せざる以上は富める者の中に誰かは斯くの如き事を爲さん
とは爲す可き然らば此富める者の城市は如何にして存在するを得
べきか爾は曰はんか富める者は金錢を以て凡て此等の物を貧しき者
より買はんご然れども富める者若し貧しき者を要せば富める者は既
に自ら己を満足せしめざるなり彼等は如何にして家を建つ可きか彼
等は或は之を買はんか然れども買ふは其事の性質に由つて成し得べ
からざる事なり故に彼等は當に己の城市に職人を招いで上に定めら
る規則を破らざる可からず即ち彼等自身を其城市に移住せしむる當

初に我等の定めたる規則を破らざる可からず記憶せよ我等は貧しき
者を一人も此富める者の城市に無からしめんと言ひたるに非ずや然
るに視よ必要は我等の意に反して貧しき者を此城市に迎へ移らしめ
たり然れば城市が貧しき者なくして存在する能はざるとは明白なり
蓋し若し城市に頑として一人も貧しき者を入れざらんには城市は既
に復城市たらずして其存在を失ふ可し富める者の城市が貧しき者を
集め宛ら己の救者の如くせざれば自ら満足し得ざるとは此くの如し
次に我等は貧しき者の城市を觀んに其城市も亦富める者なくして困
窮す可きか曰く我等は先づ富の定義を下し其の如何なる物なるかを
説き明さん夫れ富とは如何なる物か曰く富とは金銀寶石將組の衣裳
の衣錦の衣是なり斯く富の如何なる物なるかを説き明して後純粹に
貧しき者の城市を立てんとするには此等の物を其城市より除かざる

愛を追い求めよ

可からず乃ち其城市には夢にだも黄金又は錦の衣を見るときは若向
 欲せんには銀をも銀の器物をも見ざる様せざる可からず余に告げよ
 其城市の住者は己の生活に困窮す可きか然らざるなり蓋し若し家を
 建つるを要せんか之が爲に要するは銀金將眞珠に非ずして技術と
 手となり普通の手に非ずして隣に掩はれたる手なり丈夫なる指と大
 なる力と木と石となり衣服を織るを要せんか之が爲に要するは亦
 金銀に非ずして手と技術と其勢に堪ふる婦女となり地を掘り耕すと
 を要せんか之が爲に要するは富める者なるか貧しき者なるか其の貧
 しき者なるとは明白なり若又鐵を鍛へ或は何か他の此くの如き事を
 爲すを要せんか之が爲には殊に貧しき者を要するなり果して然らば
 富める者を要するは其れ何れの時なるか豈城市を破壊するを要する
 時ならざらんや實に若し富める者の現るゝと共に此有徳の人余

(は)何れも餘計の物を求めざる者を指して有徳の人と言ふなり此有徳
 の人が黄金又は眞珠を望む慾を起し懶惰及奢侈に流れんには富
 める者は實に是れ一切を滅し去る者なり爾は曰はんか富若し無益な
 らば神は何の爲に之を賜ひしかと然れども富を神の賜ひしとは何に
 由つて之を知るか爾は曰はんか聖書に云ふ銀も我物なり金も我物なり
 り我之を己の欲する者に與ふ(哈基三)と然れども今若し此所(即ち聖書
 に)て笑(は)も耻(は)可き事ならざらんには余は斯くの如く言ふ者のことを
 笑ひ大聲を揚げて之を笑ひじならん宛も猶王の饗筵に與れる幼き童
 子か其饗筵の食物と共に凡そ己の目に觸るゝ物を口に入るゝが必
 し彼の如く言ふ者も亦聖書の言と共に己の妄想をも引用するなり余
 は知れり銀も我物なり金も我物なりて言ふ言は預言者の言なれども我
 之を己の欲する者に與ふて言は預言者の言に非ずして此の如く

愛を迫ひ求めよ

言ふ無知者の附け加へたるなり加之預言者は何の爲に彼の如く言ひしか余は之を爾等に説き明さん夫れ預言者アガイは屢猶太人に約束したゆき曰く猶太人のワフロンより歸つて後聖堂は復昔日の如く美しく建立せられんと然れども或る人々は其言を信せず神の殿が灰及塵の中より再び昔日の若き美觀を以て顯はるゝを殆ど能くす可からざる事の如く思ひたり故にアガイは其不信を絶たんが爲に神の言をして宛ら下の如く言ひたらんが如く猶太人に言ひたり曰く爾等は何を恐るゝか何故に信せざるか銀も我物……金も我物に非ずや我は己の殿を飾るが爲に他人の物を借る要なしと而してアガイは其言を言ひ堅めんとして尙附けて言へらく此殿の後の榮光は從前の榮光より大ならん(ハル基三)と然れば我等は王衣に蛛絲を織り込ませらん若し(此世の王の衣服なる)紫の衣に不良なる絲を混じて爲に残酷なる刑罰

を受く可からんには神靈止の事に於て斯くの如くするの重き罪たるは猶更の事なり但し余は又何ぞ聖言を増減するを言はん(聖書の或る一の句讀點又は或る一の不正なる讀方よりして多くの虚妄なる思想を生せしとは屢なり)爾は曰はんか富める者は何に由つて現るゝか聖書に云はずや貧富は主に由る(マテ廿四)と然れども我等は是くの如く詰る者に問はん凡ての富と凡ての貧窮とは皆主より來れるかを誰か能く斯くの如く言ふを得るか蓋し我等の見所にては多くの人は強奪を爲し墓の物を盗み魔術を行ひ其他之に類する事を行ひ以て大なる富を集め之を占有して生存するに堪へざるに非ずや余に告げよ斯くの如き富をも猶神に由つて來れりと言ふを得るか然らざるなり然らば何に由つて來れるか曰く罪に由るなり淫婦は己の身體を汚して富を得墓

愛を追い求めよ

盜賊は墓を發いて不義の富を集め、竊盜も亦壁を破つて不義の富を集む。斯くても猶凡ての富は果して神に由つて來れるか。爾は曰はん、土を引きたるも聖言を如何にす可きとを云ふ。先づ貧窮にも神は由らざる者もあるを聽け。而して後我等は彼聖言の之を言はん。今若し不節制なる少年が淫婦の爲、魔術者の爲、又は他の之に類する或る無用の欲望の爲に財寶を濫費して、貧しき者と爲らば、其は其少年の不節制に由るにて、神に由るに非ざる。とは明白に非ずや。之と同じは、若し又懶惰に由つて、貧しき者は爲り、無分別に由つて、貧しき者と爲り、危険なる不法の事を企て、貧しき者と爲れる者あらば、其人々及之に類する人々は神に由つて、貧しき者と爲れるに非ざる。極めて明白に非ずや。さては聖書は虚偽を信ずるか。曰く、然らざるなり。反つて凡そ聖書に載する所を相當に注意して研究せざる者が迷ふなり。蓋し若し聖書が虚偽を言はざ

ると明白ならば、若し又凡ての富が神に由るに非ざると明白ならば、不義の富は不義なる讀者の罪に由つて生ずるなり。意ふに我等は今唯聖書の誘はるゝとを禦いで止む可きならん。斯くして以て爾等の聖書を等閑にするを罰せんが爲なり。然れども余は極めて爾等を憐み、永く爾等の心安らかならず思煩ふを見るに忍びず。故に今先づ彼聖言を誰が何時誰に對て陳べしかを説明して、其疑惑を解ん。夫れ神が凡の人と談話するの一樣ならざるは、恰も猶我等が兒童に對つて談話すると成人に對つて談話するの一樣ならざるが如きなり。然るに彼聖言は誰が何時誰に對つて陳べし言なるか。曰く、舊約に於てソロモンが猶太人に對つて陳べし言なり。猶太人は感覺す可き事物の外何物をも知らず。唯此に由つて神の本能を推量したり。彼等は曰へり、彼(即ち神)猶能く併を與ふるや。(聖録七十一)又曰へり、爾(即ちハリストス)は如何なる休徵を我等

愛を迫り求めよ

に示すか(六ノ十)我等の先祖は野に在りてヤシナを食へり(三ノ十一)も
 服等の神は腹なりき(三ノ十九)夫れ是くの如くにして猶太人は神の
 を推置したりき故に審知者ソロモンは彼等に對つて神が人を富める
 者と爲し貧しき者と爲し得るを言へり然れども此れ神の必ず斯く
 の如く爲すを言ふに非ずして只若し欲せば斯くの如く爲すことを得
 るを言ふなり例せば預言者は曰へり主は海を指斥て之を乾し河々を
 して悉く涸れしむ(一ノ四)と然れども此れ何時も有らざりし事なり然
 るを預言者は如何にして此くの如く言へるか曰く彼は常に此事あり
 と言ひたるに非ずして唯神の斯くの如く爲し得るを言ひたるなり
 然れば神は如何なる貧窮如何なる富を我等に賜ふか曰く宜しく族長
 のを思ふべきなり然らば如何なる富を神の賜ふかを知るとを得べ
 し夫れ神はアブラムを富める者と爲し後又イオフを富める者と爲

むたりイオフ自ら言へるが如し曰く我等若し神より福を授けんに
 は災禍をも受けざるを得んや(一ノ十二)とイオフの富も亦た神に由り
 たりしなり次に賞讃す可き貧窮も亦神に由るなり神嘗て富める者に
 左の如く言うて此貧窮を勸めて曰へらく爾完全ならんと欲せば往き
 て爾の所有を售りて貧者に施せ……且つ來りて我に従へ(二ノ二十九)と
 又其門徒にも之を勸めて左の誠命を與へたり曰く金をも銀をも……
 二つの衣をも……執る勿れ(同上)と然れば言ふこと勿れ神は凡ての
 富を賜ふと富は殺人強奪其他多くの方法を以ても集めらるゝことは
 著明なる事なり其は兎に角我等は復た最初の問題に歸らん夫れ富め
 る者若し毫も我等に益を爲さざらんには彼等は何の爲に存するか我
 等は此事に付いて當に何を言ふべきか曰く上に陳べたるが如き不正
 の方法を以て自ら富めざる者は無益なれども神に富まされたる者は極

愛を追ひ求め

めで有益なるなり是れ其人々の事蹟よりして明らかにするを得るなり
 其のウラムは其富を以て凡ての旅人及窮乏者に利益したりき彼が
 人と意ひし三人の者の彼の許に到りし時彼は頓を屠り三斗の麥粉を
 捏ねたり追懐せよ彼は日中に天幕の入口に坐して懇切に吝まず己の
 所有を凡ての人に分ち管に其所有を分ちしのみならず身體をも服事
 せしめ其身の彼の如く年老いたるをも顧みざりき彼は旅人及窮乏者
 の保護者にして何物をも己の物と爲さず子をさへ己の物と爲さざり
 き蓋し彼は神の命に従つて己の子をも献げたればなり彼は己の甥の
 急を救はんとするや己の子のみならず己をも一家をも之が爲に献げ
 たりき而も其の此の如く爲しは財産を獲んが爲に非ずして偏に
 仁愛の心よりせしなり蓋し彼に救はれし者等が彼を其分捕品の處分
 者と爲しし時彼は二縷の絲にても鞋帶にても總て之を受くるを爲

ざりき(創世記三十四) 蓋し彼は己の甥の急を救はんとするや己の子のみならず己をも一家をも之が爲に献げたりき而も其の此の如く爲しは財産を獲んが爲に非ずして偏に仁愛の心よりせしなり蓋し彼に救はれし者等が彼を其分捕品の處分者と爲しし時彼は二縷の絲にても鞋帶にても總て之を受くるを爲
 福イオフも亦斯くの如くなりき彼は曰へり我我戸を凡て來る者の爲
 に開けり(約三十三) 我は盲者の目と爲り跛者の足と爲り弱き者の父
 と爲りき(同上二十九) 旅人は外に宿らざりき(同上三十一) 我は弱き者に
 其願ふ所を獲せしめざりし事あるか(同上三十六) 我は窮乏者に其懷の空
 しさを我戸を出てしめしと無し(同上三十四) 我等は今イオフの悉
 くの事を一々枚擧せざらんが爲に其尙一層大なる事を言へば彼は己
 の凡ての富を常に窮乏者の爲に用ひたりき爾若し神に由つて富める
 に非ざる者を觀み其の如何に富を用ふるかを知らんと欲するか然らば
 夫のラザリと共に記憶せられたる富める者を觀よ彼は(其食物の屑を
 も與へざりき)葡萄園を奪ひしアハアを觀よギエジイを觀よ其他之
 に類する凡ての人々を觀よ正義にして富みたる者は

神の誠命に合へて之を使用す能くも既に富を得る上に於て神を瀆し
 たる者は之を用ふる上に於ても亦神を瀆して淫婦及懶惰なる食客の
 爲に之を浪費し或は地に之を埋め或は戸を閉ぢて何物をも貧しき者
 に與へざるなり爾は曰はんか神は何故斯くの如き人に富むとを許す
 かと曰く神は寛忍にして我等をして痛悔せしめんと欲するに因るな
 り神は地獄を設け全世界を審判す可き日を定めたるに因るなり神若
 し不義にして富む者を忽ちに罰せんにはサクヘイは痛悔して己の嘗
 て奪びし物を四倍にして返却し己の財産の半を附して之を返却する
 時なかりしならんマトスイ若し相當の時を有せざりしならば轉じて
 使徒と爲ると能はざりしならん其他多くの此くの如き人々も亦正に
 然りしならん是故に神は寛忍にして凡ての人を痛悔に招くなり然る
 を若し人痛悔することを欲せず依然として従前の行を爲さんかパウル

既に其輩の之を罰へり曰く爾は剛愎と悔なき心とに循ひて己の爲に
 神の怒の日及び其裁判の顯現の日に怒を積む(羅馬二)と我等は此怒を
 免れんが爲に天の富を集め賞讃す可き貧窮を求めん然らば我等は來
 世の福樂を受くることを得ん願はくは我等は皆我等の主イエススハリ
 ストスの恩寵仁愛に依つて來世の福樂を受くるを得んとを彼と父と
 聖神とに光榮權能尊貴は歸す今も何時も世々に阿民

大なるかな愛の徳

我等は今爾等をして(愛の徳の如何に大なるかを納得せしめんが爲に
 言語を以て之を象ら——ん蓋し實際には何處にも之を見ざればなり
 (故に今若し言語を以て之を象ら——)ば愛の何處にも豊富に存する時
 世の當に幾許善良なるべきかを了解せん愛若し何處にも豊富ならば

大なるかな愛の徳

法律も裁判所も拷問も刑罰も其他何も之に類する物を要せざるならん蓋し若し凡ての人が相愛し愛されたらんには何人も人を侮辱するとなぐ人を殺すとなぐ争論も罵詈も騒動も掠奪も貪慾も如何なる惡も無くして惡事の名すら知られざるならん。愛の嘆賞す可き所以を言はんか他の徳に於ては惡を混じ例せば無慾なる人は屢其無慾を以て驕り能辯なる人は名譽心の病に罹り謙遜なる人は屢其心に己の謙遜なるを誇るも愛は總べて斯くの如き疫病に罹らざるなり蓋し何人も何時も己の愛する者に對つて驕らんとはせざればなり夫の或る一人を愛する者を余に示すと勿れ乃ち凡ての人を一樣に愛する者を示す可し然らば能く愛の價値を認むるを得べし尙適切に言へば爾若し欲せんには先づ一人の愛せらるゝ者と一人の愛する者とを想像せよ正當に愛する者を想像せよ正當に愛する

者は地上に生活すると宛ら天に生活するが如くにして常に心安らかなるを得己の爲に無數の褒賞を備ふ斯くの如き人は己の靈を嫉妬忿怒嫉妬驕傲浮誇惡慾有らゆる耻づ可き愛及凡ての惡事より潔く守る蓋し誰とて己に害を爲す者無きが如く此人は隣に害を爲すと無ければなり斯くの如き人は身猶地上に在つて既に(神使長)ガウリイルと比肩す可きなり愛を有する者は其れ實に斯くの如きなり然るに奇跡を行ひ完全の知識を有するも愛を有せざる者は假令幾千の死者を蘇すとも己は諸人を離るゝと遠く己に同じき僕と結合せざるが故に大なる利益を受くると能はざるなり是故にハリストスも隣に對する愛を以て己に對する熱切なる愛の表徴と爲せりハリストスベートルに謂つて曰へらく爾我を愛すると彼等(即ち門徒)に過ぎたるか……我が羊を牧せよ(約翰二十六)と視よハリストスは此所にも愛の致命よりも

大なるかな愛の徳

優れるとを言せり今若し此所に父あり其子を愛して之が爲に己の生命をも惜まざらん若し人其父のみを愛して其父の子を毫も顧みざらんには父は之が爲に甚しく心を傷めて其子の受くる輕蔑の爲に己の受くる愛を顧みざるならん人の父及子に對する關係に於てすら斯くの如くならんには神及人に對する關係に於ては猶更のとなり神は如何なる父よりも尙愛に富める者なり故に彼は主爾の神を愛せよ此れ誠の第一にして大なる者なりと言うて後尙附けて言へらく第二は是に同じき者」と斯く言うて猶止めずして更に附けて言へらく即爾の隣を愛するに己の如くせよ(馬太二十二ノ三)と注意せよ神は此第二の愛を要求するに第一の愛を要求すると殆ど同一の高度に於てせり彼は神に對する愛の事を謂つては爾心を盡しと言ひ隣に對する愛の事を謂つては己の如くと言へり己の如くとは爾心を盡しと言ふと同一

意義なり實に若し此言が正確に實行せられたらんには僕たる者も自主たる者も上に立つ者も從屬する者も富者も貧者も小き者も大なる者も有らざる可く惡魔すら人に知られざるならん否當に一の惡魔のみならず惡魔の如き者が千百ありとも若し我等に愛あらば彼等は我等に對つて何事をも爲すに能はざる可し惡魔が愛の火に耐ふるは枯草の火に耐ふるよりも難し愛は城壁よりも堅牢に寶石よりも堅固なり假令爾は他に此よりも尙堅牢なる物を指し示さんとするも愛の堅固なるとは一切の物に勝るなり愛には富も貧窮も勝つと能はず尙適切に言はば愛あれば貧窮もなく餘分の富もなく只貧窮將餘分の富に由つて生ずる善事あらんのみ我等は富に由つて満足を得べく貧窮に由つて心勞なきとを得可く富と離れざる心勞にも貧窮より生ずる危険にも遇はざる可し否余は又何ぞ愛より生ずる利益の事を言はん宜

しく想ふべし。愛は其自身に如何に美にして、幾許喜悅を生じ、幾許人の心を喜ばしむるかを。此は是れ専ら愛に固有の事なり。他の善行例せば、齋戒、貞潔、警醒は勞苦と伴ひ、不満足、惡慾、將驕傲と伴へども、愛は利益のみならず大なる満足を供し、而して之が爲には何の勞をも要せず、恰も善良なる蜜蜂の如く、諸方より善を集めて、之を他人を愛する者の心に藏む。若し人僕たらんか、愛は僕の務を自由よりも尙適意ならしむ。蓋し命令するも亦適意なる事なれども、愛する者は命令する時よりも、寧ろ順従する時殊に喜ぶなり。愛は事物の本質を變じ、且常に己と共に諸善を齋する者なり。愛は有らゆる母よりも尙慈悲深く、有らゆる女王よりも尙惠深き者なり。彼は難事、事を容易なる事、便利なる事と爲し、善徳を慕はしむ者と爲し、惡事を厭はしむ者と爲す。視よ己の所有を施すは、一見慈愛可事、事の如くなれども、愛は反つて之を以て適意の事と爲すなり。

他人の物を奪ふは、一見適意なる事の如くなれども、愛は之を適意なる事と認むるを許さず、反つて違法なる事として之を避けしむるなり。他人を惡口するを諸人は適意なる事の如く思ふも、愛は之を不適意なる事と爲して、反つて他人を善く言ふを適意なる事と爲すなり。實に我等は己の愛する者を讃むるが如く適意なる事はなきなり。怒は其中に幾許か愉快を存すれども、愛と共に存するに能はざるなり。愛は全く怒を滅する者なり。假令愛せらるる者が愛する者を凌辱すとも、愛する者は之が爲に怒るとなく、只泣き、諭し、請ふと有るのみ。愛の怒を距る遠きは、斯くの如し。愛は罪を犯す者を見れば、泣き悲むも、此悲哀も亦快樂を得せしむる者なり。愛の涕泣、悲哀は、如何に笑ぶよりも、如何に喜ぶよりも、尙適意なる事なり。笑ふ者は己の愛する者の爲に泣く者の感ずるが如き、慰樂を感ずると能はざるなり。爾若し之を信せざらんには、彼等

の泣くことを制止せよ。然らば彼等は何か極めて不適意なる事に遇ひたるものゝ如く、心を傷むべし。爾は曰はんか、愛には不潔なる快樂ありと。然らず。悪口するを休めよ。如何なる事とて、真正なる愛の如く、不潔なる快樂に關係遠きものは無きなり。

言ふと勿れ、鄙俗の下等なる愛の如き愛は、愛よりも寧ろ疾病なり。宜しくパウルの要求する所の愛を理會すべし。夫れパウルの要求する所の愛は、己の愛する者の利益を目的とするなり。爾若し此愛の愛を理會せば、此愛を有する人々の慈悲深きと、父にも勝れるを知るべし。恰も金錢に戀着する者は、之を消費するに忍びずして、其の減少するを見んよりも、寧ろ困窮せんと欲するが如く、他人を愛する者も亦、其の愛する者の害を被るを見んよりも、寧ろ自ら無数の困苦を耐へ忍ばぬとするなり。爾は曰はんか、侍衛長の妻たる埃及の女は、イオシフを愛

せしも、之に害を加へんと決心せしに非ずやと曰く、彼女は悪魔の愛を以てイオシフを愛せしなり。然れどもイオシフは斯くの如き愛を有せずして、パウルの要求するが如き愛を有したり。宜しく思ふべし。イオシフの言は如何なる愛を満て、而して埃及の女は如何なる事を陳べしかを。彼女は曰へり、我を辱め、我を淫婦と爲せ、我夫を侮辱し、我家を紊亂し、且爾自身も神の前に於ける勇を失へと。斯くの如き言は是れ、彼女がイオシフを愛せず、自身をも愛せざりしことを表すなり。然るにイオシフは之に反して、真正に彼女を愛したりしかば、悉く其言を斥けたり。加之己の獄に繋がる、原因を述べ、必要に遇ひし時も、其事情を開陳せざりき。然らば如何にせしか。彼は曰へり、我は誠に希伯來人の地より掠れ來りし者なり。何も悪しき事を爲さず（同上四十五）と。而して一般に何處にも敬淫婦のと言はず。己の行を誇ることを爲ざりき。若し他の諸人ならば、

大なるかな愛の徳

假令浮誇の爲ならずとも少くも人をして己の獄に投せられたるを、悪しき行の爲なりと思はしめざらんや、斯くは爲さざらんに、イオシフは此くの如くしたりき、世の實際に罪ある者すら、他人を讒訴することを慎まず、縱令其實際の爲に自ら耻辱を被るも、猶他人を讒訴することを慎まざらんには、イオシフが其身の潔白なるに拘らず、侍衛長の妻の怨の事を言はず、彼女の罪を公にせず、己既に權勢を得て、全埃及の執政者と爲つて、後、猶彼女に對して怨を懷かず、之に復讐せざりしを見ては、驚かざるを得んや。

視よ、イオシフは如何に侍衛長の妻の幸福を慮り、而して彼女は如何にイオシフを愛せず、反つて狂暴の事を行ひしかを、實に彼女はイオシフを愛せずして、只己の淫慾を満さんと欲したり、若し注意して彼女の言を觀察せんには、其言は忿怒と大なる害心を満てたることを知るを得

べし。彼女は如何に言ひしか、曰く「視よエウレノ人を連れ來りて我等に讒れしむ」(創世記三十四)と、彼女は己の夫の(イオシフに對する)恩惠を咎め(イオシフの)衣服を示して、如何なる猛獸よりも尙兇猛なる者と爲りたり。イオシフは然らざりき、然れども余は又何ぞ彼女に對するイオシフの厚意の事を言はん、イオシフは危く己を殺さんとしたりし兄弟等に對しても、亦斯くの如くなりき、家に於ても、外國人の間に於ても、何時も其兄弟等のとに付いて何も悪しき事を言はざりき、夫れ實に斯くの如くなるが故に、パウルは愛を呼んで諸善の母と爲し、愛を尊んで奇蹟を行ふ事及其他の恩賜に勝れりと爲すなり、恰も猶善美なる衣裳を着け、善美なる履物を穿つも、我等をして其人の王たることを知らしむるには、或る衣裳を着くことを要すれども、若し紫衣と王冠とを着くときは、他に又何も王位の記章を要せざるが如く、今言ふ所の事(即ち愛の事)に

於ても亦正に然るなり愛の王冠に有れば曾に我等の爲のみならず、
 不信者の爲にもハリストスの眞の弟子を十分に區別するなり主曰へ
 らく爾等若し相愛せば人皆此に由りて爾等の我が門徒たるを知らん
 (約三十三)と此記章は是れ有らゆる記章よりも尙重要な物なり蓋し此
 記章に由りてハリストスの弟子は認知せらるればなり假令幾千の体
 徴を行ふ者と雖若し互に相敵視せば不信者に嘲笑せらる可く之に反
 して假令毫も休徴を行はざる者にてても若し誠實に互に相愛せば諸人
 に尊敬せらるゝ者と爲り咎なき者と爲る可し我等がパウルを嘆美す
 る所以も其の死者を蘇し癩病者を清めたるに在らずして其の下の如
 く言ひたるに在るなり即ち誰か弱りて我も弱らざらん誰か蹟きて我
 熱中せざらん(哥林多後書十)と言ひたるに在るなり假令爾は此事に比
 するに幾千の休徴を以てするも一として之に同じき者なかるべし加

之パウル自身も己の休徴を行ひたるが爲に大なる褒賞を受く可しと
 爲さずして弱き者の爲に弱き者の如くせし爲に大なる褒賞を受く可
 しと爲したり故に曰へらく我が賞は何に由るか我福音を傳へて人を
 して費なく(ハリストスの福音を得しめ……)しに由る(九ノ林多前書)と諸
 使徒に比して己の卓越なるを述べし時にも我は諸使徒よりも多く
 の休徴を行ひたりと言はずして我は彼等衆よりも多く勞せり(同上)
 と言へり彼は弟子等を救はんが爲には餓ゑて死なんとすら欲したり
 故に曰く我寧死すとも人をして我が誇る所を虚しきに歸せざらしめ
 ん(同上)とパウルの斯くの如く言ふは自ら讃めんが爲に非ずして弟
 子等を讃むと思はざらしめんが爲なり彼は事情に促されざれば何時
 も己の完全を誇ると無し反つて必要あれば自ら呼んで愚(哥林多前書
 一ノ一)と爲し其の何時か誇ると有れば則ち弱きとを以て誇り苦難

を以て誇り、他人の不幸に對する大なる同情を以て誇りたり。此所に「引けるコリンフ後書」にも云へるが如し。曰く「誰か弱りて我も弱らざらん」と斯くの如き言は、苦難を受くるよりも勝れり。是故にパウルは最後に之を述べて、己の言を強くしたり。夫れ我等は、パウルと何を比するに堪ふるか。我等は自己の幸福の爲にも金銭を輕んずることを欲せず、己の所有の餘分をも（人に）與ふることを欲せざるに非ずや。然るにパウルは斯くの如くならずして、反つて己に石を投じ、己を鞭ちたる者に、天國を得せしめんが爲に、己の靈をも身體をも献げたり。彼は曰へり、我等に愛の新なる誠命を與へ、自らも之を實行せし。ハリストスは、我に教ふるに、斯くの如く愛することを以てしたり。人はハリストスに由つて無より造られ、限りなき恩恵を受け、而も猶ハリストスを辱め、ハリストスに唾したるに、ハリストスは萬物の王たり、幸福なる者たるに拘らず、猶斯くの如き

人を嫌忌せずして、之が爲に自ら人と爲り、淫婦又は税吏と交際し、惡鬼に憑られたる者を癒し、天國を約束したり。斯くて尙人はハリストスを捕へて其頬を打ち、之を縛し、之を鞭ち、嘲弄し、終に十字架に釘うちたれども、ハリストスは人を嫌忌せず、十字架上に懸けられながらも、父よ彼等に其罪を赦せ（路三十四三）と言へり。盜賊は初にハリストスを罵りしに、ハリストスは之を天國に入れ、パウルは窘逐者なりしに、ハリストスは之を使徒と爲し、イウデヤ人はハリストスを十字架に釘うちしに、ハリストスは反つてイウデヤ人を救はんが爲に、己に信服せる親近なる弟子等を死なしめたりと。然れば我等は神及人の行ひたる此凡ての事を思つて、其善き行に則り、有らゆる恩賜に勝る愛を己の衷に養ひ、以て現世及來世の福樂を獲るやう爲さん。願はくは、我等は皆我等の主イ、ス、ハリストスの恩寵仁愛に依つて之を受くるを得んとを、彼と父と

聖神とに、光榮權能尊貴は歸す、今も何時も世々に、阿民

愛は永く墮ちず

聖使徒パウロ曰く「愛は永く墮ちず」と。此は是れ何を謂ふか。曰く、愛の忍んで衰へず、斷絶せざるを言ふなり。蓋し「愛は常に愛すればなり」(他人を愛する者は如何なる事ありとも、何時も他人を惡むと能はず。愛の最大なる價值は此に在るなり。パウロは實に斯くの如くなりき故に曰へらく「或は如何にしてか我が骨肉の親屬の嫉を起して其中の或者を救ふ」を得ん(羅馬十四)と。パウロは是くの如く言うて其希望を廢止せざりき。又テモズイをも諭して曰へらく「主の僕は争ふ可からず、乃柔和に衆人待ひ……溫柔を以て逆ふ者を戒むべし、神或は彼等に悔改を與へて眞實を識らしめん(提摩太後書二)」と。爾は曰はんか、我等は敵をも異教

人をも惡む可からざるかと。曰く、惡む可きなり、但敵及異教人を惡まずして其教を惡み、人を惡まずして惡しき行爲及邪なる意志を惡む可きなり。人は神の工なり、迷妄は惡魔の工なり、是故に神に屬する物を、惡魔に屬する物と混ずると勿れ。猶太人はハリストスを謗り、窘逐し辱め、ハリストスのとに付いて多くの惡しき事を言ひたり。然れども衆に超えてハリストスを愛せしパウロは、猶太人を惡みしか。然らず、彼は反つて猶太人を愛し、猶太人の利益の爲に萬事を爲せり。故に自ら言へり「我がイスライリの爲に心に願ふ所と神に禱する所とは其救を得るに在り」(羅馬十)と。又曰へり「我は我が兄弟……の爲には自らハリストスより絶たれんことをも或は願ふなり」(同上九)と。イエゼキイリも亦猶太人の亡ぶるを見て曰へらく「嗚呼、主よ爾は……イスライリの殘餘者を悉く亡ぼし給ふや」(以西結九)と。モイセイも亦曰へらく「若し彼等の罪を赦す可くば

愛は永く墮ちず

救し給へ(出埃三十三)と然るを何故ダワドは下の如く言ひしか(主や我豈に爾を疾む者を疾まざらんや我豈に爾に逆ふ者を厭はざらんや我甚しき疾を以て彼等を疾(聖詠百三十八)むと曰くダワドの聖詠に載する所は悉く皆ダワドの述べしには非ざるなり例せば聖詠の中に我……キダルの幕の旁に居る(百五十九)と曰へるとあり又我等曾てワワロン(河邊)に坐し……泣けり(百三十一)と曰へるとあり然れどもダワドはワワロンをもキダルの邑をも見たるとなきなり他方よりして言へば今や我等(ハリスタスアニン)は尙一層高尚なる明德を要求せらるゝなり故に(ハリスタス)の弟子等がイリヤの時の如く天より火を降さんことを乞ひし時ハリスタスは曰へり爾等は自ら如何なる神に屬するを知らず(路加九)と。

當時(即ち舊約時代に於ては猶太人は曾に不敬度を惡むとを命せられ

たるのみならず不敬度なる者をも惡むとを命せられたりき是れ不敬度なる者と親みて猶太人の不敬度に陥るとなからしめんが爲なり是故に猶太人は異邦人と結婚し異邦人に混ずるとを禁せられ異邦人との間(四方)に離を設けられたりき然れども今や神は我等を高尚の徳に導き猶太人の(遇ふ)が如き危険に超越せしめたり故に我等には異邦人と交際し異邦人と談話することを命じたり蓋し我等は異邦人より害を受くるとなくして反つて異邦人が我等より利益を受くればなり爾は曰はんか然らば如何にすべきと曰く只當に惡まずして慈憐を表すべきなり蓋し爾若し惡まば迷へる者を如何にして正しきに歸らしむることを得不信者の爲に如何にして祈禱することを得べきか不信者の爲に祈禱す可き事は乞ふ聽けバワルも下の如く言へり曰く我凡の事に先だちて勸む衆人の爲……祈禱祈願懇求感謝を爲さんとを(提摩

二)と然るに當時の人皆信者に非ざりしとは諸人の善く知れる所なり斯くてパウロは尙曰へらく王及び凡を權を操る者の爲に祈禱願懇求感謝を爲さんことを(上)と然るに此王及凡を權を操る者が不敬虔者たり不法者たりしとは此亦諸人の善く知れる所なり斯くてパウロは尙何故祈禱せざる可からざるか其理由を示して曰へらく蓋此我等の救主神の前に善にして納れらるゝ事なり彼は衆人が救を得及眞實を知るに至らんことを欲す(三)上)と然ればパウロは又異教の女子と信者と夫婦たる場合に於ても其婚姻を解かざりき然れども妻と最近なる者は夫に非ずや聖書に曰く二の者一體とならん(創世記二)故に夫婦の間には大なる愛と熱き愛着とを存するなり我等若し不敬虔者及不法者を悪まんには更に歩を進めて罪ある人をも悪むに至る可く斯くして漸くに兄弟の大部分を離れ否尙適切に言へば凡ての兄

弟を離るゝに至る可し蓋し人として罪なき者は一人も有らざればなり若し神の敵を悪まざる可からざらんには特に不敬虔者のみならず罪ある人をも猶悪まざる可からず然れども斯くては我等は「フリセイ」の如く驕傲し凡ての人を嫌忌して猛獸よりも尙悪しき者と爲る可しパウロの命じたる所は斯くの如くならざるなり如何に命じたるか曰く彼は云へり「妄行なる者を傲め氣餒るたる者を慰め弱き者を扶け衆人を待つに寛忍を以てせよ(帖撒羅尼迦前)と爾は曰はんかパウロは如何にして下の如く言ひしか曰く若し……我等の言を聴かざる者あらば彼を誌して輿に交る勿れ(同後書三)と曰く此れ實に兄弟の事を言ひたり然れども單に斯くの如く言ひたるに非ずして溫和に之を言ひたり宜しく其次の言にも注意す可し蓋し「輿に交る勿れ」と言うて後尙附けて然れども彼を敵の如くする勿れ乃兄弟の如く訓へよ(同上)と云

愛は永く墮ちず

ひたればなり見しか、パウロは如何に人を悪まずして悪しき行を悪む
 とを命せるかを。夫れ我等をして互に相離れしむるは、悪魔の所爲なり。
 悪魔は我等の間に愛を絶たんとを大に勉む。我等をして悪しき行を矯
 正するとなく、或る者をして依然として迷はしめ、爾をして之を敵視せ
 しめて迷へる者の救はるゝ道を杜絶せんとするなり。醫士若し病者を
 惡み之を避けて、病者も亦醫士を嫌はんに、病者は醫士を招かず、醫士
 も病者の許に至らずして、如何にして病者は平癒す可きか。是故に余に
 告げよ、爾は如何なれば他人を嫌ひ、之を避くるか。或は其人の不敬虔な
 るに由るか。然れども、爾は其病者を快復せしめんが爲に、其許に往き、之
 を治療するを要するなり。假令其人不治の症を病むとも、爾は己の當
 に爲すべき所を爲すとを命せらるゝなり。イウダも不治の症を病み、
 然れども神は之を治療するを休めず。故に爾も亦之を等閑に附する

と勿れ。假令爾が全力を盡して、猶彼を不敬虔より救ふと能はずとも、若
 し斯くの如く爲さば、爾は實に之を救ひたるものゝ如く褒賞を受く可
 く、彼は此に由つて爾の温和なるに驚き、斯くて終に神は榮を受く可し。
 假令爾は奇跡を行はんとも、死者を復活せしめんとも、其他何か之に類
 する事を行はんとも、異教人は爾の温和なるを見、善良なるを見、懇懃な
 るを見たらん時の如く、爾に驚歎すると有らざる可し。實に此は是れ重
 大なる事なり。蓋し多くの人は、斯くの如くにして終に己の惡を棄つる
 とを得ればなり。何物とて、愛の如く(人の愛情を惹く者は有らず。他の事
 即ち休徴奇跡の爲には、人は爾を妒むと有れども、愛の爲には、爾を嘆賞
 し、爾を愛し、愛して漸次に終に眞理をも認むるに至る可し。假令異教人
 が急遽に信者と爲らずとも、爾は之を怪むと勿れ。急ぐと勿れ。一時に諸
 事を要求すると勿れ。乃ち彼は今唯爾を讚め、爾を愛して、後漸くに信者

愛は永く墮ちず

と爲るに至る可し。此事の重要なるを明らかにせんが爲に乞ふ聽けば、
 ワルが不信者なる裁判者の前に立つて、如何に自ら辯護せるかを彼は
 曰へり「今日悉く爾の前に辯解するを得るは我幸なりとす」(使徒行實三)
 と。パウルの斯くの如く言ひしは、諂ひたるに非ずして、溫和にして利益
 を占めんと欲せるなり。而してパウルは實に幾分か其欲望を達したり。
 裁判せらるゝ身にして、裁判者を捕虜と爲したり、捕虜とせられたる者
 (即ち裁判者)自ら衆人の前に大聲にてパウルの此勝利を告げたり。曰く
 「爾我を勸めてハリスチアニンたらしめざること少しのみ」(同上二十六)
 と。

然るにパウルは如何にせしか。曰く、パウルは愈其網を擴げたり。彼は曰
 へり「神に隣らしくは唯爾のみならず、乃凡そ今日我に聽く者は此の械繫
 の外我に同じき者と爲らん」(同上三)と。パウルよ、爾は何故械繫の外と言

ふか、爾若し械繫を耻ぢ、之を避け、而も彼の如く多くの民の前にて之を
 耻ぢ、之を避けば、如何にして毅然たるを得るか。爾は常に書札の中に
 自ら囚者と呼び、寶石の如く此械繫を我等に示して、誇るに非ずや。然る
 を何故今之を避くるか。パウルは曰ふ、我は之を避くるに非ず、耻づるに
 非ず、只他人の弱きを寛容するのみ。蓋し彼等は未だ我の誇る所の者を
 納るゝ能はざればなり。夫れ我は新しき布片を用て舊き衣を補はざる
 とを主より教へられたり(馬太九)故に我は斯くの如く言ふなり。彼等は
 今猶我等の教を悪様に解し、十字架に敵對す。然るに更に械繫を加へば、
 彼等の嫉惡は愈大にならん。是故に我は彼等を區別す。我等の教を納得
 し易からしめんが爲なり。彼等は囚者と爲るを耻づ可き事と思ふ可し。
 蓋し彼等は未だ我等の榮譽を味はざればなり。故に我は彼等に對して
 寛容するを要するなり。彼等若し明德を明らかにするに習熟せば、鏡

愛は永く堅うす

索の美なるを知り、械繫の榮譽なるを知らん。夫れバワルは、他の人々に對つては、苦難を呼んで恩寵の賜物と爲したり。曰くハリストスの事に關して爾等に賜はりしは、唯彼を信するのみならず亦彼の爲に苦を受くるなり。〔群立比九〕と然れども此所〔即ち使徒行實〕には、只聽者をして十字架を耻ぢざらしめんとを望む可かりき。故に徐々に其歩を進めたり。今若し人あつて他人に王宮を拜觀せしめんとせば、先づ入口の諸室將外部を拜觀せしめずして直ちに奥なる室を拜觀せしむると無かる可し。蓋し若し然せずんば、奥なる諸室を拜觀するも、王宮全體を知らざるが故に、王宮も猶其人の爲には驚く可き者と見えざる可ければなり。之と同じく我等も亦寛容にして、愛を以て異教人を待遇せん。愛は大なる教師なり。愛は人をして迷妄を脱せしめ、習慣を匡正し、明德に導き、石をも能く人と爲すなり。爾若し愛の功用を知らんと欲せば、夫の影にも

慄ぐ怯懦なる者、或は怒り易く粗暴にして人よりも寧ろ猛獸に似たる者、或は肉慾に耽り佚樂を愛し、凡ての惡事に身を委ぬる者のことを思へ。試みに、其人を愛の手に委ね、愛の學校に入れよ。然らば容易に其怯懦なる者の、如何に勇壯なる者、大度なる者、萬事に勇敢なる者と爲るかを見る可し。殊に驚く可きは、其人の斯くの如くなるは、其本體を變じたるに由るに非ずして、愛が怯懦なる心に其効力を顯したるに由る事是なり。恰も猶劍を作るに鐵を以てせずして鉛を以てし、鉛の本質を變せずして而も鐵と同一の効力を有せしめたらんが如きなり。イアコフは内氣なる人なりき。家に坐して勞働をも危険をも知らず、苦慮なく安靜なる生活を爲し、恰も深窓の處女の如く、多くは留つて其家を守り、市場にも、凡ての喧噪にも、市場の凡ての事にも遠ざかつて、常に苦慮なく安靜に生活したりき。然るに視よ、愛の火が一度此内氣なる己の家より出でた

愛は永く墮ちず

ると無き人を熱するや、彼は勇敢にして、労働を好む者と爲りたり。乞ふ之を余の口より聽かずして、族長「イアコフ」自身（創世記三十八）の口より聽け。彼は異を責めて曰へらく「我は此二十年爾と偕に居りたり」（創世記三十八）と二十年の間、彼は如何なる境遇に在りしか。曰く「彼は自ら此事をも陳べて云へらく「我は是くありつ晝は暑に夜は寒に犯されて目も寐るの逸な（同上）かりきと、籠には安靜に生活し己の家より出でたるとなき、内氣なる人も斯くの如くに生活したりき。彼が怯懦なりしとは、其のイサフに遇はんとを甚だしく恐れたるに由つて明白なり。然るに視よ、此怯懦なる人も愛に由つて獅子よりも勇ましき者と爲りたり。彼は恰も胸壁の如く、衆よりも前に立ち、其の思へるが如く、實に殺氣満ちたる殘忍なる者（即ちイサフ）に先づ自ら面會し、身を以て己の妻等を守らんと期したり。彼は己の恐れし者と、先づ自ら戦はんと欲したり。蓋し其の妻等に對する

愛は恐怖よりも力強かりければなり。視よ、怯懦なる者が其性質を變せず、只愛に固められて、戦に勇敢なる者と爲れるとを蓋し、彼は其後と雖猶怯懦なりければなり。其の諸所に移住したるに由て明白なるが如し。但し斯の如く言ふも、何人も之を以て義人「イアコフ」を謗ると思ふと勿れ。怯懦なるは惡事に非ざればなり。怯懦は天性に由るなり。咎む可きは怯懦に由つて何か不面目の事を行ふと是なり。天性に由つて怯懦なる者も、敬虔に由つて勇敢なる者と爲るとを得るなり。モイセイは如何なる者なりしか。彼は一人の埃及人を恐れ、埃及の境外に逃走せしに非ずや。然るに此僅に一人の威嚇を忍ぶ能はざりし脱走者も、愛の甘味を味つて後は、毫も他より強ひられずして、勇ましくも己の愛する者と共に死せんとす。決心せしに非ずや。彼は曰へり「若し彼等「イスラエリ人」に其罪を赦し給ふ可くば、之を赦し給へ。然らずば願はくは爾の書き記し

愛は永く墮ちず

給へる書の中より我名を抹し去り給へ(二ノ埃及記三十)と。他方よりして言へば、愛は又残忍なる者を温和なる者と爲し、不節制なる者を貞潔なる者と爲すなり。此は是れ例證を要せずして、何人も善く知れる所の事なり。如何なる猛獸よりも尙猛惡なる者も、愛に由つて如何なる羔よりも尙溫柔なる者と爲るなり。例せば、サウルは極めて狂暴猛惡なる人なり。然るに其女が彼の敵を逃しし時、彼は其女に對つて荒き言を發するをも爲ざりき。ダビドの事より殆ど凡の司祭等を殺し、サウルは己の女がダビドを其家より逃ししとを知るも、言語を以てすら之を辱むるをせざりき。而も其女の爲し、所はサウルに逆ふ所爲たりしに非ずや。サウルの彼の如く爲し、所以の者は、其の至つて力強き手綱たる愛(即ち其女に對する愛)を以て抑制せられたりしに由るなり。愛は人を温和なる者と爲すのみならず、又人を貞潔なる者と爲すなり。己の妻

を當然に愛する者は、縦令極めて佚樂を好むとも、其妻に對する愛の故に、既に復他の女を慕ふと爲さざるなり。聖書に曰く、愛は強くして死(如シテ雅歌八)しと。然れば放蕩は他の原因に由るに非ずして、愛の足らざるに由るなり。愛にして既に諸徳の原因たるからは、我等は極力以て己の心に之を植ゑ付くるやう爲さん。愛をして我等の爲に許多の善徳を生産せしめんが爲、何時も繁盛にして衰へざる。其饒多なる菓實を常に我等に集めしめんが爲なり。斯くの如くせば、我等は此に由つて以て永遠の福樂を受くるを得べし。願はくは我等は皆我等の主イエス、ハリストスの恩寵仁愛に依つて、之を受くるを得んとを、彼と父と聖神とに、光榮權能尊貴は歸す。今も何時も世々に阿民

我等は愛を以て互に相教誨せん

我等は愛を以て互に相教誨せん

〔聖使徒パウロは、コリント前書に、大にコリント人を規責して後終に曰へらく〕我愛もハリストス、イ、ス、に於て爾等衆人と偕に在るなり〔十四〕と。夫れパウロは、彼の如く大に規責して後、猶コリント人を嫌忌せず、其の遠き地に在るに拘らず、猶之を愛し、之を抱き、書札を以て己の心を之に開陳せるからは、其の之を規責して言へる所は、激して言へるに非ず、怒つて言へるに非ず、乃ち〔コリント人の爲に〕慮つて言へるとは、明白なり。凡そ他人を矯正する者は、亦皆當に此くの如く爲すべし。蓋し其人若し單に怒つて他人を譴責せば、己の情慾をのみ満す可きも、若し罪人を規責して之に愛をも表すときは、其譴責の愛に由つて生せしと明白なればなり。然れば我等も、此くの如くして以て互に相教誨せん。規責する者も怒ると勿れ、恕は情慾を表す者にして、矯正の希望を表す者に非ざればなり。規責せらるゝ者も激すると勿れ、其の受くる規責は療

治にして、仇敵の所爲に非ざればなり。若し醫師病者の患部を灼き、而も屢其奏功を誤るも、猶人之を咎めず、灼かれ切斷せらるゝ病者さへ己に此くの如き苦痛を如ふる醫師を己の恩者と認めんには、規責せらるゝ者が規責する者に、此くの如き好意を表し、己の教誨者を仇敵とせず、醫師として、其言を聴納す可きは、猶更のとなり。我等は何人かを規責せん時、大に溫和に大に謹慎して、以て其人に近づかん。爾若し兄弟の罪を犯すを見れば、公然其罪を規責せずして、ハリストスの命せる如く、爾と彼と獨處る時、之を規責すべし〔馬太五十八〕。其人を罵らず、攻撃せずして、憐み悲むべし。若又爾自ら何事かの罪を犯さば、自身も亦規責を謹聽するの用意を爲すべし。余は今述ぶる所を明瞭ならしめんが爲に、更に之を説くべし。今若し爾の兄弟の一人に付いて、惡しき風評行はれたらば、爾は之を棄て置くとなく、下の如く言ふとなかれ。曰く、彼豈智慧を有せざらん

我等は愛を以て互に相教誨せん

や、彼豈己の爲に何事の有益なるを知らざらんや、(箴)に曰ふ人は徒らに爾を愛すべし、徒らに憎ましむべからず、(と)然るを我何の爲に徒らに恨を招くとを爲さんと。此くの如き無智の言は、猛獸に相應せる言なり。否、穉る魔鬼に相應せる言なり、他人を矯正せんと欲する者は、徒らに憎悪を招くに非ずして、將に大なる福樂及名狀す可からざる榮冠を受けんとするなり、彼豈智慧を有せざらんや、てふ語に對しては、余は將に言はんとするなり、彼實に智慧を有せずと。蓋し彼は情慾に酔へばなり、酔ひ且眩めばなり、故に彼の如く言ふと勿れ。又我何を關せん、てふ言に附けて、下の如く言ふと勿れ、曰く、人各己の任を負はん、(六ノ五)と爾若し迷へる者を見て之に助くるとを欲せざらんには、當に自ら至つて大なる責を任ふべし、蓋しイウデヤ人の律法にて、敵の家畜をも棄て置くことを禁せられたらんには、(申命記二)家畜ならず、敵ならず、朋友の靈の亡ぶる

を棄て置く者が如何なる辯護を爲すことを得べきか、彼に智慧ありと言ふも、其は我等を辯護する力なきなり、蓋し幾度か他人に訓誨せし我等も、己の身に關しては責任を全うする能はず、自ら己に助くる能はざりしと屢なればなり、迷へる他人に付いても、亦宜しく此くの如く判断すべきなり、乃ち彼が自ら好き思考を出すよりも、爾に好き忠告を受くるの、容易なるを思ふべきなり、言ふと勿れ、我何を關せんと宜しく何人が斯くの如く言ひ始めたるかを思つて、畏れ謹むべし、蓋し此語たる、カインの語と同一の事を意味すればなり、カイン曰く、我豈我弟の守者ならんや、(創世記)と我等が己の身に屬する事を、他人に屬すと爲すよりして、亦諸種の悪は生ずるなり、實に人よ、爾は何を言ふか、爾豈爾の兄弟に對して、全く關する所なきか、然らば誰が當に彼に對して關係すべきか、彼の不幸を喜び、彼を罵り、彼に害を加へんと務むる不信者か、彼を迫害

我等は愛を以て互に相教誨せん

し彼に對して網を張る惡魔か加之爾は何故彼の如く言ふか爾は曰はんか我善意の言と忠告との成功せざる可きに由ると然れども其の成功せざる可きとは何に由つて之を知るか結局を知らずして自ら現然たる等閑の咎を負ふは此亦極めて無智の事に非ずや夫れ神は將來を熟知せり然れども其の言ふ所屢成功せざりき彼は人々の己に聽從せざるを豫知せしも猶人々に言ふとを廢せざりき自ら己の全く成功せざるを豫知せし神すら人々を矯正する方法を運らすとを廢せざりしならば毫も未來の事を知らざる爾が等閑不注意にして如何なる辯護を爲すとを得べきか世には此事に着手して成功せし者多し彼等は最望なき時に於て殊に能く成功せり然れば假令爾は何事をも成功せざらんと猶少くも己の義務を果すとを得ん無情なると勿れ憐憫せざると勿れ等閑なると勿れ爾の彼言は殘忍と等閑とより生ずるな

り下に述ぶる所よりして見るとを得るが如し今若し爾の肉體の一肢が痛まんに爾は何故言はざるか我何ぞ關せんと加之若し治療を施さば其肢の癒ゆべきとを如何にして知るか然るに爾は猶有らゆる方法を盡して縱令毫も其功を奏せざらんと少くも有益なる事を爲さざりきと答を負はざらんと勉むるなり我等は肉體の肢に付いては此くの如く配慮す然らばハリストスの肢のとを何故等閑にするか等閑にして而して如何なる辯護を爲すとを得べきか己の肢の爲に配慮せよと言ふも爾は余の言を納得せず故に余は爾にハリストスの體の事を思はしむるなり爾をして恐れてなりとも善きに遷らしめん爲なり實にハリストスの體の傷に蔽はるゝを見て猶冷然たらんは恐る可き事に非ずや爾は己の召使否驢馬と雖傷を負ふを見ては冷然たらざるにハリストスの體の疵に蔽はるゝを見て何故冷然として看過する

我等は愛を以て互に相教誨せん

か。此豈無數の罰を受くるに相當せる事に非ずや。之が爲に爾の諸事は皆顛倒し、此の如く無情なるが爲、此の如く等閑なるが爲に、爾の諸事は皆顛倒す。然れば余は爾等に勸む、殘忍を棄てんとを宜しく、夫の罪ある者の許に至り、之に命令の如くせず、兄弟の如くして、忠告を爲すべし。加之爾の忠告は簡短なるべし。殊に愛を以て己の言の嚴格を包み、其餘の事は、彼の意志に任すべし。宜しく言ふべし、我は唯爾に此事を陳べ、此事を忠告するのみ、聽き納るゝと、否とは、爾の自由なり、我は之を強ひず。唯爾の判斷に任すのみと、斯くの如くにして規責するときは、我等は容易に罪を犯す者を矯正するを得るなり。然るに今日我等の行ふ所は、人よりも寧ろ猛獸及無言の動物に相應するなり。乃ち或る人々は何が(罪ある)人のことを聞くや否や、其罪人には何事も言はずして、唯酔ひたる老婆の如く嘔き、而して其際には何時も、人は徒らに爾を愛すべし。

徒らに憎(ま)しむべからず。てふ諺を顧みざるに似たり。人を惡口せんと欲する時には、無益に他人の憎惡を招き、罰をすら招くことを意とせざるも、蓋し惡口は常に憎惡を招くのみならず、罰をも招けばなり。然るに、人を矯正するを要する時には、此遁辭を用ひ、他にも尙多くの口實を用ふ。爾が惡口する時、讒誣する時こそ、無益に人の憎惡を招く勿れ。てふ規則を守る可きに非ずや。何の功をも奏せざるべし。と言ひ、又は「我何ぞ關せん」と言ふ可きに非ずや。然るを今爾は、他人を惡口する時は、此に由つて生ずる憎惡をも、數多の害をも顧みずして、勉めて熱心に勞し、而して兄弟の救贖の爲に配慮す可き時には、何事をも爲さず、他人の爲に煩はしき者と爲ることを欲せず。惡口は、人の前にも神の前にも惡む可き者なり。然れども、爾は此事を思はず。獨處にて爲す忠告の爲、將之に類する規責の爲には、爾は其規責せらるゝ者及神の愛を得るなり。假

我等は愛を以て互に相教誨せん

令其人は爾を憎まんとも神は愈之が爲に爾を愛す可きなり其人も亦
 悪口を受けて憎む時の如く甚だしく爾を悪まざる可きなり悪口を受
 けたる時には彼は爾を害心ある者仇敵として嫌厭す可きも若し爾が
 獨處にて忠告を爲し之に類する規責を爲すときは彼は父を敬ふより
 も尙一層爾を敬ふべし縦令外觀にては怒るも衷心將獨處にては大に
 爾に感謝すべし然れば我等は此事を思うて我等の肢の爲に慮り相互
 には口を鋭くすると無く有害なる語を發して隣の名譽を毀け宛ら戰
 場に於けるが如く攻めつ撃たれつするを爲さざらん或等の口若し
 不節制にして犬肉よりも尙不潔なる食物を用ひ血に濁き汚物を吐き
 我等の口を變じて不潔物の出口と爲し又は之よりも尙劣れる物と爲
 さば縦令齋戒を爲し儆醒すとも何の益あらん不潔物の出口より出づ
 る物は身體を汚すも口より出づる者は屢靈魂を汚す但し余の之を言

ふは空しく悪評を傳へらるゝ者を惜むに非ずして 否此人々は若
 し唯其心を大にして讒誣を忍ばし榮冠を受くるとを得べきなり乃ち
 反つて 此くの如き風評を傳ふる爾等を惜むなり聖書は空しく悪
 口せらるゝ者を幸福なりとし他人を悪口する者には聖なる機密を領
 くることを禁じ(教會)の懷よりも之を逐ふ聖詠者曰く隱に己の隣を誘ふ
 者は我之を逐ふ(聖詠百)と又此くの如き者を認めて聖書を讀むにも堪
 へざる者と爲す故に爾何爲ぞ我が律を傳へ我が約を爾の口に執るも
 (自ら)我の訓を疾み我の言を爾の後に棄るや(同上十六)と云うて後其理
 由をも擧げて曰へらく爾は坐して爾の兄弟を誹る(同上)と但し其處に
 は其人の言ふ所の事の正當なるを否とを明言せざるも他所には之を
 明言して假令爾は眞實を言ふとを得とも猶之を言ふ可からずと言へ
 り主曰く人を議する勿れ議せられざらん爲なり(馬太七)と故に稅吏を

我等は愛を以て互に相に教誨せん

非難せし(咄喇嗔)も、正當に税吏を非難せしに拘らず、猶其罪を定められたり。爾は曰はんか、假使狂妄敗徳の人に遇ふとも、我等は之を規責し、矯正す可からざるかと。曰く、當に之を規責し、矯正すべきなり。但當に余の上と言へるが如くすべきなり。若し爾其人を誹らんに、爾も亦夫の咄喇嗔に似ざらんやう、咄喇嗔の遇ひしと同一の事に遇はざらんやう、注意す可し。而も此に由つて、爾自身も、言ふ者も、聞く者も、誹らるゝ者も、毫も益する所なきなり。否、誹らるゝ者は、其事未だ暴露せざる間は恥づ可きも、既に著明と爲り、名譽を失すれば、最後の羈絆をも脱して、其謹慎を全く廢すればなり。爾の彼を誹る言を聞く者に至つては、更に大なる害を受くるなり。蓋し其人若し、己に何か尊き事あるを認めば、他人の譴責を受くるを見て、驕傲を起す可く、若又缺點あるを認めば、喜で惡に傾く可ければなり。加之言ふ者自身も、亦己の言ふ所を聞く者に惡様に思は

れ、且愈神の怒を招くなり。是故に余は爾等に勸む、我等は一切惡口を棄て、教訓と爲る可き善事のみを言はん。或は爾は、何人かに復讎せんことを望むか。然らば何の爲に其人に復讎せずして、自己に復讎するか。爾若し己を辱めたる者に復讎せんと務めば、宜しくパウルの命するが如くにして復讎すべし。パウル曰く、若し爾の敵飢ゑば之に食せ、若し渴かば之に飲ませよ。(羅馬二十二)と。爾若し此くの如くせずして、徒らに誹らば、是れ自己に向つて、劔を擧ぐるなり。是故に若し人、惡様に爾の事を言はば、爾は宜しく讚辭を以て之に報ゆべし。蓋し此くの如くにして、以て爾は其人に報い、且自らも惡様に思はるゝとを免るればなり。己の惡しき風評を怒る者は、其不潔なる心の爲に、苦むと思はるゝが通例なれども、惡しき風評を受けて之を笑ふ者は、身に何の惡しき事あるを知らずとの、最明瞭なる證據を供ふるなり。然れば、爾若し人を誹つて、自己にも己の

我等は愛を以て互に相教誨せん

言を聞く者にも誹らるゝ者にも益を爲さず却つて唯自己に向つて刃を擧ぐるのみならば宜しく此事を以てなりとも悟得す可きなり爾は本來天國及神の(聖旨)の教理に由つて感激す可きなるも今猶餘りに野鄙にして、猛獸の如く他の人々を噬むが故に、此事を以てなりとも悟得し、以上に述べたる所に由つて謹慎し、一に神の聖旨に導かれ、諸慾の上に立つて、天の福樂を受くるやう爲すべきなり、願はくは我等は皆我等の主イ、ス、ハリストスの恩寵仁愛に依つて、天の福樂を受くるを得んとを、彼と父と聖神とに、光榮權能尊貴は歸す、今も何時も世々に、阿民

我悉く我が所有を施し又我が軀を焚くに委ぬとも若し愛なくば我一も益なし
 (哥林多前書十三ノ三)
 外面にのみイウテヤ人たる者はイウテヤ人に非ず乃内心にイウテヤ人たる者はイウテヤ人なり (羅馬書二ノ廿八、廿九)

金口講話抄終

明治三十六年三月二十五日印刷
 明治三十六年四月二十日發行

東京府下南足立郡千住町大字千住二丁目千五十七番地

著者兼發行者 吉田卯太郎

東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

印刷者 植原儀直

東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

印刷所 建昇堂

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

發行所 正教會事務所

廣告

金口聖哥林多前書講話上編 定價 背皮金四十錢 總布金三十二錢 郵税金八錢

中編 定價 背皮金四十五錢 總布金三十八錢 郵税金八錢 下編 定價 背皮金八十錢 總布金七十二錢 郵税金十二錢

本書は金口聖イオアンの講話集にして哥林多前書の意義を闡明し時人及後人の爲に有益なる教訓を垂れたり

羅馬教會論 總布製定價金三十錢 郵税金六錢 假綴製定價金二十錢 郵税金四錢

本書は露國ヘルソン及オテツサの大主教ニカノル師の著にして羅馬教會の聖神發出論能々不可誤論聖母無罪懷孕說等を歴史的に論評せり規費神學書としてほ勿論一種の教義史として讀むも興味多き書なり

西教一斑 定價金九錢 郵税金二錢

本書は露國長司祭イワンツォフ、プラトノフ師の著にして加特力教及波羅提士丹教の我正教に於ける關係異同等を簡畧に論述せり

基督教主義の徳義 定價金十六錢 郵税金六錢

本書は露人エメ、フサロフ氏の著にして徳義概論、徳義と敬神との關係、其他數項に分ちて論述せり

發行所

東京神田駿河臺東紅梅町六番地

正教會事務所

